

河童とぼんちの夏



鹿児島の一とある村の夏のこと

九州鹿児島は、南国である。

二月ともなれば菜の花が咲き、春が来たかと思うと、長い、蒸し蒸しした夏が駆け足でやってくる。

それでも、北へ向かって九州山地に分け入れば、一足早く夏の終わりが訪れる。

そんな南九州の山々に囲まれて小さな村がある。

まだ高い、真昼の太陽の下を走ってきた古びたバスが蝉時雨の神社の前を通り過ぎ、この村でただひとつの停留所に止まった。

「ありがとう。おじさん、気をつけてね」

と言いながら、半袖セーラー服の女の子が降りてきた。

「智絵ちゃん、今日も早いね」

と、首にかけた手ぬぐいで汗を拭きながら店の中から声をかけてきたのは、停留所の前で駄菓子屋をしている、お梅ばあさんである。駄菓子屋といっても、お菓子だけでなく文房具も売っている。文房具どころか、醤油やメリケン粉、プラモデル、それに本や週刊誌まである。要するに、何でも屋である。お梅さんは、この村の、日常の生活物資をひとりでまかなっているのである。

。

智絵は、

「それも今週で終わりよ」

と言いながら、お梅ばあさんの店に入っていった。今は、二学期が始まったばかりで短縮授業中だから帰りが早い。が、来週からは通常の授業に戻ってしまう。それを考えると、智絵は、うんざりしてしまう。

「しかしなあ、よく三年間も通ったなあ」

とお梅さんは、目を閉じてゆるゆると何度もうなずいた。

この村には小学校の分校しかない。子供たちは、小学校を卒業すると隣の大きな村の中学校まで通わなければならない。毎日バスで行くのだが、隣村まで三十分近くもかかる。智絵が通う高校は、その、隣村にもない。隣村からさらにバスで二十分くらい行った町にあった。このため、高校に通う子供たちは、町に下宿するのが普通なのだ。だから、この村には青春を謳歌する若者がいない。

「智絵ちゃんがいてくれて嬉しかった」

と、お梅さんがぼつりつぶやくように言った。

(この子の顔を見られるのも、あと半年)

智絵は、高校三年生。頭のいい智絵は、きっと都会の大学に行ってしまうのだろう。

「おばあちゃん、天ぷら粉切れてるよ」

と、智絵が店の隅から声をかけた。

お梅ばあさんの店は、四坪ぐらいしかない。そこに、店の商品が押し合うようにして置いてある。それでも、ものが見つからないことなど一度たりとてない。時には、お梅さんが聞いたこともない新発売の調味料を買いに来る村人がいたりするが、

――粉はそこじゃ

と、お梅さんが指さす所を引っかき回せば、ちゃんと商品は手に入るのである。

――町のスーパーより、便利だ

という村の評判が、お梅さんの自慢であった。

しかし、近頃、時々ではあるが、品物がなかつたりする。

――わしも、年かの。迷惑をかけてすまんの

と、お梅さんは申し訳なさそうに笑う。お梅さんはもう、七十をいくつも超している。子供たちから、一緒に住もう、といわれているが、お梅さんは頑として応じない。

――ここが一番いいんじゃ

というのが、お梅さんの口癖だった。

「天ぷら粉だけね。切れているのは」

というと智絵は、さっさと受話器を取り上げ問屋に注文し始めた。

(ほんとに、いい娘じゃ)

智絵を見ていて、お梅さんは思うのである。

(年寄りに一番効く薬は、若いもんの笑顔と優しい心じゃな)

「あっ」

と、智絵が小さな声を上げた。

「どうした」

「がきんちよどもが帰ってきた」

と智絵は、嬉しそうに言うと言いながら店を飛び出した。

「そうかの」

といいながら、お梅さんもあとを追った。お梅さんは、耳も少し遠くなっているのかもしれない。

「あっ、智絵姉ちゃんだ」

と、一番小さな女の子が駆けだした。

「和美ちゃん、転ぶわよ」

智絵が笑いながら言った。

和美は、小学一年生。くりくりした目を輝かせながら走ってくると、智絵の身体に飛びついた

。

「和美、あんた、すぐ転ぶんだから、走らないでよ」

と叱るように言ったのは、和美の姉で、五年生の良子である。

「べーだ」

と和美は、まだ智絵の身体に抱きつきながら悪態をついた。

「こら、和美」

良子は、今度は本当に叱りつけた。和美は、甘えん坊である。あちこち走り回っては、大人を捕まえて独り占めにしようとする。少し注意すると、すぐ、今のように悪態をつく。

(どうも、この子は、気合いが入っていない)

と良子は、小学校五年生ながら思うのである。

「ねえ、おばあちゃん」

と、やっと智絵の身体から離れた和美は、今度は、お梅さんの手を引いた。

「友兄ちゃん、悪いんだよ」

友兄ちゃんというのは、六年生の友一のことである。

「友兄ちゃん、松の枝を折ろうとしたんだよ」

「違うよ、違う。なあ、寛太」

と友一は、助けを求めるように隣に立っている年下の親友に言った。

寛太は友一のことを、

一一友ちゃん

と、同級生のように気軽に呼ぶ。

この村は、子供が少ない。遊び相手が欲しい盛りの少年にとっては、少なからず酷な環境ではある。が、幸いなことに、友一には寛太がいた。いつも二人で遊び、いたずらをし、叱られるのも一緒だった。もっとも、寛太は四年生だから友一が勉強を教えてやる。この時だけは先輩と後輩になるのである。

「友ちゃんは、引っかかったものを取ろうとしたんだ」

と、寛太が落ち着き払って言った。

「何が引っかかっていたの」

と、智絵が小首をかしげた。

「服よ」

と、良子が言った。どうやら友一は、村の大事な松に服がかけられているのを見つけ、松の枝を引っ張って、やっとのことで枝から服を取り外したらしい。

「誰の服じゃ。そんなことをするのは」

とお梅さんは、むっとしている。

「きっと、転がりさんの服よ。あんなところに服かけるのは」

と言う良子も、お梅さん同様憤慨しているらしい。

(また、あいつか)

とお梅さんは、胸の中で舌打ちをした。

転がりさんは是か非か

——転がりさん

とは、当然のことながら村の者たちが付けたあだ名だ。

転がりさんは、本名を

——田所三左右衛門

という。転がりさんの家では代々、長男はこの名前を受け継いでいくという、由緒正しい家柄なのである。

三左右衛門は、一種、奇妙な男であった。

三左右衛門は、この村の田畑のほとんどを所有する庄屋の家の、ひとりっ子に生まれた。

尋常小学校を終えると三左右衛門は、進学するためにこの村を出た。戦前のことである。

やがて、東京の大学を卒業した三左右衛門は、数年してこの村に戻ってきた。すでに両親も死に、親族もいない三左右衛門は、若くして田所家の当主となっていた。

戻ってくるなり三左右衛門は、小作人たちを屋敷に集め大演説をぶちあげた。

「不在地主は、社会のダニだ」

と、いきなり切り出したのである。

当時は、広大な田畑を所有する地主が多数いた。地主たちの中には、小作人に田畑を耕かせ、収穫の一部を小作料として受け取り、都会で贅沢な暮らしをする者が少なからずいた。小作料は高く、土地を耕す農民たちは皆、一様に貧しかった。

三左右衛門は、

「農地は、それを耕す農民のものだ」

と、拳を振り上げて吼える。

——おまえも、そのひとりじゃないか

とは、三左右衛門の唾を浴びながら聞き入っている小作人たちは思わない。

小作人たちは、純朴であった。

——この村は、小作料が安い。だから、わしらも食ってゆける。庄屋さんのおかげじゃ

と、素直に感謝している。それなのに、この、三左右衛門はどうしたというのだろう。

「わしの家は、代々、貴君らを搾取していたのだ」

そう言うと三左右衛門は、腕を組んで天井を振り仰いだ。嘆いているのであろう。その三左右衛門の耳に小作人たちがぼそぼそ言い合っているのが聞こえてきた。どうやら、

——搾取とは何のことだ

と語り合っているらしい。

(いかん)

三左右衛門はうろたえた。屁理屈がすぎたらしい。

「要するにだ」

三左右衛門は畳の上にあぐらをかいた。

「お前たちに、土地をやる」

小作人たちは、驚き、あきれた。先祖伝来の土地をくれてやるなど、たわけ者のすることであろう。

もっとも、ただでくれてやるわけではない。三左右衛門は、土地を小作人たちに売るというのである。しかし、小作人に現金があろうはずがない。毎日食ってゆくのが精一杯なのである。が、三左右衛門は、解決方法まで用意していた。

「組合を作れ」

と、三左右衛門は言う。組合を作って、田畑を担保に組合が銀行から金を借りる。借金の返済は、三左右衛門に納めていた小作料を充てる。

「どうだ」

三左右衛門は得意顔であるが、何のことはない。小作料を納める相手が、三左右衛門から銀行に変わっただけの話である。

食ってゆけるなら、という条件で小作人たちは、その話を受けた。毎日食ってさえいければ、たとえ苦勞しても土地が自分のものになるのである。苦勞のしがいもあるというものであった。

さっそく三左右衛門は、銀行と話をつけた。

土地の売買の契約が終わると三左右衛門は、小作人たちに一言の声もかけずに村を出て行った。今は土地持ちとなった元の小作人たちは、

「三左右衛門さんに、お礼を言わにゃ」

と言い騒いだが、三左右衛門の行方はようとしてしれない。

数ヶ月後、三左右衛門が村に戻ってきた。それもアメリカ製の車に乗ってやってきた。

車の周りに、村の者たちが集まってくると、

「触っちゃいかん」

と、怒鳴りつけた。小作人たちがお礼を言っても、

「ああ、ああ」

と、うなずくだけである。社会正義を実現したことなど、もはや興味もないらしい。

やがて、三左右衛門は、家財道具を車に積み込んで村を出て行った。

それから二十年ほど、三左右衛門は、この村と音信不通だった。

三左右衛門の屋敷は、戦争が終わってすぐ、村の者たちが取り壊して農地にした。といっても、すでに屋敷は、三左右衛門のものではない。三左右衛門は、小作人たちに土地を売る際に、

「ついでに、家も買え」

といって、買わせてしまったのである。それでも村の者たちは、三左右衛門さんの屋敷だ、と言って交代で掃除をし、修理もしてきた。しかし、日本が戦争に負け食べ物が不足したとき、ついに取り壊すことになった。

それから十数年がたったころ、三左右衛門が村にひょこりと現れた。

今度は、国産の小さな自動車に乗ってやってきた。あちらこちらが凹んでいて、やたら、ぶーぶーとエンジンがうるさい。

「帰ってきたぞ」

と三左右衛門は、言い回したが顔を覚えている者は少ない。三左右衛門が田畑を小作人に売ったのは四半世紀も前なのである。当時の小作人たちは、もう死んでいたり、そのとき戦争に行つて三左右衛門を知らなかったり、すでに村を出て行つたりで、あの時のことを知っている者は数えるほどしか残っていなかった。

我が名は転がりさん

三左右衛門は早速、活動を始めた。

自動車で町から牛肉を仕入れては、農家を回って売り込んだ。牛肉は高く、電気冷蔵庫も普及していない時代、あまり売れない。そこで三左右衛門は、村の物産を都会で売ろうとした。目を付けたのは良子のおじいさんが老後の楽しみで行っていた、川魚の漁である。良子のおじいさんは、鮎釣りの名人だった。その鮎を買い取って都会へ持って行くのである。

もっとも、良子のおじいさんは、楽しみで釣っているだけだからたいして魚はとれない。そこで三左右衛門は、三メートル四方はあろうかという網を買ってきた。川幅よりも広がった。

「これで、鮎や小魚を捕れ」

という。

「高く買うぞ」

と三左右衛門はいったが、良子のおじいさんはうやむやの返事しかしない。

やがて、三左右衛門はあきらめたのか、魚を捕れとは言わなくなった。

あとで、良子のおじいさんは、家の者に言ったものである。

「魚は河童のもんじゃからな。わしは、少し分けて貰っているだけじゃ」

三左右衛門は、せっかく買った網を自分で使うこともなく、良子の家にうち捨てたまま次の仕事を始めた。

リヤカーと自転車を売りはじめたのである。店舗は、橋のたもとの河原にかけてに掘っ立て小屋を建てた。村の者は、みな眉をひそめた。無許可で建てたことに文句を言ったのではない。

——何も、橋の下に住むことはあるまいて

と、かつての、この村の地主の振る舞いに困惑したのである。

三左右衛門の店は品数を増やし、単車も売れるようになった。車まで売った。もっとも店には、リヤカーも自転車も単車も、見るからに使い古しが一台ずつ置いてあるだけである。車にいたっては、三左右衛門の乗っているおんぼろ自動車が見本であった。

三左右衛門は、店でじっとしていることなどない。積極的に営業に回った。どうせ、客など来ないのである。

農家に押しかけていっては女どもを捕まえ、縁側でころころと糸車を転がす。

「きれいじゃろう」

お前んとこの娘にも良いベベを縫ってやらなにや、と言っては売りつけた。

男どもを捕まえると、車からリヤカーや自転車のタイヤをくるくると転がしてきて、

「新しいタイヤだ。丈夫だぞ」

といって売りつけようとする。

ついには、お梅さんのところにも現れた。

鉛筆やボールペンをころんころんと転がし、

「これからは、みんな金持ちになる。鉛筆もボールペンも飛ぶように売れるようになる」

といって、とうとうお梅さんに買い取らせた。お梅さんは、迷惑である。問屋から買うより

もずっと高い。が、三左右衛門より二十歳ほど年上のお梅さんは、この男を小さいときから知っている。断るわけにもいかないのである。

——三左右衛門さんは、転がるものを売るのが好きじゃ
と村人たちは、笑いながら言い合った。
この村の神社の神主である、『いっきさん』などは、
「三左右衛門は転がし屋さんじゃな」
とっては笑った。

が、そのうち、三左右衛門の事業が変化してきた。

村にいる時間がだんだん少なくなってきた。

時折、村役場の人間や都会のビジネスマンなどを連れて戻って来ては、また出て行く。

やがて、三左右衛門が何をやっているのかが村人たちに知れた。村の道路の舗装や、分校新築などを村役場にかけ合っていたのである。

最初は村人たちも喜んでしたが、やがて眉をひそめるようになった。三左右衛門は、舗装道路にするには道幅が狭すぎるから田んぼを削る、という。田んぼを削られる者も、そうでない者も、皆、いやがった。が、三左右衛門は、村役場の役人たちまで連れてきて説き伏せた。

分校の建築の時もそうだった。

この村は、山を背にした神社を起点に、扇形に広がっている。神社の後ろを流れる川は、扇の縁に沿うように村の西側を南に流れ下り、やがて、村を分けるように東に向きを変える。集落は、この川が抱きかかえる内側にあり、かつては分校もそこにあつた。もともと、分校といっても少し庭が広いだけの、ただの平屋にしかみえない。

しかし、分校とはいえ、歴とした小学校である。

「新築する以上は、子供たちが喜ぶようなものせんと」

といって三左右衛門が示したのは、川を西へ渡った場所である。神社の前の三叉路を西へ向かい、お梅さんの店を通り過ぎ、松の木のある橋を渡り、三百メートルほど行ったところであつた。

皆、いやがった。それもそのはずで、橋を渡るとすぐに山が迫り、昔から家もないのである。

それでも、三左右衛門は無言を言わず強行した。結果、木造りだったが、小奇麗な校舎が建つた。

その校舎が出現したとき、村人たちは素直に喜んだ。子供たちも、大いにはしゃいだ。が、三左右衛門のやり方には、どうも釈然としない。それとは異なる不快感を感じているうちに、とんでもない話が伝わってきた。

——分校の建築費が水増しされていたらしい

という噂話である。真偽のほどはついにわからなかったが、村人たちのあいだには三左右衛門に対する漠然とした不信感が残った。

そんな時、村の神社が台風の雨風で傷み、修理することになった。村人たちは、

——三左右衛門さんには言うな

と、ひそひそと言い合った。

が、三左右衛門はどこで聞きつけたのか、案の定、ちょっかいを出してきた。三左右衛門は、ポンコツ車で神社に乗りつけ、修理の見積もりまで出した。途方もなく高かった。

(こいつめ、ふっかけるつもりか)

と、いっきさんは思った。いっきさんは、お梅さんと同じ年で、三左右衛門をよく知っている。おまけに、代々神主の家に生まれたから三左右衛門の小作人であったこともない。

「いらん世話じゃ。帰れ」

といっきさんは、三左右衛門を追い返してしまった。

後日、いっきさんが村の寄り合いで言った。

「三左右衛門は、ものを転がしているというより、あれじゃな、自分がころころと転がっているだけじゃな」

それ以来、三左右衛門は、その、先祖代々の名前ではなく、

――転がりさん

と、呼ばれるようになってしまったのである。

「転がりさんが庄屋さんだったって本当なの」

と、良子がお梅ばあさんに聞いた。

「そうじゃよ。直系ではないがな」

庄屋の田所さんの家では代々、庄左右衛門という名を受け継いでいたのだが、庄左右衛門の血筋は、百年ほど前に絶えた。それ以後は、三左右衛門の家が庄屋を受け継いできたのである。

「庄左右衛門さんが死んだのは河童の呪いなんだぞ」

と、友一が顔をこわばらせて恐ろしそうに言った。

山降ろしの風が吹き抜け、松の枝がざわざわと音を立てた。

橋のたもとに聳える大きな松の木――その枝々は、まるで何かを追いかけるかのように庄屋さんの屋敷があった方向へ伸びている。

枝ばかりではない。大きな幹も途中から曲がり、庄屋屋敷のほうをを向いている。松全体が、今にも動き出しそうな雰囲気だった。

みんな、息を潜めるようにして松の木を見つめている。

和美が、お梅ばあさんの袖をしっかりと握りしめた。

――呪いの一本松

と村人たちは、この松の木を呼ぶ。

この松の木は、ずっと昔から、庄左右衛門さんの血筋が絶える前から、ここにあった。

庄左右衛門の血筋が絶えたのは、今から百年以上も前の、江戸時代のことである。

その頃、この村の川にはまだ、たくさんの河童が住んでいた。河童たちは時々、きゅうりを盗んだり、川辺に水を飲みに来る馬の足を引っぱったりしていたはずもしたが、それ以上の悪さをする事もなく、人間たちとつかず離れずの関係が続けていた。

ある年の夏の初めのこと、この村を台風が襲い、強い雨が降った。川は奔流となって山を下り、橋を流し、村の中に溢れ出た。この山間の村は盆地にあり、起伏もほとんどなく川の流れも緩やかだが、大量の雨が降ったりすると、狭い川幅では水を持ちきれず、数年に一度くらい洪水が起こるのである。

その時、

「堤を築こう」

と立ち上がったのが、村で一番年寄りだった庄屋の庄左右衛門だった。

この村の川が氾濫するのは、決まって橋を越えたところである。神社の裏手から緩やかに弧を描くように流れてきた川は、橋を越えてしばらくいったところで、くの字のように折れ曲がっている。この、曲がっているところで水が溜まる。しかも、対岸は山が押し寄せて高くなっているために、水は岸の向こうに出ることができず、その勢いを村に向けて押し寄せてくるのである。

庄左右衛門は言った。

「川の東側に、村を守るように堤を築く。それから、向こう岸の、川の折れ曲がっているあたりを低くして水の逃げ場を作る」

村人たちは、みな賛成した。が、今は夏である。この季節、田んぼに生える雑草はすくすくと育つために常に刈り取らなければならない、堤造りに精を出すわけにはいかない。

「大丈夫だ」

と、庄左右衛門は笑った。

「河童に頼もう」

というと庄左右衛門は、村人たちの顔を優しい目で見渡した。

村人たちは、半信半疑である。河童は力持ちだ。ひとりで人間の何倍もの仕事をするに違いない。しかし、河童が働くところなど誰一人として見たことがない。

——河童は怠けもんじゃ

と村人たちは、みな思っていた。

しかし、庄左右衛門は、

「まあ、一度、河童と話をしてみよう」

といて、笑うばかりであった。

あくる日、庄左右衛門は、橋のたもとの松の木陰に床机を広げ、それに腰かけて河童たちが出てくるのを待った。

村の年寄りや若者が数人、庄左右衛門を取り囲んでいる。

(これでは、話ができんなあ)

と、庄左右衛門は思った。みな、殺気立っていた。年寄りも若者も、目つきが変わっている。若者たちは手に硬い棒を持ち、河童が少しでも不埒なまねをすれば叩きのめしてやろう、と言わんばかりである。

「来た」

橋の上から上流を見つめていた若者が叫んだ。

上流から、河童たちが近づいてくる。しきりにしゃべっているのは、子供の河童のようだ。甲高い声は、きっと母親河童で子供たちに注意しているのであろう。人数にして、十数人はいる。

橋の近くまで来て、不意に、河童たちの声がしなくなった。ひと固まりになって、じっと橋の上の若者を見つめている。

「みな、離れろ」

庄左右衛門は、村人たちを遠ざけると、橋の上から河童たちを手招きした。

河童たちは、ひとりの河童を先頭に静かに近づいてきた。一番先頭の河童が、どうやらこの群れの長老らしい。

庄左右衛門は、橋の上で、長老河童と何か話をすると、松の下へ戻り床机に腰をおろした。しばらくして長老河童が現れ、川から上がって庄左右衛門の前に座り込んだ。

庄左右衛門と長老河童の話は長かった。日が高くなっても終わらず、短かった人の影がだんだ

ん長くなってきた。遠くで見守っていた若者のひとりが、とうとう痺れを切らして庄左右衛門のところへ走り出した。他の若者もそれに続いた。若者たちは棒をしっかりと握りしめ、槍のように突き出しながら駆けた。

が、駆けだした若者たちの動きがぴたりと止まった。庄左右衛門と長老河童が、共に手を叩きながら大笑いしたのだ。庄左右衛門がゆっくりと立ち上がると、河童も腰を上げた。庄左右衛門が河童の肩に手を置いて何か言うと、河童は、深々とお辞儀をした。

——河童もお辞儀をするのか

驚く若者たちを尻目に、河童は川に戻っていった。

長老河童を取り囲むように、河童たちが何か話しながら川を泳ぎ上っていく。

それを見送る庄左右衛門のもとに、村人たちが駆け寄ってきた。村人たちが何を言っても、庄左右衛門は、答えなかった。ただ、

「河童もこの村を愛してくれているんじゃないなあ」

と、つぶやいただけである。

翌日から、河童たちが総出で堤造りを始めた。全部で、五十人ほどもいるだろうか。庄左右衛門から借りたもっこで土を運ぶ者もいれば、鋤を使って土を掘り返す者もいる。川の中から指示を出している数人は、年寄り河童であろう。女河童も子供河童も働いている。

それにしても河童は、なんと力の強いことだろう。もっこを二つも三つも棒にぶら下げて、軽々と二人で担って運んでいく。人間なら、もっこひとつでも足取りが重くなる場所である。

子河童たちは、向こう岸で、水の逃げ場を作るために鋤を振るって斜面を削り、川原を広くしている。女河童たちは、兩岸に分かれていた。向こう岸の女河童は、子河童が掘り返した土をもっこに詰め、こちらの岸の女河童は男河童が運んできた土を、鋤を使って平らに延ばしている。

河童たちは、日の出から日の入りまで働いた。

——よく働くのお、河童は

と、村の者たちも感心した。

河童たちは確かによく働いたが、その食欲もすさまじかった。ひとりで、米一升、魚三匹、きゅうり十本を平らげた。それも、日に三度である。しかも、五十人分であった。これを、すべて、庄左右衛門がひとりでまかかった。

庄左右衛門、倒れる

庄左右衛門は河童たちが働いているあいだ、松の木陰に野点傘を広げ、ずうっと河童たちを見守った。季節は真夏である。村人たちは、庄左右衛門の身体を心配して、時には家で休むように言ったが、庄左右衛門は、頬笑みながら首を振った。

しかし、とうとう、お盆も過ぎたある日のこと、庄左右衛門は体調を崩し、松の木の下には現れなかった。代わりに、庄左右衛門の息子の太郎が松の木の下で河童たちを待った。

しかし、やがて現れた河童たちはこの日、働くのをやめた。太郎が事情を話すと、河童たちは、川の真ん中で一団となって話し合っていたが、長老河童をひとり残して帰ってしまった。

驚いたのは太郎である。橋の上から河童たちを呼び止めようとしたが、河童たちはどんどん川をさかのぼってとうとう姿を消してしまった。

呆然と河童たちを見送る太郎のもとに、長老河童が歩み寄ってきた。

「庄左右衛門さんに合わせてほしい」

と、長老河童は言った。

「食事なら用意してある」

と太郎は、喚き散らした。が、河童は首を振って、庄左右衛門に合わせろ、との一点張りである。

——俺が信用できんのか

と太郎は、長老河童を睨みつけた。河童は動ずることもなく太郎の目をじっと見返している。太郎は、河童の目を見るうちにだんだん気味が悪くなってきた。当たり前だが人間の目とは違うのだ。

(妙にきらきらしてやがる)

それだけのことだが、もはや河童に良い感情を持っていない太郎には妖異なものにしか見えない。

——食べ物切れ目が縁の切れ目か

と怒鳴りつけたかったが、大きく息を吸い込んで堪えた。ここで、河童を怒らせれば、堤は完成できないのである。ここは、この、食い意地の張った河童に頭を下げるしかない。

——しかし、なんという屈辱

と、今年二十八歳になる太郎は思った。太郎は、この歳になるまで、こんな無礼な仕打ちを受けたことがない。

太郎は、河童に向かってあごをしゃくると屋敷に向かって歩き出した。

庄左右衛門は、布団の上に起き上がって待っていた。村の者の知らせで、太郎と河童たちの成り行きをすでに知っていたらしい。

太郎は、庄左右衛門が起きているのを見ると慌てふためいて寝るように言った。が、庄左右衛門は、太郎に、

「お前は下がっている」

と言うと、長老河童を座敷に招き入れた。

(たかが河童一匹に、親父殿は気を使いすぎる)

太郎は心の中で、河童の頭をひとつ、思いっきり引っぱたくと、廊下をどすんどすんと踏みならして去っていった。

翌日からまた、河童たちは堤造りを始めた。

庄左右衛門も松の木陰に座り続けた。あの、太郎を不快にさせた長老河童が、日に何度も庄左右衛門のもとに行っては話し込む。

村人たちは、それを遠くで見ながら、
——庄左右衛門さんの身体は大丈夫か

と言い合い、太郎にもそう言った。太郎も心配しているが、庄左右衛門は言うことを聞かないのだという。

「親父殿は」

と太郎の声は、金切り声である。もはや、感情の抑制がきかなくなっている。

「河童どもにこき使われているのよ」

こき使っているのは人間の方であろう。だが、松の木陰に野点傘を広げているとはいえ、この炎天下に身をさらしている親父殿を見ていると、そうとしか思えない。

庄左右衛門は、時折立ち上がっては、河童に声をかけた。やれ、足下に注意しろだの、それ、頑張れだの、少し休めだの言いながら、しわの刻まれたふくよかな顔に、いつも笑みを湛えている。

(ああまでせんと、河童どもは働かんのか)

太郎には親父殿が河童に媚びへつらっているとしか思えない。河童どもには日に三度の贅沢な食事を与えている。それで十分ではないか。誰が見ていなくても働くのが当然ではないか ——

(しょせんは、動物よ)

と、太郎は思わざるをえない。

太郎の胸くそ悪さは、日々募っていく。それとは対照的に、堤は完成に近づいていった。ほとんど河原がなかった向こう岸は、橋のたもとから川の折れ曲がっているところを通り越して、川が東に向きを変え始めるあたりまで切り開かれた。

この山間の村は、今も昔も貧しい。村人たちは、川の向こう岸に出現した土地を見て大いに喜んだ。

「木を植えよう」

という者がいる。木が成長したら、薪を集める手間が少しは楽になるだろう。

「いや、からいもがいい」

という者もいた。夏に水がでてでもすぐに水は引く。その程度なら、からいもは充分育つであろう。

「この土地は誰のもんじゃろかい」

などとは誰も言わない。この、新しくできた土地は、村の者が共同で使用し、村の者全部で手

入れする、入会地になるのが当然のことであった。

「それに、あれくらいなら、お代官様も見逃してくれるじゃろう」

江戸時代、この村は薩摩藩の領地だった。薩摩藩は、年貢の取り立てが厳しかった。武士の数が多すぎるのである。このため、農民二人で武士ひとりを支えなければならない。時には、収穫の半分以上を年貢として納めなければならなかった。この、川岸に開かれた土地に食べ物を植え、年貢がかからないとしたら農民にとっては大助かりなのである。

八月もあと少しで終わるころ、とうとう堤は完成した。

その夜、庄左右衛門は、新しくできた堤の上に、みんなを集めた。河童たちも村の者たちもやってきた。庄左右衛門は、ありったけの酒と食べ物を用意して松の根本で待っていた。

「今日は、食べ放題、飲み放題じゃ」

というと庄左右衛門は、長老河童に近寄り、河童の手に杯を持たせ、自ら酒を注いだ。

それを合図に、河童と村人たちが入り交じった祝宴が始まった。

「ご苦労じゃたのお」

と、あちらこちらで河童たちをねぎらう声が上がった。

「飲み過ぎるな。溺れるぞ」

と叫んでいるのは、心配性のばあさん河童である。

「良い月じゃ」

村の年寄りがため息をつくように言った。松の真上に、三日月がかかっていた。か細い月の光が夜空を流れる雲を照らし、夏の日差しから冷めた風が季節の変わり目を告げるようにさわさわと吹いていた。

やがて宴も終わり、村人たちは総出で河童たちが帰っていくのを見送った。

庄左右衛門が屋敷に戻ったのは、もう深夜だった。

寝所に入った庄左右衛門は、そこで倒れた。

「うっ」

という声とともに臥所の上に倒れ、そのまま意識を失った。

次の日の夜、庄左右衛門の屋敷に、あの、長老河童が現れ、庄左右衛門に合わせてくれ、と言った。

「親父殿は臥せっておる。帰れ」

と、太郎が怒鳴りつけた。河童たちには働いているあいだ、充分すぎるほどの食べ物を与え、最後には祝宴まで開いてやっている。働きに見合うだけの報償は与えてやっているはずであった。

長老河童は、次の夜もやってきた。

「庄左右衛門さんにお会いしたいんじゃ」

と、拝みこむように言う。

「病気じゃ。帰れ」

帰らねば殺しかねないほどの剣幕である。

太郎は、長老河童を叩き出すと庄左右衛門の寝所に急いだ。庄左右衛門は、祝宴の夜倒れて以来、正気に戻らない。ただ、時折、うなされるように、

「約束が」

と、呻く。

(河童どもに、何か約束させられたに違いない)

と、太郎は思った。あの長老河童は、その約束を果たせ、と催促にやってきているのだろう。太郎が「帰れ」と怒鳴りつけても、何か言いたそうに太郎の顔を見つめるのが、その証拠に違いない。

(親父殿の身体を気遣う気持ちもないのか)

以前は、河童の目が薄気味悪かった。しかし今は、あの目を思い浮かべると、叩きのめしてやりたい思いに駆られる。

長老河童は、毎夜やってきた。

「遠くからでも、せめて一目だけでも」

と、這いつくばって太郎に訴えた。

「親父殿に何をせがむつもりだ」

と太郎が言うと、この、年老いた河童は、

「何も」

といて首を振った。

「ならん。帰れ」

河童との約束が、とうわごとのように言い続けている庄左右衛門である。ふと正気づいたときに河童の姿を見つければ、もっと容体が悪くならないとも限らない。

「親父殿が良くなったら合わせてやる。帰れ」

と、太郎は吼えた。

それでも、河童は、毎晩やってきては、太郎から足蹴にされて帰っていく。

しかし、とうとう、倒れてから七日目の夜、庄左右衛門は一度も意識を取り戻さないまま、死んだ。

太郎は、庄左右衛門の身体にとりすがり、

「河童め、河童め」

といいながら涙を流した。

その時、女中が転がるように部屋に入ってきた。

——河童が来た

という。

太郎が、すくっと立ち上がった。

庄左右衛門を取り囲む人々が見守る中、太郎は、床の間の刀を手を取った。皆、驚いたが声もかけられない。涙に充血した太郎の目は赤く光り唇の両端はつり上がっていて、止めようとする者がいれば切り捨ててしまいかねない形相だった。

太郎は式台に立つと、腰をかがめてこちらを見ている河童の目を見据えた。河童の目が気弱そうに太郎を伺っている。何かを探るような、ずるそうな目だ。

「親父殿は死んだ」

太郎は、低い声で言った。河童が背を伸ばして、目を見開いた。どうやら、驚いているらしい。

(白々しいやつだ)

と、太郎は思った。それでも長老河童は、両手を胸の前ですり合わせながら、合わせてくれと言った。

「約束が」

と、長老河童が言ったとき、太郎の身体が宙に舞った。土間に降り立つや、刀を抜き、鞘を放り捨て、河童に斬りつけた。刀の切っ先が、腰を抜かして両手を付いた河童の鼻先をかすめた。

河童は、身を翻して四つん這いになると、手足をやみくもに動かして逃げ出した。その後ろから、再び太郎が斬りつけた。が、背中の中羅に跳ね返され、カツンという音がした。それが、太郎をますます気狂いにさせたのか、

「おのれ、河童」

とひと声喚くと、逃げる河童を追いかけ始めた。

長老河童は、川へ向かって必死に走った。が、ついに、橋のたもとの松の木の下で追いつかれた。背中から切っても、中羅があって切れない。太郎は、前に回り込んで河童の行く手を遮ると、刀を振り上げて、じりじりと河童を松の根本に追いつめた。

長老河童は、がたがた震えるだけで声も出ないようであった。

太郎が河童に向かって刀を振り下ろした。

刃が、がきっと松の幹に食い込んだ。

「ぎえー」

という悲鳴を残して、河童の身体は堤の上を吹っ飛び土手を転がり落ちていった。

(切り損じた)

と思った太郎は、川をのぞき込んだがもう河童の姿は見えなかった。

松の木の根本に、切り落とされた河童の手だけが転がっていた。

太郎は、無惨に転がるかっぱの手をじっと見つめていたが、ふん、と鼻で笑うと河童の手を拾い上げた。

太郎は、庄左右衛門の名を襲名し、この村の庄屋の当主になった。村の者は、みな祝いに駆けつけた。太郎は人の世話をするのが好きで、村の寄り合いにも熱心だったし、病人がいれば薬を持って行ってやり、夫婦喧嘩があれば双方の言い分を十分に聞いてやった上で仲直りをさせたりした。

——庄左右衛門さんは、まだ若いがたいした人じゃ
と村人の評判も高かった。

しかし、初雪が降るころ、不幸が襲った。

太郎の弟が、まだ嫁も貰わないのに血を吐いて死んだ。

不幸は、それに止まらなかった。

年が明けてすぐ、二軒ある分家のうちの一軒が火事になり家族の者はみんな焼け死んだ。

桜の花が咲くころ、この村を疫病が襲った。

太郎は、鹿児島城下から医者を呼び、病の重い者は自分の屋敷に引き取って看病した。そのおかげなのか、この村では死んだ者は三人しかいなかった。

その三人の死者のうち、二人までが太郎の身内だった。死んだのは、分家の当主の三左右衛門と、太郎の妻であった。

だれ言うともなく村には、

——河童の呪いじゃ

という話が広まっていった。太郎の耳にもその噂は入ってきた。しかし太郎は、苦笑するだけで問題にもしなかった。

疫病騒動が収まり梅雨も明けようかというころ、五歳になる太郎の一人娘が風邪を引いたのか寝込んでしまった。だれもが四、五日もすれば良くなるだろうと思っていたが、いっこうに良くならない。それどころか、娘はだんだん痩せていくようであった。

太郎は手当を尽くしたが、原因もわからず、どんな薬を飲ませても良くならない。

太郎は、寝食を忘れて看病に没頭した。

が、とうとう娘は、八月の終わりのころ、黄泉の国に旅立っていった。

通夜に訪れた村人たちは、

——死に顔は、うっすらと微笑んでいて、まるで観音様のようにじゃった
とあって、互いの悲しみを慰め合った。

娘を失ってから太郎は、屋敷に閉じこもるようになった。

家族を失って、ひとりぼっちになった太郎の屋敷は寂しかった。特に、娘の、あの幼い声が聞こえてこないのが太郎にはつらかった。風の音がすれば、娘が夜風に打たれて庭に立っているような気がした。風に舞う落ち葉の音を聞けば、娘が庭で遊んでいるような気がした。時には、娘の声が聞こえてくることさえあった。幻だとは分かっているが太郎は、娘の姿を探して屋敷の中を走り回った。

それでも太郎は、庄屋の務めだけは果たした。村人たちに合い村の世話をしているときだけが、太郎の気が休まる唯一の時間だった。村人たちもそんな太郎の気持ちを察して、何くれとなく村の出来事を太郎に相談した。

しかし、村人たちが、決して太郎に言わなかったことがひとつだけあった。

村はずれの、橋のたもとにある松の木のことである。

——どうも、松のようすが変じゃ

と、村人たちが言い出したのは、年が明けてすぐのことであった。

——松の枝がのお

と村人たちは、ひそひそとささやく。

この村には、北から山おろしの風が吹いてくる。だから松の木は、風にあおられてその姿を南に向けてわずかに傾いている。橋のたもとに力強く根を張り、枝をいっぱい広げ、天に向かって伸びていこうとするその姿はまるで、この村の守り神であるかのように雄々しかった。

ところが、いつのまにか、村人たちも気づかないうちに枝振りが変わってきていた。枝の先が、一斉に庄屋屋敷の方を向きはじめ、そのうち、枝そのものも庄屋屋敷に向かって曲がり始めた。太郎の一人娘が亡くなるころには、松全体がまるで、庄屋屋敷を絡め取ろうとするかのように姿を変えていた。

村の者たちは、松の木のことにも触れることさえしなくなった。

そして、冬——

雷雲が初雪を運んできた。夕方から降り始めた雪は、夜になっていっそう激しくなり、すさまじい稲妻が村の上空で荒れ狂った。

暖房などない昔の家では、こんな寒い夜はさっさと寝るしかない。村の家々から、次々とろうそくの灯火が消えていった。屋根にも田にも木々にも雪がうっすらと積もり始め、しんと静まりかえった村里は、淡い陰影の世界に沈んでいった。

稲妻はまだ、やまない。

その、荒れ狂う雷鳴と、しんしんと降る雪の中を、狂ったように走る男がいた。

太郎である。

抜き身の刀を右手に持ち、松に向かって駆けていた。

屋敷から奉公人たちが何か叫びながら追いかけてくる。

太郎は、一度も振り返らなかった。

松の木の下まで来ると、立ち止まることなく刀を振り上げ、松の枝に向かって跳ねた。太郎は、我が家に災いをもたらした、この松の枝を切り落とそうとしたのだろう。

が、太郎の願いは果たせなかった。刃が松に向かって翻った瞬間、轟音とともに太郎の身体を

雷が撃ち、地に叩きつけられた。

屋敷の奉公人たちが太郎の身体を抱き起こしたときには、すでに、死んでいた。

庄屋の家は、分家の三左右衛門が継ぐことになった。

三左右衛門は、河童の手を、村の神社に祠を建てて祭り河童の呪いを解こうとした。その甲斐あってか、その後、三左右衛門の家には事故は起こらなかった。

しかし、すぐに、村の者たちは奇妙なことに気づいた。

太郎が長老河童に斬りつけたときについた松の幹の刀傷の跡が、いつまでも生々しいのだ。太い幹にざっくりと食い込んだ傷跡は、あれから一年以上もたっているのに、まるで、つい今しがた斬りつけたようにその肌をさらしている。

やがて、だれともなく、この松を、

——呪いの一本松

と、呼ぶようになった。

松につづく橋の呼び名もいつしか変わった。

それまでは単に、西の山に行く橋という意味で西山橋と呼ばれていたが、

——涙橋

と、呼ばれるようになった。

涙、とはだれの涙なのか —— 太郎の涙なのか、呪いで死んでいった者たちの涙なのか、それとも長老河童の涙なのか、村人たちは詮索することもなく、だれも語ろうとはしなかった。

お梅さんと、村と河童と昔話

今、松の木を見つめているお梅さんも智絵も、四人の子供たちも、そんな伝承を小さいころから聞いて育った。それでも、あの松をこうして見つめていると、なにやら不気味な気配が漂ってくる。

和美が、お梅さんの袖を引っ張りながら恐る恐る言った。

「転がりさんも呪われてるの？」

お梅さんは、空を見上げて笑い出した。

「呪いがかかっておるんじゃたら、今頃は大金持ちじゃろう」

転がりさんのことだ。きっと、呪いのかけられた我が身をだしにして一旗揚げようと思うに違いない。

「呪いが、三左右衛門に呪われるわい」

というと、お梅さんはまた笑った。

「おばあちゃん」

と今度は、寛太が尋ねた。

「河童見たことある？」

「ああ、あるよ」

「うそー」

と、驚いたのは良子である。

お梅さんは、明治生まれである。

「わしの子供のころには、時々見かけたもんじゃよ」

「話したことあるの？」

と、智絵も目を丸くしている。

「話したことはないのお。人間の気配がすると、すぐ姿を消してしまいおったからのお」

「たくさんいた？」

と、和美がお梅さんの顔をのぞき込んだ。

「いやあ。見るのはいつも、二、三人じゃったなあ」

お梅さんは、目を細めて松の木を見やりながら続けた。

「良子ちゃんくらいの年だったかのお。いっきさんと一緒に見たんじゃ。土手に、男河童と女河童が並んで座っておった」

「もしかして」

と、高校生の智絵は反応が早い。

「恋人同士だったりして」

「たぶん、そうじゃたんじゃろう。男河童は、土手に寝ころんで空を見上げておった。女河童は手を付いて、男河童を見ながら何か話しかけておった」

そう言うと、お梅さんはにっこりと微笑んだ。

「幸せそうじゃったなあ、あの二人は」

「ふうーん」

と良子は、何か納得できないようではある。

「でも、今は全然見ないよ」

と、友一が言った。

「そうじゃのお。いつ頃からかのお。河童の姿を見かけんようになったのは」

お梅さんは、遠い記憶をたどるようにゆっくりと昔の話をし始めた。

かつて、河童とともに暮らしていたこの村も、お梅さんが子供のころには河童は、人間に隠れてひっそりと暮らすようになっていた。

それでもまだ、川や河原に河童の姿を見かけることもちよくちよくあった。

「村の中が騒がしくなってから、めっきり減ったのお、河童は」

と、お梅さんは言った。

今も、この村は静かである。しかし、お梅さんの子供のころはもっと静かであった。今よりも村人の数は多かったし、子供たちもたくさんいた。しかし、バスなどはなく、どこへ行くにも歩いていかなければならない。だから、人の出入りは少なかった。この村で生まれ、田を耕し、この村で一生を終えるのが普通だった。

「外からやってくるのは、学校の先生と駐在さんと、行商人だけじゃったなあ」

お梅さんは、なにやら懐かしそうである。

「そのころには、まだ河童はいたんじゃ」

とお梅さんは、力を込めた。しかし、バスも走るようになり、だんだんとこの村も人の出入りが多くなっていった。

「この村は貧しいからな。都会で働くために一家で引っ越していった者もいた」

それだけではなかった。村の小学校を出て、苦学して大学へ行き、都会で成功して親を呼び寄せる者もいた。

「考えてみれば、出て行く者ばかりじゃったな」

というと、お梅さんは寂しそうに微笑んだ。

「戦争中は騒がしかったのお」

と今度は、ため息をついた。中国との戦争が始まり、しばらくすると若者たちが兵隊になって村を出て行った。若者が戦争に行くことが決まると村の女たちがみんな、一本の針を使って肌着を縫ってやった。

——これを着て、お国のために尽くせ

と、表向きはそういうことだが、女たちは、

——無事にこの村に帰ってきておくれ

という心を込めて、一本一本、糸を通した。

若者たちが村を出て行くときには、そのたびに村を挙げての壮行会が開かれた。バスに乗って出征する若者を村人たちが万歳三唱と日の丸の旗を振って見送るのである。

お梅さんの二人の息子も戦争に行った。

時々、戦地から便りを寄こす。

——元気である。病気ひとつしていないから心配しないでくれ
という。

お梅さんと、お梅さんの旦那さんは、夜、店を閉めてから、人に知られないように、何度もその手紙を読み返しながら涙を流した。

アメリカとの戦争が始まったころ、お梅さんのご亭主が亡くなった。

お梅さんは、そのことを戦地の息子たちには知らせなかった。

生活は、だんだんと苦しくなっていた。物資が不足し、何でも屋のお梅さんの店にも品物が入らなくなってきた。お梅さんの家には猫の額ほどの畑しかない。やがて、食べるのにも困るようになった。お梅さんの窮状を見て村人たちが米や野菜を少しずつ持ってきてくれた。良子のおじいさんは、川で釣った魚を分けてくれた。

しかし、お梅さんとしては村の人たちの好意に甘えているばかりでは心苦しい。そんな時、いっきさんが、神社の境内のなかに畑を作るから一緒に耕さないか、と声をかけてきてくれた。神主であるいっきさんも生活が苦しくなっていた。

お梅さんは、一も二もなく引き受けた。

幼なじみの、いっきさんの心遣いがうれしかった。

お梅さんといっきさん、それにいっきさんの奥さんの三人で、豆を蒔き、から芋を作った。お梅さんも、いっきさんも、必死になって働いた。

やがて、戦争が終わった。

しかし、生活はいっこうに良くならなかった。

そのうち、戦地から若者たちが復員してきた。

お梅さんの息子たちも、無事に帰ってきた。

——身体ひとつ、無事で帰ってきたのが何よりじゃ

とお梅さんは、息子たちの身体を抱くようにして涙を流した。この村から出征していった若者たちの中にも、戦死して、遺骨となって帰ってきた者がいたのである。

息子たちは、この村に帰ってきて初めて、父の死を聞かされた。が、悲しみに暮れている暇とてなかった。息子たちは、位牌に向かって死に目にあえなかった不幸を詫びると、すぐに神社の畑に向かった。明日食べるものを確保しなければならないのだ。

「必死じゃったよ、あのころは」

とお梅さんは、何か懐かしそうな顔をしながら言った。

「戦争は悪いよね」

と、智絵が言った。

「それは、そうじゃがのお」

と、お梅さんは頼りない。

(むごい時代じゃった)

戦地でも内地でも、たくさんの人が死んだ。若者も、年寄りも、子供も、赤ん坊さえも死んだ

。戦争は、「悪い」に違いない。しかし、あの戦争で死んでいった者たちのことを思うと、「戦争は悪い」のひと言で片づけることには何か抵抗があった。それが何なのか、お梅さんにもよく分からない。たとえ、ことばで説明できても智絵には理解できないであろう。

「戦争が終わって何年たってからかのう。生活にゆとりができたのは」

お梅さんにも、よく分からない。

「五年、いや、七年……」

振り返ってみれば、そのころにゆとりができたわけではない。毎日、休みもせず必死に働いていた日々に、ふっと安堵する瞬間が出てきたのだ。

「そのあいだ、河童のことはすっかり忘れておった。気づいてみると、河童はすっかり姿を消しておった」

「ふうーん」

と、良子がうなずいた。今度は納得がいったらしい。

駐在さんはひょうきん者？

チリンチリンと、後ろから自転車のベルの音がした。

振り向いたお梅さんが、顔をしわくちゃにして、

「おお、駐在さんじゃ」

といった。駐在さんがおどけるように、

「何をしておるんじゃあ。みんなで松を見て」

というと、お梅さんが、

「昔話じゃよ」

と、素っ気なく返事を返した。

「ああ、そうだったか」

といいながら、安心したように駐在さんは自転車から降り立った。

「見回りしてたの？」

と聞く智絵に、

「いっきさんとこに行こうと思っただけ」

と駐在さんは、自転車のスタンドを立てながら答えた。

村の駐在所は、神社前の三叉路を南に百メートルほど下ったところにある。そこから駐在さんは、もうすぐ開かれる村の祭りのことを相談しようと、いっきさんの家へ自転車を走らせたのだった。ところが、鳥居の前まで来て駐在さんは、お梅さんの店の前で松を見上げている子供たちに気がついた。少しのあいだ見ていたがみんな妙に静かだ。それが気になって駐在さんはやってきたのである。

「年寄りの話は、よく聞いておかんといかんぞ」

と駐在さんは、自分も年寄りのくせに、そう言う。

「年寄りの話は、たいがいつまらんが、あとになって、しみじみと身に沁みってくるもんじゃ」

と、駐在さんは教訓を垂れた。駐在さんは、警察官である。説教癖がついているのであろう。

「おっ」

と、お梅さんが声を上げた。

「もう夕方になるわい。みんな、もう、お帰り。お母さんが心配しておるぞ」

高かった太陽もいつのまにか傾いて西の山にかかろうとしていた。山の端が茜色に滲み、空に浮かんでいた白い雲も夕暮れようとする陽差しに追われるように村を流れていく。山里の夕暮れは早い。もうすぐ星も出るだろう。

「おばあちゃん、私、この子供たちを送っていくね」

と、智絵がお梅さんに言った。

「そうしておくれ。みんな、寄り道せずに帰るんだよ」

「うん」

と、和美が元気よくうなずいた。

「わしも、そこまで送っていこう」

と駐在さんは、再び自転車に乗った。

(ええ村じゃ)

と駐在さんは、智絵と四人の子供たちの後ろで自転車を転がしながら思った。自転車を転がすといっても子供たちの歩みは遅い。駐在さんは、ペダルに足を乗せることなく、つま先で地面を蹴って自転車を転がしている。

(ええ村じゃ)

と駐在さんは、子供たちを見ながらもう一度思った。

(何せ、仕事がない)

駐在さんがこの村に来てからもう四年になる。その間、犯罪は一件もない。それでも村人は、駐在所にやって来る。たいがいは世間話をしにくる。しかし、時々、血相を変えて飛び込んでくる者もいた。田んぼや畑が、何者かに、

——荒らされた

と、唾を飛ばして駆け込んでくる。

駐在さんも心得たものであった。すぐに立ち上がると駐在所を飛び出し、

「狸か、狐か、いたちか、猪か」

と大声で喚きながら、自転車を走らせる。

——いや、たぶん、猿じゃ

と、自転車を追いかける被害者が息を切らせ喘ぎながら言うと、駐在さんは、

「それはおおごとじゃ。猿は捕まえるのが大変じゃぞ」

と、空に向かって叫ぶのである。猿であろうと狸であろうと捕まえるのは大変であろう。

加害者は動物だが、被害者は人間である。よって駐在さんは、調書を作らなければならない。が、なにぶん当事者の一方は猿や猪である。被害者の話も要領を得ず、猿や狸を指名手配するわけにもいかず、あれやこれやで、調書の作成はすさまじく時間がかかった。

事件は何もないが、駐在さんは、村の見回りや、村の者たちとの世間話や、猿の逮捕やらで、結構忙しいのである。

(それにしても)

と駐在さんは、いつも思うことをこの時も思った。

(あれは何とかならんか)

あれ —— とは村の、バスの停留所の名前である。

村の、ただひとつの停留所なのだ。ふつうなら、村の名前とか神社の名前を付けるところであろう。ところが、このバス停の名前は、こともあろうに、

——呪いの一本松

なのである。

駐在さんは、週に一度は鹿児島市の本署に出向く。バスに乗って出かけ、バスに乗って帰ってくる。出かけるときはいいが、帰ってくる時が問題であった。

隣村のバス停を出発するとき若い女の車掌さんが、

「次は、呪いの一本松」

という。それも、きれいな声だけによけい不気味な感じがする。おまけに、そう言ったあと、

「次は、呪いの一本松でございます」

と、ご丁寧にも繰り返す。

(せめて一度にせい)

と、駐在さんはいつも思うのだが文句を言うわけにもいかない。

バスがこの村に入って、神社をすぎるとまたきれいな声で、

「呪いの一本松、呪いの一本松でございます」

と、二度繰り返す。

呪い、呪い、呪い、呪い、と都合四回、きれいな声に追われて駐在さんはバスを降りる。この村に赴任してきた最初のころはそれだけで、なにやら自分が、この、若い女車掌さんから呪いをかけられているような気がした。

(おおかた、バス停の名前を付ける連中がおもしろがって付けたに違いない。けしからん)

と、駐在さんは思うのだが、奇妙なことに、この村の人々はだれも文句を言わない。それどころか、この停留所の名前を当然のことと思っているようであった。

(祭りもそうじゃ)

と駐在さんは、いっきさんと相談しようと思っている村の祭りのことを思った。

もうすぐこの村で行われる祭りは、秋祭りではない。それは、もっとあとにある。今度の祭りは、

——河童さんのお祭り

なのである。

長老河童が太郎に斬られた日が、九月の五日——江戸時代は、この日に河童の霊を鎮めるために祭りを行ってきたが、明治になってから、子供たちのことを考えて九月の最初の日曜日に祭りを行うようになった。

祭りの夜は、村の者は大人も子供もみんな参拝にくる。祭りだから夜店も出ていてみな浮かれているが、手水舎で手を洗い、柏手を打ち、頭を下げる時だけは、心の底から「河童さん」に手を合わせているようであった。

(それだけを見れば、河童はこの村の守り神じゃ)

と、駐在さんも思わざるをえない。

しかし、一方で、河童を恐れることがはなはだしい。

(あの松など)

と駐在さんは、呪いの一本松のことを思う。

(恐がって手を触れようともせん)

呪いの一本松の周りは、まるで結界でも張られたかのように村の者たちは近づこうとしない。一年に一度、枝下ろしをするときなどは大変であった。村人はみな、松のところに集まり、紅白の煙幕を張り、村の川で捕れた魚を三方に載せ、いっきさんが恭しく祝詞をあげて、松の枝を整

える許しを請うのである。

(それでも、ええ村じゃ)

と、駐在さんは心から思う。

駐在さんは、子供たちを見送ると、鳥居をくぐろうとして、ふと涙橋の方を振り向いた。枝も幹も村里に向かって伸びている松の木が、暮れなずむ夕焼けを背に立っている。その姿は、何かを訴えかけるかのようでもあり、泣いているかのようでもある。

この、松の姿を朝な夕なに見、河童にまつわる伝承を幼いときから聞かされていれば、河童への思いも、きっと特別なものがあるに違いない。

「呪いの一本松かあ」

と駐在さんは、松を見ながらため息をついた。

この村には、河童への愛憎が、入り交じりながらも息づいている。

河童の茶会

神社の後ろを流れる川は、いくつもの山間を抜けてこの村にたどりつく。川を遡っていくと、途中、何度も枝分かれを繰り返し、そのたびに川幅を縮めながら山々の奥深くに入り込んでいく。

その山奥の、さらに山奥に、ぽっかりと山がへこんだような窪地があった。窪地といっても、大小三つの湖があるから結構広い。ぶなや檜や楓などが、窪地を覆い隠すように繁っている。

河童たちは、ここに集まって生きていた。

河童にも部族がある。血筋によって五つの部族に分かれていた。一番大きな湖と、二番目の湖には、それぞれ二つの部族が住んでいる。一番小さな湖はもう、湖というより池といったほうがいっくらい小さい。ここには、ひとつの部族だけが暮らしていた。

河童の里は平和である。

長生きの河童は、あまり子を産まない代わりに死ぬ者も少ない。だから、河童村の人口は、河童たちがここに集団で住み始めたころとほとんど同じであった。

とはいえ、諍いが無いわけではない。

——大湖と中湖の割り振りが不公平だ

というのが、河童の里開闢以来の大問題なのである。

大湖とは一番大きな湖のことであり、中湖とは、三つある湖の、真ん中の大きさの湖のことである。

特に、中湖に住む河童たちがやかましかった。中湖は大湖より小さいのに、大湖と同じ二部族が住んでいるのである。ことに、中湖の若河童は威勢がよかった。岸辺で友達同士話しているうちに、ふと、この問題に触れると、だんだん興奮し、その興奮にあおられるように若河童たちが集まり、いつのまにか弾劾集会のようになってしまう。

「我々はあー」と、誰かが叫ぶ——

「不公平の是正をおー、長老会にいー、要求するうー」

と、若河童たちは一斉に手を振りかざして、おー、と呼応するのである。

長老会も動かざるをえない。

いかにも長老らしく、毎日会議を開く。が、そればかりで結論はなかなかでない。

「おおかた、茶を飲み過ぎて腹を下されておられるんだろう」

と、口の悪い若河童は陰口をたたいた。

ある意味、当たっていた。

長老会は、それぞれの部族から二人ずつ代表を出して十人で構成されている。

この、長老会が開かれるときの合いことばは、

——茶会を開く

であった。

この里に住む河童たちに『茶会』が伝わったのは、江戸時代の初めのことである。京の都からやって来た流れ河童が、そのころ人間たちのあいだではやっていた『茶会』というものを見よう見まねで伝えた。何でも、千利休とか豊臣秀吉とかが始めたとかで、京や大阪に住む河童たちはすでに、盛大に行っているという。

河童たちは驚き、鹿児島城下に住む河童たちに尋ねてみたがみな知らないという。

京からやって来た流れ河童は、それを聞いて、

「薩摩のさむらいは田舎もんじゃ」

と、あざ笑った。

「何を言うか」

と怒鳴りつけたのは、年寄り河童である。

「薩摩のさむらいは、武骨もんばかりじゃが、心根が一番優しいぞ」

というと、流れ河童を肥後の国に追い出してしまった。

年寄り河童が激怒して人間をかばったのには訳があった。

この年寄り河童は、ある時、鹿児島城下に住む親戚のところへ遠出をした。

途方もなく遠かった。ふらふらになりながら川を下り、鹿児島城下にたどり着きはしたものの、ついに甲突川の川縁で倒れ込んでしまった。その時、ひとりの武士が、

——河童どん、どげんしやったな

と声をかけ、医者まで呼んで介抱してくれたのである。

まだ若い医者もまた、

——河童どんももう、よか歳ごわんそ。身体をいたわりやんせ

と言って、薬まで調合してくれた。

それ以来、この年寄り河童は、

「薩摩のさむらいは、日本一じゃ」

と言い続けている。それを、この、京の都からやって来た流れ河童は、

——田舎もん

のひと言で否定したのである。心根の優しさが分からぬような河童は、河童の風上にもおけない。国外追放処分が妥当であろう。

しかし、流れ河童を追い出しはしたものの、都の河童がやっているという『茶会』は気にかかる。そこで、年寄り河童を集めて流れ河童が言っていたとおりにやってみた。茶碗は、人間が捨てたものを拾ってきたがお茶の葉は手に入らない。

「水でよかろう」

と、年寄り河童は言った。

「形ではない。心根が大切だ」

と、年寄り河童はいう。脳裏に浮かんだのは、千利休でもなければ豊臣秀吉でもなく、あの武骨な、鹿児島城下のさむらいと年若い医者姿であった。

茶室も、もちろんない。

「この木が」

と年寄り河童は、周りの木々をぐるりと指さし、

「茶室じゃ」

といった。

河童はどういうわけか、正座が苦手である。茶会に参加したじいさん河童はあぐらをかき、ばあさん河童は横座りをしていた。

「茶は静かに飲むもんじゃ」

と、一度も茶会の経験のない、この、年寄り河童は言う。

「茶会のあいだは、黙っとれ」

これが、一番重要であった。寝ているとき以外は、食っているときでもしゃべりまくるのが河童の、いわば、癖である。

実際、茶会をやってみると、これが実にいい。

「これからは、これじゃな」

と、年寄り河童たちは言った。今までは、何か話し合うにしても若河童はおろか、子河童、赤ん坊河童まで参加して何がなにやら分からずに終わることが多かった。しかし、茶会だと、若河童の思慮分別のない意見に邪魔されることもなく、ゆっくり、じっくりと、年寄りだけで話し合うことができる。

これ以後、『茶会を開く』は、年寄り河童たちが話し合いをするという意味になった。

時は下り、この河童の里に集団で暮らすようになって、この伝統は受け継がれている。

中湖の若河童たちに突き上げを食らった長老会は、ついに結論を下した。

——中湖の者で、腹が減った者は、大湖の魚を食べてもよい

長老会といえども、中湖の部族の一部を分割して、大湖に移すわけにはいかない。部族は常に、一団となって暮らすのが河童の世界のしきたりなのである。

長老会は、妥当な結論を出したつもりであったが不平は収まらない。

「その場しのぎだ」

と中湖の若河童たちは、ぶつぶつと文句を言った。大湖に二部族、それより小さい中湖にも二部族という割り振り自体が問題なのである。

——抜本的解決になっていない

というのが、中湖の若河童たちの言い分であった。

「それに」

と、ある若河童が口を尖らせて言った。

「いかに長老会とはいえ、年寄り十人でかってに決めていいのか」

長老会の構成員は部族を代表する者たちだから、智恵深く、性格円満な者が選ばれている。しかし、問題は長老会そのものにあった。

——我々にも、長老会の場で発言を許すべきだ

と、若河童たちの不平不満は止まるところを知らない。長老会は今や、その、密室性、談合的性格ゆえに、その、正当性さえ疑われ始めたのである。

長老会は、困惑した。

大湖の魚を捕っていいというのにだれも取りにいかない。

それもそのはずで、中湖に住む連中は、中湖の魚だけで満腹なのである。

「結局、あれじゃ、若気の至りじゃ」

と、長老会の結論はそういうところに落ち着く。

「放っておいてよいのか」

と言う長老もいるが、

「放っておけ」

で、おしまいである。

「わしらもわかいころは、ああじゃった」

と、長老河童のひとりが言うと、皆うなずいた。

「わしら河童は、腹八分目、毎日食えればそれで満足なんじゃ」

腹八分目食えなくなれば食えるところへ引っ越す。ただ、それだけのことである。

ただ、近頃、長老会も結論の出せない、というより、出しようがない問題がある。

——我々は、なぜ、ここに閉じこめられているのか

という、若河童たちの疑問である。

昔、といっても、つい二十年ほど前まで、河童たちは、日本中の川という川で暮らしていた。しかし今は、人間の目の届かないところに集まり、それぞれが孤立している。ここから一番近い河童村へは北へ向かって山々を伝い、十日もかかる。

その次はもう、海を渡らなければならない。

「九州と本州のあいだの瀬戸を渡るのは大変だぞ」

と、関門海峡を渡ったことのある若河童が誇らしげに言った。

何せ、潮の流れが速い。うかうかしていると潮の作り出す渦に飲み込まれ、海の底へ引きずり込まれそうになる。

「おまけに、船が多い」

息をするために海面に顔を出すと、小山ほどもあろうかという真っ黒な船が若河童めがけて迫ってくる。

「それも、次から次ぎにだ」

と若河童は、楽しそうに言った。楽しそうに言ったが、その時は死にものぐるいだった。潮の流れに息を切らせて逆らい、のしかかってくる巨大な船から逃げ回り、下関に上陸したときにはへとへとになり、

——もう、だめ。死ぬ

と思った。死にはしなかったが、

——もう二度と、この海は渡らない

と、心に決めた。

しかし、時たてば、命をかけた冒険もいい思い出である。

「あの瀬戸を渡れるのは、おれくらいのものだ」

「また行けと言われたら、行くのか」

と、横から、からかうように言う者がいる。

「行く」

と、この、若河童は言い切った。今度は、もっと上手に海峡を渡りきる自信があった。しかし、その自信以上に不安が大きい。しかし、

(行けと言われたら、おれは行く)

とこの若河童は、渾身で思っている。あの時のことを思うと、今でもつい歯を食いしばってしまう。それでもあの海峡が、なぜか懐かしい。

(あの、恐ろしい瀬戸になぜこんなに惹かれるのか)

と、自分でも不思議ではある。が、冒険者とは、そういうものであろう。

「飛行機で行けば楽なんだがな」

という者がいる。河童は、のほほんとしているが好奇心は旺盛である。人間から隠れるように暮らしていても一年に何度か、二、三人が連れ立って山を下り、そっと人間の世界を偵察に行くのである。その偵察河童の中に、飛行場を見たものがいた。

「飛行機は、いいなあ」

と、だれかが夢を見るように言った。

時々、河童の里の上空を飛行機が飛んでいく。銀色に光る飛行機が山の向こうから現れ、白い雲の尾を引きながら青い空を横切り、山の向こうに消えていく。

「おれも」

といったのは、冒険家の河童である。

「飛行機に乗ってみたい」

一度命をかけた冒険を経験した、この若河童の思いは切実である。飛行機の行き着く先にはどんな世界が待っているのか、それを思うだけで身体がぞくぞくしてくる。

「よせよせ。どうせ俺たちは、死ぬまでここで暮らすんだから」

といったのは、仕方がないよ、が口癖の河童である。この河童は、陸に上がっているときはいつも何かに身体を預けている。地面にぺたんと尻をついていたり、木に寄りかかったり、歩いているときも重力に逆らうのがつらいのか、肩をすぼめてとぼとぼと歩く。今は、寝っ転がっていた。自分の身体を自分で保てないらしい。

仕方がないよ、が口癖の河童は、だめを押した。

「いろいろ言っても、仕方がない」

座はしらけた。この河童には、しらけた場こそ心地よい。

「どうせ、人間にはかなわないしな」

と付け加えた。愚痴のようなものだが、愚痴を言っているのではなく、正論を吐いているつもりであった。

「権平さんが悪いんだ」

と今度は、人のせいにした。

「よせ」

と鋭く言ったのは、冒険家の河童である。

「一平、気にするなよ」

と、自分の隣にいる子河童の頭を撫でた。

三つある湖の中の、一番小さな湖には、ひとつの部族だけが住んでいる。

一平は、その部族に生まれた。

部族といっても一平も含めて五人しかいない。祖母と母、叔父夫婦、それに一平である。ほかの部族は十五人から二十人ぐらいいるから、一平の部族は極端に人数が少ない。部族というより家族といった方がいい。

家族が少ないから一番小さな湖に住んでいるわけではない。

——権平さんの血筋じゃから

というのが理由だった。

権平の血筋ゆえに差別されたのではない。権平の血筋ゆえに、一家でひとつの湖を独占して住

む特別扱いを受けたのだ。

『権平さん』とは、あの、庄屋の庄左右衛門に協力して村の堤を造り、庄左右衛門の息子の太郎から手首を切り落とされた長老河童のことである。

——権平さんはたいした人じゃった

と、皆がいう。が、一平には何がたいしたものだったのか、さっぱり分からない。

——度量が大きくて、人の話をよく聞いてくれた

という者がいるが、一平が見るところ、それは今もいる。

——勇気があったぞ

という者もいるが、あの、海を渡った若者はもっと勇気がありそうであった。

権平の悪口も、一平は耳にしたことがある。

——なぜ、あの時、人間と戦わなかったのか

と、一平が聞いているとも知らずに言う者がいた。

——おれらが今、ここにこうしているのは、あの時、権平さんが逃げ帰ったからではないか
権平の批判をするときは、決まって、ひそひそと顔を寄せ合うように話す。決して声高になることはない。

この里に暮らす河童にとって権平は、やはり偉大なのである。

一平は、権平の孫である。それゆえ、一平の前で権平の悪口を言う者はいない。その代わり、一平がいないときを見計らって陰口をたたくのである。

それでも一平は、権平じいさんの陰口を耳にすることがある。そういう時は、耳をふさいで逃げ出したくなる。しかし、一平は、身を潜めて、最後まで権平じいさんの陰口をきいてしまう。ぜんぶ聞き終わるとたまらなくなつてこっそりとその場を逃げ出し、涙が出ようとするのをこらえながら湖に飛び込むのである。

(今日は、ばあちゃんに聞いてみよう)

と、一平は思った。今まで権平じいさんのことを、ばあちゃんに聞いたことは一度もない。一平のばあちゃんは、権平じいさんの連れ合いである。おそらく、だれよりも詳しく権平じいさんのことを知っているであろう。

一平の家族は、湖の畔の洞窟の中に住んでいる。洞窟といっても山裾に少し穴が開いているだけで中は広くない。そういう穴のような洞窟が、ぼつんぼつんと点在している。その洞窟のひとつに、一平と、一平のばあちゃんとお母さんが住み、すぐ近くの洞窟には叔父夫婦が住んでいた。

一平が洞窟の家に帰るとみんな揃っていて、楽しそうに話をしていた。

何でも叔父が、山の中で猿と出会ったらしい。叔父は、猿をにらみつけたが、猿もにらみ返してくる。

——こしゃくな

猿の分際で河童をにらみつけるとは——と叔父は、一步も引かぬ覚悟を決めた。猿は、叔父を脅そうと歯を剥いたり枝を揺すって吼えた。

——浅智恵の猿め

と、内心せせら笑いながらじっと見つめていると、やがて猿は、気弱そうに目をしばたかせて去っていた。

「ばかなことをするな」

と、ばあちゃんが言った。

「噛みつかれでもしたら、どうするんじやい」

「噛みつき返してやるわい」

「あほ。もうすぐ、ややも生まれるんじや。無茶するではない」

「それもそうじゃな」

と叔父河童は、頭をつるつると撫でると

「で、一平、元気がないのう。どうした」

と、一平の顔をのぞき込んだ。どうも、顔に出ていたらしい。一平は、どう切り出していいのか分からずしばらく黙っていたが、顔を上げるとばあちゃんの目を見つめて言った。

「ばあちゃん、権平じいちゃんって、どんな人だったの」

洞窟の中が沈黙し、みなが一平の顔を見つめている。

(やっぱり、まずかったかな)

と、一平は思った。触れてはならないものに触れたような気分である。

「何か、言われたの？」

とお母さんは、一平の顔を見ながら心配そうである。

「いや」

と一平は、口ごもるとうつむいてしまった。

「権平さんはお」

という、ばあちゃんの声が聞こえてきた。

「優しい人じゃった」

一平が顔を上げると、ばあちゃんがほほえんでいた。

「庄左右衛門さんとのことじゃろう。聞きたいのは」

一平は、うなずいた。

ばあちゃんもゆっくりうなずくと権平と庄左右衛門の話 시작했다。

「権平さんはお」

とばあちゃんは、自分の亭主のことを、そう呼ぶ。

「庄左右衛門さんに頼まれて、村の堤を造ろうとしたんじゃ」

「何でも二人とも楽しそうじゃったそうな」

と、おじさんが口をもぐもぐさせながら言った。瓜でも食べているらしい。

ばあちゃんは、横目でおじさんをじろりと見ると話を続けた。

「庄左右衛門さんは、村の話をいろいろとしてくれた。どこの誰それが嫁にいくとか、今年は米がようできて村の暮らしも去年よりは楽になりそうだとかな。権平さんもわしらの暮らしのことを庄左右衛門さんにいろいろと話した。河童は長生きで三百年ほども生きるが病気はあまりしない、と言ったら、庄左右衛門さんは、ほうほう、と驚いて、ありがたいことじゃのお、と言ったそうじゃ」

「それで、堤の話は」

と一平は、いっこうに本題に入らないばあちゃんの話がじれったい。

「堤の話か。そんなものはあつという間に決まった。村の人間たちが困っているから助けてくれ、というんじゃ。助けるのが当然じゃろうが」

「なぜ」

と一平は、目を丸くした。

「なぜって、おまえ」

と、ばあちゃんがことばにつまった。

「一平は、あの村のこと、知らないからねえ」

と、おばさんが口を挟んだ。

「それもそうじゃなあ。一平は、一度も人間を見たことがなかったんじゃなあ」

とばあちゃんは、途方に暮れている。日々の暮らしは、万華鏡のように色鮮やかでめまぐるしいが蜃気楼のようにはかない。きのうのことさえも春の淡雪のようにあつという間に融けさり、薄墨で描いたような、輪郭もおぼろな風景だけが残される。心の中の、そこはかかない諸々のものの陰翳をことばにするのは不可能であろう。

「ええとこじゃったよ。あの村は」

というと、ばあちゃんは、静かに目を閉じた。

「春になるとなあ、村の川に雪解け水が流れ出すんじゃよ。冷たいが気持ちのいい水じゃよ。川沿いには菜の花が咲いておってな。水さん、水さん、無事に海まで行きやんせ、と歌いながら、風に身体をそよがせて見送るんじゃ」

山奥に閉じこめられている一平には、想像もできない。

「すみれが咲くころになると、冬のあいだ、家で遊んでいた村の子供たちが一斉に外に出て遊び

出すんじゃ。春が来た、春が来た、と言ってな。わしらもよくいっしょに遊んだ。楽しかったのお」

「人間と仲がよかったの？」

と一平は、目をくりくりさせて聞いた。

「わしらの子供のころはな。人間も河童も、子供同士は仲がよかった」

「大人同士は、そうでもなかったじゃろ」

と、おじさんが言った。

「別に、仲が悪いということはなかったのお。ただ」

と、ばあちゃんは首をひねった。

「人間は大人になると、子供のころを忘れるんじゃない、きっと」

「何かあったの？」

と一平が聞くと、ばあちゃんは、

「いや、何があったというわけではない」

と、答えた。

確かに、特別何があったというわけではない。ただ、子供のころ、あれほどいっしょに遊んでいたのに、大人になるにつれ、人間たちはよそよそしくなっていくのだ。そのことがばあちゃんにはよく分からない。

「それでも、気軽に声をかけてくれる人間も多かったぞ、あのころはな」

ばあちゃんは、自分が子供のころのことを言う。

「やがて、村のあちらこちらで桜が咲いてな。人間たちは、桜の花の下で花見をするんじゃよ。大人も子供もみんな集まってな。よほど、桜が好きなんじゃな、人間は」

とばあちゃんは、おかしように言った。

「桜も散ると、木も草も村も若葉で染まるんじゃ。するとな、人間も若返ったように働き出すんじゃ」

「なんで」

と一平は、あどけなく聞いた。

「田植えじゃよ。田植え」

「田植えって？」

と一平は、限りなくあどけない。

「うむう」

と、ばあちゃんはうなった。どうにも話がしづらい。

「米を作るんじゃ」

「米っておいしいの？」

「うむう」

とうなるばあちゃんを見かねて、ついに、おじさんが助け船を出した。

「米は、わしらにとっての魚のようなもんじゃ」

「人間は、魚を作るの？」

「うむう」

と今度は、おじさんがうなった。

一平は、河童の里に引っ越してきてから生まれたから人間の世界を一度も見たことがない。それに河童は農業をしないし米も食べない。田植えも米も想像しようにもよすががなかった。

とはいえ、この里ではよく人間世界の話をする。何ととっても、つい先頃まで人間といっしょに暮らしていたのである。村での生活を知っている者がほとんどであった。それに今も、人間の世界に偵察に行った者があれやこれやとみやげ話を持ち帰ってくる。それで十分に人間の世界のことは分かるのである。

「わしらは人間のことはよく知っておるつもりじゃったが、一平は分からんのじゃなあ」

と、ばあちゃんがため息をついた。ばあちゃんたちにとっては、人間世界のことは延々と続いてきた生活の延長線上にある。しかし、一平にとって、人間たちのことは自分とは無関係の世界でしかない。大人たちが人間世界のことを話していても一平には興味の持ちようもないのである。文化の断絶であろう。この隙間を埋めるのは、村の堤を造るよりはるかに困難なことかもしれない。

「ともかく、ええ村じゃったんじゃよ」

と、ついに、ばあちゃんは、一平を納得させることをあきらめた。

「何が」

一平は、ごまかされない。なぜ、いい村だったのか、ばあちゃんはまだ、説明していないのである。

ばあちゃんは、ふうーと息を吐き出すと言った。

「あの村は、わしらのふるさとなんじゃ」

一平の顔を見つめているばあちゃんの目には涙が浮かんでいた。

あわてて顔を伏せるばあちゃんに驚いて周りを見渡すと、お母さんもおじさんもおばさんもみんな顔を伏せていた。

一平は、呆然としていた。みんなの気持ちが理解できないでいた。ただ、狭い家のそこここが哀しみで満たされていることは身体で感じとることができた。

河童たちは、かつて住んでいた村々を捨ててこの山奥にやってきた。村が嫌いになったからでもなければ人間たちに意地悪されたからでもない。河童たちは、人間たちが自分たちのことにかまけて人間のまわりの世界に無頓着になったために住みづらくなり、村を捨てた。河童のほうから村を捨てたのだが、その実は、人間に追われて村を捨てた。

村から引っ越すときは、

——ここは住みにくくなったから、よそへ移ろう

と、ごく気軽に村を出た。引っ越し先の河童の里は、人間たちに邪魔される心配もなく、魚もたくさんいて河童たちにとっては天国のようなところだった。

——ここは、ええ

と河童たちは、大いに満足し、しばらくは、かつて住んでいた村のことは忘れていた。

しかし、季節が一巡りしないうちに、

——今頃、村では何をしておるかのう

と、懐かしそうに目を細めながら言うようになった。一平のばあちゃんも、お母さんも、おじさんも、おばさんも同じであった。この家の中で昔話に花を咲かせては、

——ええとこじゃったなあ

と、懐かしそうに、哀しそうに、嬉しそうに、ため息をついた。

——あの村が、わしらのふるさとじゃ

そう言い、そう思うとき、魂から慟哭が迸り、心を振るわせ、身体中を浸し、その思いは天翔て、あの、懐かしい村に帰っていく。

不思議なことに、あの村の、ひとつひとつのことを思い出しても心を震わせるような慟哭の思いは湧きあがってこない。

——松の向こうの店に、女の子がおったのお。何といったかのう。ああ、そうじゃ。お梅さんじゃ。元気のよい子でのう。ほれ、神主さんのところに男の子がおったじゃろう。ああ、そうじゃ。いっきさんじゃ。いっきさんは、賢うて優しい子じゃったが、運動がからっきしだめでの。お梅さんはよく松の木にするすると登るんじゃ。いっきさんは、枝に腰かけたお梅さんをこわごわと見ておってな。お梅さんが何か言うと、いっきさんは、おそるおそる登りだすんじゃ

。やっとこせ、お梅さんの近くまで登ったと思ったら、お梅さんは、するすると木を降りてしまっ
ての。下から、木にしがみついとるいっきさんに向かって何か言うと、どこかに行ってしまう
んじゃよ。いっきさんはいつも、お梅さんに置いてきぼりにされて、木にしがみつきながら泣い
ておったよ。いっきさんも止めればいいのに、毎日毎日、同じことの繰り返しじゃ。わしらが村
を出るときにはふたりとも連れ合いをもらって子もおったが、今はどうしておるかのう。会っ
てみたいのう

そういう思い出話をするときは、ばあちゃんの心の中は、懐かしさでいっぱい楽しいばかり
である。

しかし、そういう話をひとしきりしたあと、

——ふるさと

ということばを口にし、心に思うと、身も世もない思いに涙が堰を切ったように溢れでてくる
。ふるさととは、生まれ育った、現にそこにある土地ではないのかもしれない。ふるさととは、心
の中にこそあるものであろう。

静まりかえった薄暗い家の中で、おばさんが鼻を吸りあげていた。

一平も、涙を拭いていた。みんなと想いを同じにできようはずもない。この場の、哀しみに満
ちた雰囲気巻き込まれたのだろう。

「庄左右衛門さんはな」

とばあちゃんの声は、まだ震えている。

「権平さんに、川の向こう岸を切り開いたら、その土地をわしらにやると約束していたんじゃ」

「そこに住むの？」

と、一平は聞いた。

「いや、そこで、きゅうり何ぞを作ればいい、と庄左右衛門さんは言ったんじゃ」

きゅうりっておいしいの、と一平は聞こうとして止めた。あまり突っ込みすぎると、また訳が分からなくなってしまう。

「じゃが、わしらは、田畑は耕さん。権平さんは、断った。わしら河童も村で生きとる。人間も村で生きとる。同じ村で生きる者同士、困っているときは助け合うのが当然じゃ。そう、権平さんは庄左右衛門さんに言うたんじゃ」

「庄左右衛門さんは、何て言ったの」

「庄左右衛門さんは、村の堤を造ってもらうのにそれでは気の毒じゃ。わしの気が済まん。きゅうりは村の者が作るようにする。それをわしらが食えばよい、と言ったんじゃ」

「へえー」

と、一平は歓声を上げた。きゅうりがどういうものか知らないが河童にとっては万々歳である。労せずして食べ物を手に入れることができる。

「しかし、それも、権平さんは断った」

「なぜ」

と今度は、驚いて聞いた。

「人間はのお、土地に執着するんじゃ。一坪の土地を取り合って人間同士殺し合ったりするんじゃよ。わしらは、それを見てきたんじゃ」

「ばかじゃないの。人間は」

「わしら、河童から見ればな。しかしな、人間は田畑を耕して生きる生き物じゃ。川がなくなればわしらは生きられん。それと同じじゃ。土地がなくなれば人間は生きられん」

「ふうーん」

と、一平はうなずいたが、わずかの土地で殺し合いまでするというのは分からない。が、聞くのは止めた。

「だから、権平さんは、庄左右衛門さんが土地をやるという話を断った。庄左右衛門さんの気持ちはありがたいが、ほかの人間たちは納得せん。その時は納得するかもしれんが、そのうち、なぜ河童のためにきゅうりを作ってやらねばならんのかという者が必ず出てくる」

「断ったの？」

と、一平はつぶやいた。もったいないような気がした。

「断ったがのお。権平さんも頑固じゃったが、庄左右衛門さんも頑固じゃった。堤が完成したら必ず自分が村の者たちを説得する。なに、あれくらいの土地なら、わしらの家の者たちだけで耕

せる。あの土地は河童のものじゃ、と村の者たちを納得させればそれでええ。耕すのに村の者は使わんようにすれば、みな納得する。そう、庄左右衛門さんは言うてのお」

「庄左右衛門さんは、人間たちを納得させたの？」

「その前に、庄左右衛門さんは亡くなったんじゃよ」

「死んだの？約束も果たさずに」

と一平は、あっけらかんと言った。

「約束など最初からないわい。人間が、そう言っておるだけじゃ」

と、おじさんが怒ったように言う。

一平は、驚いた。おじさんが何を怒っているのか、見当もつかない。

「まあ、待て」

とばあちゃんは、おじさんを制し、

「順追って話さねば、一平は分からん」

という、話を続けた。

「庄左右衛門さんは、身体の調子がよくなかったんじゃ。それを無理して、毎日、松の木の下で、わしらが働くのを見守ってくれた。権平さんは、それが気になってのお。いつも、庄左右衛門さんのところに行っては、家で休んでいてほしい、と言っていたんじゃよ。庄左右衛門さんはそのたびに、大丈夫じゃ、と答えて、必ず約束は果たすから、と権平さんに言ったんじゃ」

ここまで来て、やっと一平にも、権平じいちゃんと庄左右衛門さんの関係が見えてきた。どうやら二人は、友達同士だったらしい。

「堤が完成すると庄左右衛門さんは、村の者も、河童も、みんな呼んでごちそうを振る舞ってくれた。楽しかったのう、あの時は」

ばあちゃんは、夢を見るように言った。

「ところが、その晩じゃ。庄左右衛門さんは病に臥せってしもうた。権平さんは、心配してのお」

というとばあちゃんは、目を閉じ、黙り込んでしまった。

一平は、ばあちゃんの顔を見ながらじっと待った。ずいぶん待ったが、ばあちゃんはいともすんとも言わない。一平は、焦れた。幽霊話で、これから幽霊が出るかというときにお預けをくらったような気分である。

「で、それから、どうなったの？」

と一平は、せっぱ詰まったように言った。

「権平さんは、毎晩、庄左右衛門さんの屋敷に行ったよ。権平さんは心配しとった。あの、庄左右衛門さんのことじゃ。病で臥せっておっても約束を果たさねばならん、と気が気でないに違いない。約束なんぞ、わしらはしておらんじゃ。そんなことを考えていればよくなるものもよくなる、と権平さんは心配してのお」

「会えたの？じいちゃんは、庄左右衛門さんに」

「会わせてもらえんかった、権平さんは・・・最後まで・・・とうとう・・・」

とばあちゃんは、とぎれとぎれにつぶやいた。とぎれとぎれのことばに、ばあちゃんは万感の

思いを込めたのだが一平には通じなかったらしい。

「なぜ」

と一平は、元気よく聞いた。

「さあ、なぜかのう」

「だれが会わせなかったの？」

「太郎さんじゃ。庄左右衛門さんの息子さんじゃよ」

そういうとばあちゃんは、大きく息を吸い込んだ。

「太郎さんは、意地悪だったの？」

「いや、一本気で、真っ正直な人じゃったよ」

一平は、理解できない。太郎さんは悪い人ではないらしい。それどころか、まじめな人らしい。それが、なぜ、そんな意地悪をするのだろうか。

「太郎さんは、気が狂って死んだそうなの」

と、ばあちゃんがぼつりと言った。

これには、一平も驚いた。庄左右衛門さんの息子の太郎さんは、意地悪な人ではない。その人が、権平じいちゃんが庄左右衛門さんに会おうとするのを邪魔をする。おまけに、気が狂って死んだという。

一平は、混乱した。

「権平さんはな」

といったのは、おじさんである。

「太郎さんに斬られたんじゃよ」

一平の混乱は増すばかりである。権平じいちゃんが斬られたというのに腹も立たない。ついに

「どうして、斬られたの？」

と、叫んだ。

「それがな」

と、ばあちゃんが悲しそうに言った。

「分からんのじゃ。何も分からん。庄左右衛門さんに会わせなかったのは病気がよくなるまでと思つてのことかもしれん。しかし、なぜ、権平さんを斬ったのか、わしらも分からんのじゃよ」

「それじゃあ、じいちゃんは斬られて」

—— 死んだの？

と言おうとして、一平は考え込んでしまった。権平じいちゃんは、この里に来る少し前に死んだと聞かされていた。太郎さんに斬られて死んだのなら少し前どころではない。だいぶん前に死んだことになる。

「斬られたのは手じゃ。手首を切り落とされたんじゃ」

と、ばあちゃんが言った。顔をしかめている。話すのもつらいのであろう。それでも、ばあちゃんは、

「権平さんはお」

と、話を続けた。

「泣きながらみんなのところに帰ってきた。わしら、みんな、権平さんの傷が心配でのお。傷の手当てをしながら斬られた訳を聞いたが、権平さんは何も教えてくれなかった。ただ泣きながら、庄左右衛門さんが死んだ、庄左右衛門さんが死んだ、と言うばかりじゃった」

「腹が立つのは」

といったのは、おじさんである。

「人間たちが、河童の手は、また生えてくる、と言っておったことじゃ」

そう言うと、「けっ」と吐き捨てた。

「えっ」

と、目を丸くしたのは一平である。

「僕の手は、斬られてもまた生えるの？」

「そんなことがあるもんかい」

と、ばあちゃんが言った。

「そんな身体じゃったら、権平さんもよかったがのお」

河童は、魚を捕るとき両手でつかみ取りする。権平じいさんは、太郎に手首を切り落とされてから魚を捕れなくなった。もっとも魚は、ほかの河童が持ってきてくれるから食べ物に困ることはなかった。

「じゃがのお、権平さんは、それからというもの、日がな一日ぼんやりしておった。みんなの面倒は、ちゃんと見ておったがの。寂しそうじゃった。わしにも、どうにもできんかった」

「庄左右衛門さんが死んだから？」

「そうじゃったかもしれんな」

とばあちゃんは言ったが、それだけとも思えない。

(心の傷が深すぎたんじゃ)

と、ばあちゃんは思っている。

(権平さんは、人間たちともっと仲良く暮らしたいと思っていた)

権平じいさんは、一度も口に出して言ったことはなかったが、ばあちゃんには何となく分かっていたのであろう。

途中までは、うまくいっていた。堤が完成する前まではそうだった。しかし、堤が完成したあと、すべてが壊れた。壊れたどころか以前より悪くなった。河童たちは、人間に隠れて暮らすようになった。

(なぜ、こんなことになったのか——そう、権平さんは、思い思いして毎日を過ごしていたんじやろう)

権平さんがある朝、夢枕に庄左右衛門さんがやってきた、と言ったことがあった。

ばあちゃんが、庄左右衛門さんは何か言ったのか、と聞くと、

——庄左右衛門さんは、元気を出せ、と言って笑っておった

と権平さんは、笑いながら答えた。

(あの時の、権平さんの顔が忘れられん)

その笑顔が、権平さんの寂しさを物語っているような気がする。

(しかし、だれに言っても理解できんじやろう)

ばあちゃんはそう思うのだが、そう思うたびに寂しい気持ちになる。

「わしらが、太郎さんに呪いをかけたと言う人間たちもいたが」

ばあちゃんの目は、ぼんやりと宙を見ている。

「そんなことをするもんか。斬られた権平さんも哀れなら、斬った太郎さんも哀れ、死んだ庄左右衛門さんも哀れじゃ」

ばあちゃんはもはや、仏の境地に入っているのかもしれない。が、まだ歳幼い一平には含蓄に富んだ老人のことばなぞ、どうでもいい。慈悲深いばあちゃんのことばはすっ飛ばして『呪い』に飛びついた。

「呪わなかったの？」

と一平は、残念そうである。

「そんな」

と一平をにらみつけたのは、それまで黙ってばあちゃんと一平を見守っていたお母さんである。

「おぞましいことはしません」

一平は、首をすくめながら、肝心なことに気がついた。

「じいちゃんの手はどうなったの」

「権平さんの手かあ。手はお、村の神社に大切にお祭りしてあるそうじゃ」

「取り戻さなかったんだ」

と、一平はつぶやくように言った。

「手を取り戻してものお。権平さんは生きておったし」

「それに、恐いわよ」

と、おばさんが言った。

「人間は、すぐに刀を振り回すんだもの。追いかけられたらどうするの」

「刀を振り回したのは太郎さんだけじゃ。何せ、気が狂っておったからな」

というとおじさんは、「ほれ」と言って、一平に食い残した瓜を手渡した。

「普通の人間は、刀を振り回したりしないの」

「せん」

と、おじさんは断定した。

「けんかはようするが、刃物を振り回すのは気狂いしたときだけじゃ」

一平は安堵した。河童も、気狂いはしないがけんかはときどきする。

(気狂いした人間だけ、用心しとけばいいんだ)

と一平は、瓜を食べながら思った。

(おいしくない)

瓜が、である。大人たちは、山の中に生えている瓜をきゅうりの代わりだと言って食べる。瓜を食べながら瓜の話はせず、きゅうりはうまかったと口々に言う。

「ばあちゃんは、じいちゃんの手は、もういらないんだ」

と一平は、気軽に言った。ばあちゃんの話聞いて、一平が理解したところでは、ばあちゃ

んは、権平じいちゃんが生きてただけで満足で、じいちゃんの手はどうでもいいらしい。

んっ、と一平が、口いっぱい瓜をほおぼりながら、ばあちゃんを振り向いた。

ばあちゃんは、下を向いて目を閉じていた。

(寝ちゃったのかな)

時々、ばあちゃんは、話をしている最中に寝てしまうことがある。

「さあ、そろそろ、一平も寝なさい」

と、お母さんが言った。これも、いつものとおりである。そのことばを機に、おじさんたちは帰っていった。

「一平は、もう寝たかの」

「ええ。今日はいろんなことを聞いて、疲れたんでしょう」

と、お母さんがひそひそと言う。

「やれやれ、権平さんの手はもういらんのかと聞かれたときは、どうしようかと思ったわい」

とばあちゃんは、声を立てずに笑った。

「まだ、子供で」

と、お母さんもおかしそうだ。

「亭主の亡骸じゃからのう」

というと、ばあちゃんは、はっとしたように、

「ああ、すまんかった」

と、お母さんに謝った。

「いえ、もう、いいんです」

声は、笑っていた。

権平が太郎から手首を切り落とされたあと、やがて、子が生まれた。

権平は、亡き庄左右衛門から一字をもらい、庄平と名付けた。これが、一平の父親である。庄平は、膂力も強く、聡い子に育ち、やがて、権平を助けて河童たちの人望を集めるようになった。

村を捨てて引っ越そう、と申しだしたのも庄平である。

庄平は、自ら山に入り、この、河童の里を見つけだした。

庄平は薩摩と大隅の国を巡り歩き、河童たちに、全員で移住するよう説得して回った。

ぜんぶの河童が説得に応じたわけではなかった。というより、

——ここに残る。魚もたくさんおる

という河童のほうが多かった。

庄平は、それでも説得をあきらめなかった。

——人間たちは、すごい速さで変わっておる。見向きもせんで走っとる。わしらとは離れていくばかりじゃ。わしらはきっと、いつか、人間に追い出される。追い出されんでも住めんようになる。そうなってからでは遅いんじゃ。今のうちに、わしらが生き残れるところに移ったほうがよい

庄平は、そう言って必死にかき口説いたが、それでも、庄平の危惧に同感しつつも今いる村に留まる、という者が多かった。

当然であったであろう。こののちしばらくすると、川岸がコンクリートで塗り固められ、川岸の土や石垣を利用していた生き物は居住空間を失うようになる。さらに、都市開発が進み、川は埋め立てられ、あるいは暗渠にされていく。それまで生活に使っていた川が排水用とされ、川底

までコンクリートで固められた堀まで出現するに至るのである。

人間は、し放題であるが、それまでそこで生きているものにとってはやられ放題であった。人間が変わるまで、ほかの生き物は姿を隠すしかないであろう。

しかし、庄平の時代にはまだ、河童たちが住む川は無事であった。

庄平の言うことは、予感であり、説得力がなかった。

それでも、いくつかの部族は移住に同意した。

庄平は、説得に応じた五つの部族だけを率いてこの里に移り住んだ。

この里に移り住んでから子が生まれた。それが、一平である。

庄平は、生まれたばかりの一平を両手で抱きかかえあげるとじっと一平の顔を見つめながら、——きゅうりを採ってきてやるからな。きゅうりはうまいぞ。みんなできゅうりを作って、腹一杯食べるんだ

という、里を出て行った。河童たちを説得し、この里に引き連れてきた庄平は、里の河童たちがことあるごとにかつて住んでいた村を懐かしがり、きゅうりはうまかったといっているのを聞いて責任を感じていたのかもしれない。

里の河童に見送られて村に向かった庄平は、それっきり戻ってこなかった。河童たちは、手分けして方々を探し回った。川沿いの草むらに身を潜めて人間たちの話に耳を傾けた者もいた。中には、村の中にまで入り込んで庄平を捜す者もいた。

しかし、何の手がかりもなく、とうとう庄平は見つからなかった。亡骸もないまま、河童たちは、庄平を野辺に送った。一平のお母さんは、地に泣き崩れ、ただ庄平の面影を追った。

(あの子を見ておると)

とばあちゃんは、一平を思った。

(庄平の小さいころとうりふたつじゃ)

一平は、頭の回転が速く理解力が鋭いが、そのわりには心はまだ、幼児のように幼い。

(魚が跳ねたことを知りながら、魚が跳ねた水面をじっと見つめておる)

湖の畔に住む河童たちは、生まれたときから魚が跳ねるところを見てきている。日常の風景といってもいいが、もはや風景ともいえないであろう。その証拠に、ひとりで魚をとらえることができる五、六歳ごろになると、跳ねる魚などには見向きもしなくなる。

しかし、一平は、跳ねた魚が作る水紋を不思議そうにいつまでも見ているのだ。

(庄平にも、そういうところがあった)

と、ばあちゃんは思わざるをえない。

おまけに庄平と同様、お調子者であった。

若河童たちの遊びのひとつに、魚の早取り競争がある。ひとりの河童が水に潜り魚を捕まえる。潜っているあいだ、陸の河童たちが、一、二、三と数を数え、一番数が少ない河童が優勝する。十数えるまで、魚を捕まえられない場合は失格である。優勝しても賞品などはなく、失格しても罰ゲームもないが、若河童や子河童は夢中になってこれを行うのである。

一平は、要領がいいのか、結構、成績優秀である。といっても、年上の河童にかなうはずもなく、三度やれば一度は、数を十数える以内に魚を捕れる程度にすぎない。それでも、この年頃

にしては上手に魚を捕る方であった。

——すごいぞ

と、魚を両手につかんで現れた一平に、若河童たちが声をかける。すると一平は、顔をくしゃくしゃにして照れるのである。

——もう一度、行け

と声がかかると、「うん」と誇らしげにうなずいて、また水に潜る。再び魚を捕ってあがってくると、今度は拍手で迎えられる。すると一平は、「行け」とも言われぬのに、また魚を取りに行くのである。

(おだてられると、どこまでも舞い上がっていくのまで庄平とそっくりじゃ)

と、ばあちゃんは思う。

(それに、あの仕草)

一平が、魚を両手で高々と上げる仕草、嬉しそうな顔、誇らしげな態度、どれもこれも庄平によく似ている。

「因果な家系じゃのお」

とばあちゃんは、小さな声でため息をつくように言った。

権平は、人間と河童の共存を実現しようとして悲惨な目に遭い、その息子の庄平は、河童たちの将来を案じて奔走し、そのあげく行方しれずになった。だれに命じられたわけでもないのに、夢を描き、夢を実現しようと走り続け、権平は夢に破れ、庄平は夢の途中で死んだ。

その血が、この孫にも受け継がれているのではないかと思うと、ばあちゃんは気が気でならない。

そのくせ、ばあちゃんは、そういう家であることに誇りを持っている。

お母さんが笑いながら、ばあちゃんのつぶやきに小さな声で答えた。

「権平じいちゃんも、うちの人も、生きる力を持ったひとですよ」

この家に誇りを持っているのは、ばあちゃんだけではない。一平のお母さんも、おじさんも、おばさんも、みな誇りを持って生きている。

一平は、眠ってはいなかった。

寝たふりをして、ばあちゃんとお母さんの会話を聞いていた。

二人の話し声が小さいうえに、なにやら小難しくてよく分からない。

分かったのは、

(ばあちゃんは、じいちゃんの手を取り戻したがっている)

ということだけである。

一平は、キッと奥歯をかみしめた。

(ぼくが、じいちゃんの手を取り戻してくる)

思ったとたん、武者震いがして怖くなった。やはり、無理のような気がした。

(でも)

と一平は、ばあちゃんの小さな声を思い出す。

——亭主の亡骸じゃからのう

そういうばあちゃんの声は細かったが、どこまでも飛んでいこうとするかのように心がこもっていた。

(じいちゃんの手を取り戻してきたら、ばあちゃんは喜ぶだろうな)

ばあちゃんが、嬉しそうに一平の頭を撫でている姿が目には浮かぶ。

——よう、取り戻してくれたな、一平

ばあちゃんの声まで聞こえる。

(ばあちゃん、きっと、じいちゃんの手を見て涙を流すだろうな)

そう思ったら突然、ばあちゃんがかawaiiそうになってきた。

(やっば、行こ)

じいちゃんの手を取り戻しに、である。

(ぼく、権平じいちゃんの孫で、お父さんの子だもん)

と思ったが、深い意味はない。一平は、ばあちゃんとお母さんの話を聞いていた。よくは理解できなかったが、ばあちゃんもお母さんも、じいちゃんやお父さんのことを好きらしい。

(だから、ぼくも)

と、一平の思考は飛躍する。

(行くんだ)

脈絡もなにもあったものではないが、一平にはそれで充分であった。

やはり一平は、お調子者なのかもしれない。

(でも、大丈夫かな)

と、不安が頭をもたげてきた。だれが見ても、大丈夫ではないであろう。

(道には迷わない)

ここから村へ通じる川沿いには、石の標識が建ててあった。川が枝分かれするところに来ると、枝分かれした川の少し先に石が並んでいる。石の数は、村ごとに違う。かつて、ばあちゃんた

ちが住んでいた村へは、三つの石が並んでいる川をたどればよい。

川が枝分かれしたところで立ち止まり、分かれた川の右岸を見、三つの石が並んでいる川を下っていけば村に出る。帰ってくるときは、三つの石を左手に見ながら川を遡ってくればよい。

(けど)

と一平の心はまだ、不安に揺れている。

(行けるかな)

と、くじけようとする心をかなぐり捨てた。

(いやになったら、帰ってくればいいや)

道には迷わないのである。いつでも帰ってこれるだろう。

(きっと大丈夫だ。行ってみよう)

あの、冒険家の若河童が一平に言ったことばを思い出した。

——旅をするコツはな、無理をせんことだ。死んだら元もこもないからな

(無理はしない)

と一平は、心に誓った。

——旅はつらいことも多いけど楽しいことも多い。これは、行った者でないと分からん

あの、冒険家の言うことである。真実に違いない。

(きっと、楽しいことがいっぱい待っている)

そう思うと、心がうきうきしてきた。

一平は、お調子者のうえに楽道家でもある。

夜更けに一平は、家を抜け出した。

ばあちゃんとお母さんが静かに寝入っている。その寝顔に、涙が出そうになるのを堪えながら、ばあちゃんとお母さんの足下を音を立てないようにそっと歩いた。

洞窟の外で一平は、しばらくじっと立っていた。

三日月がゆらゆらと湖面に映り、木々の隙間には、頼りなげに星が瞬いていた。

家の方に振り向こうとした一平の体がそのまま止まり、しばらくして、里を取り囲んでいる山の峰を目指して歩き出した。

一平は、南の山の峰に立つと、また立ち止まった。

里を見たかった。

が、振り返らずにまた歩き出した。

この峰を下り始めてほどなく湧き水が出ている水溜まりがある。そこから、一筋のせせらぎが地を這うように流れ出している。

このせせらぎが、遙かな村への入り口であった。

一平は、せせらぎに沿って歩き続けた。

せせらぎの左の岸に、石の標識を見つけた。

(なぜ、左側に)

と、一平は思った。石の標識は川の右側にある、と聞いていた。それが左側に置いてある。おまけに、石の数は二個だった。村への置き石の数は、三個から始まると聞いていたのだ。

(二個の標識なんて聞いたことがない)

もう少し、いろんなことを聞いてから出発すればよかった、と一平は思った。

せせらぎは、二個の置き石の少し向こうで山の斜面を左に回り込み、行く先が見えない。

一平は、せせらぎに覆い被さる木の枝を押し分けながら川筋を追った。

大きな枝を押し分けると突然、視界が開けた。

(川が合わさっている)

山の別の峰から流れてきた川が、一平がたどってきた川と合流していた。

その川をよく見ると石の標識がなかった。

(ああ)

と一平は、やっと合点がいった。二つの置き石は、帰ってくるときに迷わないためであろう。村へ行くための置き石は、川の合流地点の少し下流に置いてあった。村への置き石だけでは、村へ行くときは迷わないが、帰ってくるときはどっちの川を遡っていいのか分からなくなる。そうならないために、合流地点の上流に二つの置き石が置いてあるのだ。

「えへへ」

と一平は、得意そうに笑った。我ながら、何かひとつ、偉くなった気分がする。

ひとりで新発見をなし遂げた充実感に、気持ちが高揚し、勇気が湧いてくる。

(大したことないや)

と思った。この分なら、すぐに村まで行けるに違いない。

「よし」

という、一平の声には力がみなぎっている。

「行くぞ」

と一平は、川の下流を見ながら吼えた。二つ合わさった川は水量を増している。充分、潜れそうだ。

(川の流れに乗って)

一平の目が、生き生きと輝いている。

(一気に村まで行く)

一平は駆けだした、そのとたん、転んだ。

「痛え」

大きな枝に頭をぶつけてしまったらしい。

「くっそお」

一平は、身体を折り曲げて枝の下をくぐり抜けると、両手を組んで川が流れ下っていく山々を見つめた。

旅立ちなのだ。旅の始まりは、格好良く始まらなければならないであろう。

再び一平は、駆けだした。

川に向かって飛び込む。

一平の足が地を蹴った。と、思った瞬間、つるつるした石に滑って、また転んだ。背中の中羅のおかげで何ともないが格好悪いことおびただしい。

よく見ると、川岸には大きな石がごろごろしている。しかし、河童は普通、これくらいでは転ばない。河童の足の裏は、湿っているうえに柔らかく、つるつるした石でもしっかりとつかむことができる。石ぐらいで転んでいては河童はつとまらない。

「ちえ」

と、一平は舌打ちをすると、両手で石をしっかりと抱きながら、へっぴり腰で川の流りに足を踏み入れた。

一平は、おっちょこちょいでもあった。

小さな村の分校に、四時限目終了のチャイムが鳴った。

「きりーつ」

と、和美がありったけの声を出した。

「れいー」

普通、「礼」と言うときは、「れ」を強く言うのだが、どういうわけか和美は「い」を強く言う。このため、最後が「いー」と延びてしまう。

「和美、礼は短く言いなさい。短く」

と指導するのは、良子である。

(いくら言っても、この子は直らない)

良子は、困り果てていた。

「まだ、いいよな」

と横から口を出してきたのは、友一であった。

「成り立ての一年生だもんな」

「うん」

と、和美が嬉しそうにうなずいた。

「だめよ。友ちゃん。こういうことは最初からきちんとしとかないと」

姉は妹に、常に優しいが、常に厳しい。

「和美ちゃんは大きな声だすからいいよ。ぼくは、最初恥ずかしくて言えなかったもん」

と今度は、寛太が和美の肩を持った。

「寛太」

と良子は、叱りつけるのに忙しい。

(みんなで甘やかして)

良子が見るところ、和美の長所は明るくはきはきしていることだが、短所は、気の向くままに勢いで突っ走ることであった。放っておくと、糸の切れた凧のようにどこまで行ってしまおうか分からない不安がある。

(今のうちに直しておかないと)

とお姉さんは、気が気ではないのである。

「だんだん言えるようになるよね。和美ちゃん」

と、教壇から子供たちを見守っていた先生が言った。

「うん」

和美は、ますます嬉しそうである。

(先生まで)

と良子は、うんざりした。だれも良子の苦勞を分かってくれないらしい。

先生は、校門まで子供たちを見送ると、ひとり教室に戻った。

(なんか、さびしいな)

と、先生は苦笑した。まだ昼を少しまわったばかりなのに教室の中はがらんとしている。物音ひとつ聞こえてこない。今は短縮授業だから、子供たちが帰ってしまうと学校の中は、まだ昼過ぎなのに先生以外だれもいなくなる。

先生は、運動場の見える窓のそばに立つと両手を頭の後ろに組んで、ふうーと息を吐いた。

先生は、この村の生まれである。

——靖之先生

と、村の者たちからは呼ばれている。

(おれのころは、運動場に子供がごった返していた)

靖之がこの村の分校に通っていたときには、まだ学校は村の中にあった。そのころは子供の数が多かった。一学年の人数は二十人以上もいて、教室も学年ごとに分かれていた。運動場は、狭かった。休み時間にいっせいに運動場に出て遊んでいると、他の遊びをしている子供としょっちゅうぶつかる。

(あのころは、疎開してきていたやつが多かったな)

この、貧しく小さな村にも、戦争中、戦火を避けるためにたくさんの子供たちがやってきた。一家でやって来る者もいたが、都会からひとり汽車に乗り、この村に疎開してくる子供もいた。

やがて、疎開していた子供たちは次々と親元に帰っていったが、そのころ靖之は隣村の中学校に通っていて分校のようすを知らない。

その後、高校、大学と進んだ靖之は、この村を離れていた。お盆と正月に顔見せ程度に帰ってくる。

——バイトが忙しいから

と、すぐに帰ってしまう。靖之の家も、この村の他の家と同様、豊かではない。親からの仕送りはあるものの靖之は、学費も生活費も自分で稼ぐつもりでいた。

靖之は、大学を出ると教師になった。

教師になったその年、この村の分校の先生として、この村に帰ってきた。

村の者は、みな驚いた。この時代、中学を出るとすぐに就職する者も多く、大学までいく者はきわめて少ない。高校、大学と、順調に進学していった靖之は、この村の、いわばエリートである。みな、そのまま都会に残り、一流会社に勤め、やがては出世して、村に錦を飾るに違いないと思っていた。

それが、小学校の教師になった。

「教師になるのは、ええがのお」

と、靖之に面と向かっていう者もいる。

「なにも、こんな村に来んでもなあ」

そう言いながら、

「それにしても立派になった。どうじゃ、先生。今夜、わしの家でいっぱいやらんか」

と、嬉しそうに顔をくしゃくしゃにする。

それが、村人たちの、靖之への歓迎であった。

(広すぎて、子供たちがかわいそうだ)

と靖之は、窓の外に広がる運動場を見ながら思った。運動場は、野球とサッカーが同時にできるほど広い。

しかし今、この分校には四人しかいない。友一と良子と寛太、それに和美の四人だけである。四人を、靖之がひとりで、ひとつの教室で教えている。運動場で遊ぶときも四人だけで遊んでいる。学ぶときも、遊ぶときも四人だけである。

運動場で遊ぶ四人の姿を見ていると、時に靖之は、にぎやかだった自分の子供のころを思い出し、さびしさに胸がつぶれそうになる。

(学校が新しくなったとたんに、子供たちはいなくなった)

疎開してきていた子供たちは村から姿を消し、若者も都会で働くために次々と村を出て行き、あっという間に子供たちの数は少なくなった。

(今頃、連中は)

と靖之は、大学時代の友人たちのことを思った。

(おもしろおかしくやっているだろう)

靖之も大学時代、生活に余裕はなかったが、友達と酒を飲みながら夜通し語り合い、時には飲み屋に繰り出してどんちゃん騒ぎをしたりした。

そのころのことを思い出すと、自分がなぜ、今ここにいるのか、よく分からなくなる。

後悔がないわけでもない。かといって、分校から離れたいわけでもない。もし今、転勤の話があれば、そっこく断るだろう。

隣の職員室から、電話のベルが聞こえてきた。

部屋に駆け込んで、電話をとった。

「ああ、どうも」

という靖之の声は、窓ガラスを響かせそうなくらい明るい。

「恵ちゃんのお母さんですか」

恵は、来年春、新入生になって分校にやってくる。

「明日ですか。いいですよ。大歓迎です。明日は四時間目に体育ですから、その時、いっしょに遊びましょう。あっ、そうだ。三時間目は音楽なんです。みんなでいっしょに歌いませんか。恵ちゃんが知ってる歌がいいな。赤とんぼとか、もみじはどうでしょう」

明日の音楽の時間は、教育委員会からのお達しで、『輪唱』のカリキュラムを消化しなければならない、はずであった。

(くそ喰らえだ)

と、この、教師になりたての若造は思った。

(そもそも、全校で四人しかいない学校と、一クラス五十人いる学校をいっしょにするのが間違っている)

(うへの連中は)

とは、カリキュラムを作り上げた役人や学者のことである。

(ばかだ)

ばかにはばかの理屈があるであろう。が、学者の展開する教育理論も、役人の制度論もどうでもいい。靖之には、四人の教え子と、春の入学を心待ちにしている恵がいる。

「赤とんぼは、恵ちゃん、知ってますかね。ゆうや一け、こやけえの」

と、受話器に向かって歌い出した。

「ああ、知ってますか。よかった、よかった。もみじは、どうでしょう。あーきのゆーうひーに、てーるうやーまあ、もーみいじい」

靖之の足が、上下に動いている。

音楽の時間になるとオルガンを弾かねばならない、小学校教師の性である。

河童の川流れ

「ほら、転んだ」

と、良子が叫んだ。

和美が、涙橋の手前一メートルくらいのところに転がっている。

「だから、走るなって言ったでしょう」

良子は突っ立ったまま和美を叱ったが、言い終わらないうちに友一が和美を助け起こしていた。

「ほんとに、もう」

と、良子がやっと近づいてきた。

「怪我したらどうするの」

「怪我してないもん」

和美は、ふくれっ面である。ぷいっと横を向いた。横を向くと、橋のふもとから河原に下りたところに転がりさんの掘っ立て小屋が見える。河原には一面雑草が勢いよく茂り、背の高い葦が川と河原の境目を隠すように生えている。

河川敷は、河童たちが作ったものからやや姿が変わっている。河童の切り開いた河原は、山の斜面の根っこから川に向かって少し傾斜がついていた。その後、村人たちの手によって土が盛られ、平らに均された。その分河川敷は高くなり、少しぐらいの増水では水没しなくなった。

さらに、山裾から三メートルくらいの幅で盛り土がされ、二段式の河川敷となった。二段目は、一段目より三十センチほど高く、よほどの雨でも降らない限り水に浸かることはなくなった。

「河原には降りないわよ」

と、良子が和美の機先を制した。

「行くよ、和美」

しかし、和美は動かない。

じっと、川の方を見つめている。

「和美ちゃん」

と、橋の真ん中から寛太が声をかけた。

「どうしたの？」

と良子は、怪訝な面持ちである。

「あれ」

と、和美が指さした。

「なにか、あるよ」

和美が指さしたのは、川が折れ曲がって、向きを変えようかというあたりだった。

背の高い葦の中に、確かに何かが埋もれている。

「何だろう」

友一は、もう目を剥いている。

「石じゃないよ」

と、寛太が言った。石にしては大きすぎるし、第一、形が違う。葦の中の物体は、妙に細長い。

「行ってみよう」

友一が駆けだし、寛太があとに続いた。和美も続こうとしたが手首を良子に握られ、引きずり戻された。

「行かないの？行こうよ」

と和美が、良子を見上げて言った。

良子は、何か考えているらしい。

(もしかして、お姉ちゃんは怖いのかも)

と、和美は思ったが、良子は全く別のことを考えていた。

(和美を先に帰そうか)

もしかしたらあれは死体かもしれない、と良子は思ったのだ。そんなものを、まだ一年生の和美に見せるわけにはいかない。しかし、帰れ、と言って素直に帰る和美とも思えない。第一、死体と決まったわけでもない。

(猪かな)

猪が溺れ死んだなど聞いたこともない。が、猪は時に、訳の分からない勘違いをして突進してくることがあるらしい。とすれば、猪がなぜか、川を敵と勘違いして突進したあげく溺れたのかもしれない。

和美がしきりに「行こうよ、ねえ」と言いながら、手首をつかんでいる良子の手を引っぱっている。

「和美、離れちゃだめよ」

という良子は、しっかりと和美の手を握りしめながら河原に降りた。

「何だったの？」

といいながら、友一と寛太に近づいていったが、二人とも葦のあいだの怪奇物体を取り囲むようにして突っ立っているだけで何も言わない。

良子は、いやな予感がした。しかし、ここまできた以上は、やめるわけにもいかない。和美の手首を引っ張ってお尻の後ろに隠すと、二人のあいだから葦の中をのぞき込んだ。

ひっ、と息をのんだ。

葦の中に伸びている腕と手が見えた。

「人っ！……」

と、良子の声はうわずっている。

「ひとじゃないの。ひとよ、これ」

「違うよ」

と、寛太が静かに言った。

気が動転しているときに落ち着いている人間を見るのは、しゃくに障るものである。

「あんた、何、落ち着いてるの。知らせなきゃ」

もはや、良子の声は金切り声である。

しかし寛太は、良子ごとときには動じない。

「顔、見てよ」

と、寛太はいう。

「顔まであるのお」

最悪だ、と良子は泣き出しそうな頭で思った。しかし、手があれば動物であろう。動物であれば、当然顔もある。顔がない動物がいたらそれこそ最悪であろう。

「やだよお」

といいながら、良子は葦の中をのぞき込んだ。怖いもの見たさ、とはまさに、今の良子のことであろう。

「やだあ、やっぱり、やだあ。目があるよお」

といいながらも、良子は目を離さない。

「こいつ、すげえー」

と、しゃがみこんでいた友一が感嘆した。

「鼻の穴が、むちゃくちゃ、でっけえや」

「うそー」

といったのは、良子である。寛太を押しよけるようにして友一の横に行くと、鼻の穴をのぞき込んだ。

「ほんとだ。おっきいー」

良子の親指など、すっぽり飲み込んでしまいそうである。

「やだあ」

良子の、やだあ、はまじないのようなものである。やだあ、とさえ言っていれば、この変なもの、これ以上良子に近づいてこないような気がする。

「口はどうなってるの？」

と良子は、興味津々ながら友一の背中に隠れるようにして身体を乗り出した。

口が尖っていた。といっても、猿みたいに口が突きだしているわけではない。かといって、人間のようにのっぺりしているわけでもない。唇全体が、前にせり出している感じだ。唇のあいだから歯がのぞいている。一枚一枚の歯は人間と同じ大きさだが、犬歯は、ランドセルの背も突き通せそうなくらい鋭かった。

「こいつ、すごい出っ歯だよなあ」

友一は、ひたすら感心している。

「何なのよ、これは」

と良子は、ひたすら気味が悪い。

「河童だよ」

と、向かい側にしゃがみ込んでいる寛太が言った。

「背中に甲羅がある」

「うそー」

としか良子は、言いようがない。

「いや、河童だ」

と、友一もうなずいた。

「河童なんて、いないよう……」

良子は、誰にともなく訴えかけた。

「河童だよ。良子ちゃん、手を見てみなよ」

と、友一が言った。

「どうなってるの？」

と良子は、手は見ずに友一の顔を心細そうに見つめている。

「大丈夫だって。ほら、見てみて」

そう言うと友一は、この、河童とおぼしき生き物の手首をぎゅっとつかんだ。

ぬるっとしていた。

(うへっ)

さすがに気持ちが悪い。が、友一は我慢した。男の子なのだ。ここで恐がっているのは、友一の男が立たない。

「ほら」

と、良子に見えるように手首を持ち上げた。

良子は顔をのけぞらせながら、食い入るように見つめている。

「水掻きがある」

と友一は、得意顔である。

「だから、河童だよ」

なるほど、指のあいだの水掻きが大きい。第一関節の近くまで皮膚が張り出していて、手のひらがやたら大きく見える。これが人間なら、指が短く見えるところだが、指は指でちゃんと伸びている。よく見ると、第一関節から先が長い。

(おまけに)

と良子は、怖さも忘れて観察中である。

(すごい爪)

分厚いかぎ爪が指から飛び出しているように見えた。

(それでも河童だなんて)

いかなものか、と良子は思った。河童は伝説のはずである。そんなものがあるはずがない。良子は幽霊の話を聞くと怖くなる。だから良子は、幽霊はいるかもしれないと思っている。しかし、河童の話を聞いてもあまり怖くない。だから、河童は、おとぎ話だと思っていた。

それなのに、いきなり、河童の手を見せられ、河童だと信じろ、と友一は迫ってくる。たかが河童だが、されど河童である。今まで存在しないと思っていたものが、実はこの世に存在しているという。それを認めることは、今までの良子の世界観が崩れ去ることであろう。良子は、本能的に拒絶するしかない。

「でも、それって、あんまり、そんな……」

自分でも何を言っているのか分からない。

「良子ちゃん」

と、さらに寛太が追い打ちをかける。

「甲羅があるんだってば」

確かに、ある。良子にも、背中を覆ってなお背中からはみ出している甲羅は、さっきから目に入っている。見ても、見ないようにしていたのだが、もう見るしかない。

河童らしきものは万歳するように手足を伸ばし、仰向けになってのびている。背中が地面にくっついていて甲羅の全体はどうなっているのか、よく分からない。しかし、甲羅の先端は、身体の丸みに沿って胴体から少しはみ出していた。

その、はみ出している部分だけで甲羅と分かる。亀の甲羅みたいに分厚くはないし、色も亀ほど黒くはないが、見るからに硬そうである。

「こっち来てよ。足もすごいよ」

と、友一が言った。いつのまにか、良子のそばからいなくなっていた。

寛太が葦をかき分けて足下に近づくと、和美が寛太の横に走ってきた。良子も、三人に吸い寄せられるように移動してきた。

「でっかい」

と、寛太は驚いた。

確かに大きかった。寛太の足の二倍はある。しかし、人間の足が大きくなったのとは違っていた。人間の足のように長方形ではない。足首のところからもみじの葉のように広がっている。おまけに、水掻きが発達していて、どこまでが足の甲で、どこからが指なのかよくわからない。それでも指は、確かにある。短い指がもみじの足から生えていた。

「やだあ、爪がない」

と、良子はしょんぼりしている。手の爪は、すごかった。それに比べて、足の爪はしょぼすぎた。人間の爪とあまり変わらない。

突然、良子が、

「うっそー」

と叫んで、友一の腕にすがりついた。

足が、ぴくぴくと動いたのだ。

「生きてるの？この河童」

良子もとうとう、この、変なものが河童であることを認めたらしい。圧倒的な事実の前には、良子の世界観など無力であった。

「生きてるよ」

といったのは、寛太である。

「ほら、胸が少し上下に動いている」

良子は今まで気づかなかったが、改めて見ると、河童の胸がわずかだがゆっくりと動いていた。息をしているらしい。

「あんたさあ」

と、良子が恨めしそうな目を寛太に向けた。

「知ってたのお……」

良子は、さっきからずっと、生きていても知らずに河童のそばにいたのだ。生きていくなれば、それなりの心構えが必要である。生きていけるのなら、生きていけると良子に言うべきであろう。女の子に対して思いやりがないにもほどがある。

「良子ちゃん、恐がらなくてもいいよ」

と、友一が良子を振り返った。

「こいつ、子供だよ」

河童の背丈は、寛太と同じくらいだろうか。それに、身体に比べて頭が大きい。顔もつるつるしていて、しわなどひとつもない。どう見ても体つきは子供である。身体だけではない。顔つきも子供に違いない。鼻も口も人間とは違っている。が、猿でも小猿は見ただけで分かる。この河童の顔つきは、どう見ても子供であった。

「子供と言ったって」

と、良子は不安である。

「大人に知らせようよ」

と、良子は言った。相手は、伝説の生き物、河童なのだ。本来、存在しないはずのものである。何をしでかすか分からない。

残暑の陽差しが、河童を取り囲む四人に容赦なく降り注いでいる。時折動く風に、葎が音を立てて揺れた。良子の肩まである髪も風に乱れ、舞い降りた髪の毛が顔にかかる。

「ねえ、友ちゃん。知らせたほうがいいよ」

と、良子が髪を掻きあげながら言った。

「だめだ」

良子は、友一の声の調子に驚いた。普段の、明るくて、どこかへらへらした声とは違っていた。何事かを決心した男の、てこでも動かない声である。

「どうして」

と良子は、友一の顔をのぞき込んだ。

「大人に知られたら、こいつ、動物園に入れられてしまうよ」

いくら河童伝説のある村とはいえ、実際に河童が現れれば大騒ぎになるに違いない。大騒ぎになれば、この村だけでは騒ぎは収まらず、最後には動物園の檻の中に收容されてしまうであろう。

「かわいそうだよ。まだ、子供なのに」

そう言われて、良子もこの河童がかわいそうになってきた。

「ぼくは、動物園の檻に入れられるのはいやだ」

と、寛太が河童を見つめながら言った。寛太は自分を、目の前の河童に置き換えていた。河童の国に迷い込んだ寛太は、河童たちにとらえられ、河童の国の動物園の檻に入れられている。死ぬまで、一生、その檻の中で暮らすのだ。

「絶対、いやだ」

寛太は、顔を上げ、友一と良子の顔をにらみつけながら言った。

「私も、やだ」

といったのは、河童の顔の横にしゃがみ込んでいる和美である。手には、木の切れ端を持っている。その棒で河童の頬をつんつんと突いた。

「やめなさい、和美」

良子は悲鳴を上げると、河童の身体を飛び越えて和美を抱え上げた。

「運ぼう。ここじゃあ、見つかる」

と、友一が言った。

「どこ、運ぶの？」

と、良子の膝のうえに乗っかっている和美は、両脚をばたばた動かしながらはしゃいでいる。

友一は、ちょっとことばにつまった。

そこまで考えていなかった。

「あそこ」

と、寛太が指さしたのは、河原に建つ掘っ立て小屋である。

掘っ立て小屋といっても、転がりさんの小屋ではない。転がりさんの小屋は、二段敷きになっている河原の二段目の、橋のすぐ近くに建っている。

その、転がりさんの小屋の反対側、河原が尽きるところに、もうひとつの小屋が建っていた。畳三畳ほどの広さで、誰が建てたのかも、いつ建てたのかも分からない。村の大人たちもほとんど利用しないが、鍵もかかっておらず、出入りは自由である。中には、使い古しの鍬や釣り道具が置いてある。かつて、転がりさんが良子のおじいさんに買ってきた、鮎捕りのための網もここに放り込まれていた。

「よし」

友一は、物事を企画するのはへただが実行力はある。

「おれが頭を持つ。寛太は、脚を持つ」

女の子は使わない。和美は小さすぎるし、良子は和美を膝に抱きかかえてしゃがみこんでいる。ちょっとしたマリア様である。ここは、男の子の出番であろう。

友一と寛太は、一、二の三、で河童を抱え上げた。

(お、重い)

と、二人同時に思った。どうにか三歩歩いて、また地面に降ろした。

「甲羅が重いんだよ」

寛太が息をついている。

「私、持とうか？」

と、良子がつぶやくように言う。いかにも、持ちたくなさそうな口ぶりである。

「いや、いいよ」

というと、二人はまた河童を抱え上げた。

今度は、五歩進んだ。

和美を膝から降ろして、良子が近づいてきた。

「じゃあ、良子ちゃん」

男だけで運ぶことをあきらめた友一ではあるが、何を張り切っているのか元気がいい。

「良子ちゃんは左脚を持って。最初持ったときはぬるぬるして気持ち悪いけど大丈夫だから」

良子は、泣きたい。

(何が大丈夫なのよ)

ぬるぬる、と言われて良子は、蛇とナメクジを連想してしまった。どっちも良子は、見るのさえ大嫌いである。

おそろおそろ良子は、河童の脚に手を触れた。

(ひゃー)

と、心の中で悲鳴を上げた。

が、それほどでもない。ぬるぬるというより、じっとり湿っているという感じだ。気持ち悪くなくもないが、ナメクジを手掴みする覚悟をしていた良子にとっては充分我慢できる範囲内ではあった。

やっと、行列が進みはじめた。和美も、河童の手を持って行列に加わった。もっとも、持っているというより手にしがみついているだけだったが。

ようやく小屋の中に河童を運び込むと、どっと尻もちをついた。両手を伸ばして身体を支え、天井を向いて深呼吸をした。

和美は、年寄りみたいに喘ぐ三人を尻目に河童の観察に余念がない。

「変な耳」

と、和美が不思議そうに言った。人間の耳とさほど変わらないが耳の穴が閉じかけたかと思うと開き、開いたかと思うとまた閉じかける。

「うーん」

と、三人の年長者はうなった。

「鼻も。見て、見て」

と和美は、ひとり元気である。和美に言われるがまま、三人は鼻の穴をのぞき込んだ。鼻の穴の筋肉が、ぎゅーと盛りあがる。鼻の穴を完全に塞ぎそうになったところで、肉がすうーと引いていって鼻の穴が開く。

「分かった」

と、良子が叫んだ。教室で、算数の問題が解けたときの声と同じだった。

「水の中で閉じるのよ。河童は水に潜るでしょう。その時、耳や鼻の中に水が入ってこないようになってるのよ」

良子は笑っている。今日、この河原に降り立ってから初めての、笑い顔だ。

「なるほど」

と、寛太は感心している。

「良子ちゃんは、頭もいいんだ」

良子は、口やかましい。特に、年下の寛太や和美にはがみがみ言う。いつも叱られているが、一方で良子は、優しくて面倒見がいい。だから、がみがみ言われても寛太は、反発などしない。ただ、

——何でも、よく、気がつくひとだ

と思っていた。しかし、それに加えて、頭も切れるらしい。

「えへ」

と、良子は照れくさそうに笑った。

「それほどでもないって」

というと、だらんと投げ出していた脚を横座りに引っ込めた。背筋も心もち伸び、右手の中指は髪の流れを直している。「頭も」と言われて、何か勘違いをしたらしい。

「いいか、みんな」

と言う声に、一斉に友一の方を振り向いた。

友一は、河童の頭をまたぐように立っている。両手を握りしめ、閉じた唇には力がこもっていた。

「このことは、四人だけの秘密だぞ」

秘密は、ひとを酔わせる。酔うことが許されるのは秘密を共有している者だけである。それゆえに酔い加減は心地よく、しかも酩酊するほど深い。

「うん」

「うん」

と、寛太と和美が次々とうなずいた。

「良子ちゃん」

と、友一が鋭い目で見つめた。

「分かってるわよ」

と、良子はむくれている。

「四人だけの秘密よ」

秘密は、仲間の結束を強化する。その反面、秘密を守れない者は、二度と仲間には戻れない。良子は今、そのことを友一と寛太、妹の和美に誓ったのだ。

ただ、気に入らないのは、友一が良子だけ、わざわざ名をあげたことである。これでは、秘密を漏らすかもしれないのは良子だけだ、とっているようなものだ。良子は、仲間たちから信頼されていないようでちょっと悔しい。

「それで」

と良子は、友一を見あげて言った。

「これからどうするの？」

友一が、ぽかんと口を開けた。

何も考えていなかったらしい。

夏の日には、まだ高い。開け放たれた小屋の引き戸から差し込む陽差しは、良子と寛太の背中には届かず、土間に照りつけている。

気絶した河童は、長方形の小屋の真ん中に寝かせられていた。

頭の方には、友一と和美が陣取っている。

「暑い」

友一は、そう言うと立ち上がった。この小屋には、向かい合って、小さな折り戸がある。友一は、折り戸の留め金はずし、棒をつっかえて風を入れようとした。

友一の手が留め金に触れようとしたとき、小屋の外から声がした。

「あなた達、何やってるの」

智絵が、引き戸のところに立っていた。

智絵は、バスから降りると必ずお梅さんの店に顔を出す。そのあと、よく、村の中をぶらぶらしながら家に帰ったりする。

この日もお梅さんの店に顔を出した。しばらく話をしたあと、涙橋の方に向かった。川沿いにしばらく堤を歩いて家に帰るつもりだった。

ところが、松の木のところで、小屋の前でひと固まりになっている子供たちを見かけた。しばらく見ていると何か運んでいるらしい。

不審である。

智絵は、子供たちを追うことにした。涙橋を渡って河原に降り立ったところで、子供たちは小屋の中に消えた。小屋の外に立って聞き耳を立てると、中から、

「これからどうするの？」

という、良子の声が聞こえてきた。何かを子供たちだけで、こそこそとやっているらしい。といっても、子供のやることだからたかがしれている。智絵は、危険なことでなければそのままそっと引き返すつもりでいた。

ところが、良子の問いかけのあと小屋の中は静まりかえってしまった。

いよいよ怪しい。

智絵はついに、介入することを決断した。

小屋の引き戸に立った。

それでも、子供たちは気づかない。

子供たちは何かに気をとられているらしく、小屋の中は沈んだ雰囲気である。

とうとう智絵は、何をやってるのか、と声をかけた。子供たちが、一斉に振り返った。智絵を見上げる子供たちはみな、怯えたような顔をしている。

「どうしたのよ、あなたたち」

という、智絵のほうかとまどっている。

「何でもないよ」

と、友一が叫んだ。声が裏返っていた。

智絵が、じろりと友一をにらみつけた。

「あ、あの」

友一は、しどろもどろである。友一の作った秘密結社は作ったばかりなのに、もう崩壊寸前であった。

「遊んでただけだから」

そういう、秘密結社の頭領の声は消え入りそうである。

「何でもない」

といいつつ友一は、気弱な視線を足下の河童に移してしまった。自然、智絵の視線も友一の足下に移動する。

「何、それ？」

智絵が、小屋の中に足を踏み入れてきた。

万事休すである。

智絵が良子と寛太の背中越しにのぞき込んだ。

(ああ、ばれた)

秘密結社は、秘密を保つ間もなく崩壊した。

(引き戸を閉めとけばよかった)

と友一は思ったが、あとの祭りである。もっとも、すでに、それ以前に見られていたのだが。

「河童じゃないの」

と、知恵が言った。

(えっ)

と、友一は驚いている。智絵の声が嬉しそうだった。顔も笑っている。

智絵は、やや興奮気味である。

(河童は、やっぱりいたんだ)

頬が上気していた。

智絵も、智絵の友達も、河童の伝承を聞いて育った。しかし、中学校にあがるころになると、誰も河童など信じなくなった。お梅さんが、見たことがある、と言っても友達は、作り話だよ、と言って一笑に付すようになった。そんな時は、智絵は、お梅さんの顔を思い出しながら、黙って友達の話聞いていた。

智絵も、河童などいないと思っていた。

しかし、智絵の生まれたこの村では、河童の話が、長い時間、時代が変わっても、村人の口から口へと受け継がれてきたのだ。特に、お梅さんの口から語られる河童の話は、生き生きとしていた。お梅さんの話の中で、河童たちは息づいていた。

河童なんていないよ、と言うのは簡単であろう。しかし、河童の伝承は、村の人たちが語り継いできたものなのだ。村の人たちは、河童を語り継ぐことで、過去から現在へと、村の心を託したのだろう。

——お梅さんの心を大事にしなくっちゃ

そう、智絵は思っている。刹那の、合理的主義的判断は、自分を根無し草にするだけなのかもしれない。

「死んでるの？」

智絵は、眉をひそめて心配そうに言う。

「生きてるけど溺れちゃったんだよ」

と、寛太が言った。

「溺れた？」

と智絵は一瞬、啞然とした。

(河童が溺れるなんて)

よほどの不覚者に違いない、と智絵はおかしい。ふっと笑った。笑いながら河童を見ると、お腹のあたりがぷっくりとふくらんでいる。智絵の目が、みるみる大きく見開いた。智絵が叫んだ。

「水、飲んでるじゃない、この河童」

「だから、溺れたんだって」

と寛太は、すましたものである。

「吐かせなきゃ」

という智絵は、鞆を放り出し、河童の両脚を持った。

「顔を横に向かせて」

といいながら、河童の脚を脇の下に抱え込み持ち上げはじめた。友一が、河童の頬を両手ではさみ、顔を横に向けた。智絵に持ち上げられた河童の腰が地面から浮いたその時、

「うっ」

という声とともに、河童が勢いよく水を吐きだした。

「うつむかせて」

と、智絵が河童の脚を下ろしながら言った。

子供たちが、河童の身体をごろんとひっくり返した。

「うう」と呻いて、河童はまた水を吐いた。

吐き終わると、河童の手が動いた。地面をつかもうとしている。

「大丈夫なの？しっかりしなさい」

と声をかけながら、智絵は河童の背中をとんとんと叩いた。

河童は、完全に意識を取り戻したらしい。両手を伸ばして上体を持ち上げた。

「吐くだけ吐いて」

智絵は、背中をさすりながら言った。河童は、また水を吐いた。今度は少しだけだった。四つん這いの姿勢になった河童は、肩で息をしている。智絵は、河童の背中を撫でつづけた。荒かった河童の息が少し収まってきた。

「大丈夫？」

と智絵が声をかけると、驚いたことに河童がうなずいた。

(ことばが分かるんだ)

これなら、庄屋の庄左右衛門さんも河童と話ができるに違いない。

河童はようやく、肩で息をするのをやめた。やめたと思ったら、ごろんとひっくり返った。大の字になって目を閉じ、深呼吸を繰り返している。息を吐くとき鼻の穴から盛大に空気が吹き出し、小屋の中を舞う塵を吹き飛ばした。

河童をじっと見つめていた智絵が突然立ち上がり、見上げている子供たちに向かって言った。

「薬を取ってくるから、あなたたち、ここにいて」

そういうと、あっという間に小屋から出ていった。

智絵のあとを追うように友一が立ち上がった。

——秘密を守って

といたかったが、友一は、二、三歩歩いて立ち止まった。いまさら、秘密も何もないであろう。

急ぎ足の智絵が土手を上り、橋に向かおうとしたとき、後ろからクラクションが鳴った。

振り向くと、靖之が車の窓から顔を出している。

「智絵ちゃん、こんなところで何してるんだ」

事情の差し迫った智絵には歯がゆくなるほどのんびりした声である。

（ちょうど、よかった）

と、智絵は思った。

（足がやってきた）

靖之の車は、転がりさんの車に負けないほどのおんぼろ車である。もっとも、転がりさんの車よりずうっと大きいから、室内は余裕がある。そのうえ、転がりさんのようなセダンではなくバンであった。

靖之は、そのバンの後部座席をいつも倒していて薄っぺらな布団を敷いている。子供たちを載せるためであった。子供たちと帰りがいっしょになるときは車のバックドアを開けて四人を押し込むのだ。これをやると、子供たちはいつも大喜びである。

「先生、家まで乗っけて」

と、智絵はいった。

「いいよ」

靖之は、いつも気軽である。

「何してたの、こんなところで？」

と、車を発進させた靖之が聞いてきた。

「散歩よ、散歩。先生」

「それさあ」

と、靖之が困ったようにいった。

「先生は、やめてくれないかなあ」

靖之と智絵は四つ違いだから村の小学校にいっしょに通っていたことになる。もっとも、当時は子供の数も多く、男の子は男の子同士、女の子は女の子同士でグループを作っていて、智絵といっしょに遊んだことはないし話したこともほとんどない。

それでも、幼なじみである。

智絵から、「先生」と呼ばれると、背中あたりがむずむずしてくる。

「あら、どうして？」

「どうも、智絵ちゃんから言われると、ちょっと、なあ」

「ふうーん」

と智絵は、わざとらしく言うと、靖之の顔を見た。

「私から言われるのはいやなんだ」

「いや、そういう意味じゃない」

と靖之は、あわてた。

「どういう意味」

智絵は、妙に絡んでくる。

「意味は別はないけど。智絵ちゃんとは四つしか違わないし」

「四つも違う」

と、智絵はしつこい。

「でも、小学校のときから知ってるし」

「でも、先生と話したことはあまりないしー」

「それは、そうだけど」

といいながら靖之はやっと、智絵が普段の智絵と違っていることに気づいた。いつもの智絵はさらりとしているのに、今日はどうしたことであろう。

(何か、おれ、智絵ちゃんを怒らせたかな)

と思っただが、心当たりは全くない。

「智絵ちゃんとは幼なじみだし。それに、智絵ちゃんは、高校生だし……」

あまり年は違わないから、という意味だったが、智絵は、

「ああ」と、わざとらしい声を上げた。

「幼なじみの小娘に先生と言われるのは、いやなんだ」

「小娘って……ええー？」

と靖之が、素っ頓狂な声で叫んだ。

ことの発端は、つい数ヶ月前、五月の初めに遡る。

靖之の母親が、田んぼのかたわらで握り飯を頬ばりながらぼろりと漏らした。

「智絵ちゃんを靖之のお嫁さんにもらえたらねえ」

それを横で聞いていた靖之の父親は、軽忽であった。

「それはええ」

という、翌日の朝、さっそく智絵の家の田んぼに現れ、

「智絵ちゃんを、うちの息子にもらえんかのお」

と、喚いた。

「おお」と智絵の両親は、田んぼの中から嘆声をあげた。

「先生の嫁にもろうてくれるのなら、もったいないくらいじゃ」

「決まりじゃな」

と、靖之の父は吼えた。

お昼に、智絵の家の田んぼで、靖之と智絵の両親四人、握り飯を食べながら語らった。

「うちの智絵はまだ高校生じゃから嫁入りは来年じゃな」

「春か秋じゃな」

「わたしがあんたに嫁いだときは桜が咲いとった」

「おお、おお。あんたは、きれいじゃた。祝言のときに桜の花が舞い込んできて。この嫁御料は

、きっと幸せになると思った。わたしも、もう一度嫁にいきたくなかったなあ」

「ばか、言うな」

「さほど、幸せではないな」

「いや、幸せもんじゃ。智絵ちゃんみたいな子に恵まれて」

「あんたんとこの靖之先生も、村一番の好青年じゃ」

「ええ夫婦になるじゃろう」

「若いというのは、うらやましいのお」

「春じゃな、祝言は。桜の咲くころがええ」

「それまでは許嫁でええ」

段取りは決まった。

あとは手続きを踏むだけである。

靖之と智絵の父は、二人揃って、酒二本を持ち、いっきさんの元に参上した。

「それはええ」

と、いっきさんも同意した。が、気がかりなことがある。

「それで、本人の意志はどうなんじゃ」

へっ、という顔をすると父親二人は、互いの顔を見合わせた。

「こういうことはじゃな」

と、いっきさんは説教を始めた。

「親同士で決めてもどうにもならん。昔はそれでもよかったが、今は、結婚する者同士が納得せんといかんのじゃ」

いっきさんは、ひとしきり新時代の結婚観を述べると言った。

「しかし、まあ、ええ縁談には違いない。わしが二人の気持ちを確かめよう」

いっきさんは、さっそく、涙橋を渡って分校に行くと言った。職員室で切り出した。

「智絵ちゃんを嫁にもらわんか」

仰天したのは、靖之である。教師になり、この分校に赴任してまだ一ヶ月ちょっとである。毎晩、翌日の授業の予習をし、翌日、子供たちに教え、教育委員会に提出する書類を作成する。それが終わると、一日の反省会をひとりで開く。反省会では反省することばかりで、あまりの未熟さに冷や汗が出る。

「結婚どころではありません」

と、靖之は返事をした。

ところが、いっきさんは、

「智絵ちゃんは、嫌いかのお？」

と、とんでもないことを聞いてきた。

「嫌いもなにも、相手はまだ高校生ですから」

そうか、といっきさんはうなずくと、学校を出て、智絵の家の田んぼに向かった。

「先生はのお」

といっきさんは、田んぼの畦から言う。

「今、てんやわんやじゃから、少し待ってくれ、と言っておった」

田んぼの中に突っ立っていた智絵の両親が、駆け寄ってきた。

「智絵では不足じゃと」

「いやいや。智絵ちゃんはまだ、高校生じゃからな。少し待とうということじゃ」

「なるほど」

と智絵の両親は、小首をかしげながら納得した。

その夜、智絵の両親は、智絵にことの顛末を話した。

智絵にとっては、驚愕の事実である。

(わたしに、ひと言も言わないで)

と思ったが、父の、

「しかし、先生は断ってきた」

ということばに、ひっかかってしまった。

「なぜ、先生は断ったの？」

別に靖之の嫁になるつもりはなかったが、断られたとあっては心穏やかではない。

「小娘は嫌なんじゃろう」

と父は、あっさりと言ってのけた。

これには、カチンときた。

(小娘とは何事)

と、智絵は思わざるをえない。たかが、四つ年下なだけである。

(鼻垂れ小僧だったくせに)

と思ったが、これはさすがに靖之には酷であろう。もっとも、高校三年生になった智絵から見れば、小学生の靖之はそう見えるに違いない。

(いつか、仕返しをしてやる)

と智絵は、心に決めた。

その仕返しが、今、この、車中の会話であった。

「小娘って。おれ、智絵ちゃんのこと、小娘なんて言ってないよ」

と靖之は、おろおろしている。

靖之を横目で盗み見ていた智絵が、くすっと笑った。

(ここらで許してやるか)

智絵は、話をまとめに入った。

「でも、お父さんが言ってたけどなあ。わたしと先生の縁談を進めたら、わたしが小娘だからと言って、先生が断ってきたって」

「そんなこと、ひと言も言ってないよ」

今度は、智絵が驚いた。

「縁談、断ったんじゃないの」

「ぼくは、忙しくてそれどころじゃありません、て言っただけだよ。第一、小娘なんて言ってないよ」

そう言う靖之の声を聞きながら、智絵は、

(縁談、どうなっちゃたんだろう)

と、ぼんやり思った。

車が、智絵の家の前で止まった。

靖之が気まずそうな顔をしている。

いじわるをしかけた智絵としては、少しかわいそうではある。

「先生、河童さんのお祭り、行くんでしょう？」

「行くよ」

と靖之はまだ、しょんぼりしている。

「いっしょに行きませんか？」

「ああ」と、靖之の顔が輝いた。

「行く、行く」

やっと、智絵の機嫌が直ったらしい。

「それじゃあ、先生、その時に」

「うん、その時にね」

智絵は、車から降りると一目散に走り出した。背後で、車が発進した音が聞こえてきた。

(一丁あがりー)

と、胸の中で叫んで家の中に駆け込んだ。

恋に恋してなんとやら

居間の薬箱の中から、腹薬、痛み止め、風邪薬、体温計を取り出すと、水屋の上に置いてあった風呂敷を手にした。

そこで、はたと気づいた。

(河童に人間の薬が効くか)

そう思ったが、考えても仕方がない。

智絵は、薬を載せた風呂敷を丸めると、土間に駆けおり、台所に走った。セメント作りの流しの前を左に折れ、薄暗いかまどを背に立つと、野菜が箱に入っごろごろしている。

智絵は、かまどの前に風呂敷を広げると、きゅうりを投げ込んだ。

(あっ、そうだ)

智絵は、かまどのそばの新聞紙をひったくと流しに戻った。流しの横に、三本のひもで三段に吊られたざるに、三個ずつ握り飯が乗っている。

(こんなに食べるかな)

と思いながら智絵は、新聞紙に握り飯をぜんぶ包み込み、風呂敷の中にそっと置いた。

流しの横の棚には魚肉のソーセージがのっかている。

(これも、持っていっちゃえ)

五本束になったソーセージを三個、風呂敷の中に放り込んだ。

ソーセージの横に、魚の干物が置いてあるのが目に入った。

(これ、持っていったら絶対、何か言われるな)

と思ったが、手は止まらない。次々と、棚のうえのものは風呂敷の中に飛んでいく。

(文句言われたら先生にやったって言おう)

靖之にやったと言ったらそう文句は言われぬ、と智絵は、こすっからく思っている。

食料調達を終えた智絵は、結んだ風呂敷を抱え、流しの横から庭に出た。

鶏を足で追って、プロパンガスのボンベの横に置いてある自転車の後ろに風呂敷を降ろすと、縁側に立てかけてある板を持ち、それを荷台に結びつけた。女性用の自転車は、荷台が小さい。少し大きな荷物を載せるときには、この板を使って荷台を広げるのである。

板の上に風呂敷包みを載せてひもで結わえると、智絵はまた走り出した。家の中に駆け込んで、かまどのそばに放り出してある空の一升瓶を手を取った。流しの蛇口をひねり一升瓶に水を詰める。地下水を汲みあげるモーターの音が、ぶーんと鳴った。

七分目、水の入った一升瓶を風呂敷包みの中に押し込むと、河原の掘っ立て小屋に向かって自転車を走らせた。

駐在所の前をとおり、神社前の三叉路を左に折れ、お梅さんの店の前まで来た。

「智絵ちゃん」

と、店の中からお梅さんが声をかけた。智絵は急いでいる。自転車を漕ぎながら、お梅さんに

「ちょっと、そこまで」

と笑いかけた。

「何じゃ、その荷物は」

といったのは、いっきさんである。

智絵は、急ブレーキをかけて自転車を止めた。お梅さんのすぐ後ろで、いっきさんが自転車の荷物をにらみついていた。

「どこへいくんじゃ」

と、お梅さんが言った。どうも、雰囲気がよくない。智絵を怪しんでいる感じがひしひしと伝わってくる。

「あ、あの……」

と智絵は、とびっきりの笑顔を作った。

「ちょっと、そこまで」

お梅さんは、一歩、二歩店から出ると、身体を乗り出して涙橋を見やった。

「そこまでって、学校か」

「そ、そう……」

「先生とここにか」

「あっ。そう。先生のところ」

「さっき、車の音がしたがのお」

とお梅さんは、真綿で首を絞めるような言い方をする。

(しまった。見られた)

と、智絵は思った。靖之と二人並んで車に乗っているところをお梅さんといっきさんに目撃されたに違いない。

(どうしよう)

ことは重大である。嫁取り話の主人公二人が仲良く車に乗っていたのだ。おまけに、仲人役のいっきさんまでいる。噂になるに違いない。

(わたしはいいけど)

と智絵は、胸の中でつぶやいた。

(靖之さんは困るよ)

靖之は、いやしくも教師である。教師たる者が、現役の女子高生と付き合っているなどと噂を立てられたらどんな処分を受けるか分からない。

「あ、あのう……」

と言いつづけたが、あとのことばが続かない。うそで始まった話は、一度ほころび出すと修正がきかない。智絵は、冷や汗が出てきた。

「たぶん、三左右衛門めの車じゃろ」

と、いっきさんがいった。またお梅さんが、身を乗り出して涙橋を見やった。なるほど、橋のたもとに車がない。転がりさんは、小屋にいるときはいつも、そこに車を止めている。

「あれは、転がりさんの車じゃったか」

と、お梅さんは納得した。

智絵は、胸を撫でおろした。二人は、車の音を聞いただけで、靖之と智絵の姿を見たわけではないらしい。智絵の早とちりであった。

(よかった)

と思ったが、安心するのは早かった。

「先生はまだ、学校におるんか」

と、お梅さんが言った。

「う、うん」

智絵は、うなづくしかない。

「それで、その荷物はなんじゃ」

とお梅さんは、荷台の風呂敷包みに目をこらす。

「あっ、あー……学校で使うの」

「一升瓶をか」

とうとう智絵は、ことばにつまった。つまったが、黙りこくってはますます怪しまれる。とりあえず、笑った。

お梅さんは、山の向こうの、見えない学校を見ていたが、突然、智絵の顔を見て恐ろしげに言った。

「まさか、智絵ちゃん。あんた、先生と」

お梅さんの視線は、智絵と一升瓶のあいだを行き交っている。

「違う、違う」

と、知恵は悲鳴を上げた。お梅さんは、学校で、智絵と靖之が酒盛りをする場面でも想像したらしい。これなら、車でデートしていたと言われるほうがよほどましである。

お梅さんの想像に触発されたのか、いっきさんは、さらに過激であった。

「智絵ちゃん、まさか、先生と駆け落ちするつもりじゃ」

「ちがーう」

と、智絵は絶叫した。

「見て、これ」

と智絵は、一升瓶を取り出すと栓を抜き、いっきさんの鼻元に持っていった。

「水よ」

そういうと、一升瓶を傾けて、いっきさんの手のひらに水を注いだ。

「なるほど、水じゃ」

「水ぐらい、学校にもあるじゃろう」

とお梅さんは、なおも智絵を攻めたてる。

「そうなんだけど。つい、水を入れちゃったの」

智絵の声が落ち着きを取り戻している。どうにか、立ち直りかけているらしい。

「風呂敷の中は何じゃ」

とお梅さんはまだ、攻撃中である。

「魚の干物とか、ソーセージとか」

「何するんじゃ」

と、いっきさんがあきれたように言った。

「理科の授業に使うの。先生は、身近なものを使って生きた授業をするんだって」

「ほうー」と二人同時に声を上げた。

「近頃は、小学校でそんなことをするのか」

とお梅さんは、感心したようにいった。

「おもしろそうな授業じゃな」

と、いっきさんもにこにこしている。

智絵はついに、虎口を脱した。

「それじゃ、わたし、荷物を先生に届けてくるから」

「ああ、気を付けてな」

お梅さんは、いつもの口調で智絵を見送った。

「嫁入り前の娘が、一升瓶持ってうろちょろしてはいかんぞ」

と、からかうようないっきさんの大声が背中ごしに聞こえてきた。

(やばかった)

智絵は、涙橋を渡りきると、二人の姿が見えないのを確認して、そっと土手を降りた。

(それにしてもだな)

と、智絵は思った。

(わたしが先生と二人っきりで学校の中で酒盛りなんて)

なぜ、そんなことを思いつくのか不思議である。それに加えて、お梅さんといっきさんの、智絵を見る目のいぶかしさはどうであろう。今まで、花よ蝶よ、とかわいがられていた自分が、なにやら急に、不良娘に落ちた気分である。

(智絵ちゃんは)

とは、自分のことである。

(まじめな、良い娘ですよ、だ)

お梅さんに悪態をついたら、いっきさんの顔が浮かんできた。

(駆け落ちねえ)

あまりにばかばかしすぎて怒る気にもならない。

(駆け落ちかあ)

と智絵は、ため息をついた。

そういう愛の形に憧れている自分がどこかにいるのに気がついた。

(先生と駆け落ちねえ)

小屋を前にして、智絵の足は止まり、あらぬ方向に視線は泳いでいる。

(ばかばかしい)

と思ったが、恋する年頃の乙女の空想は、夏雲よりも高く、青空いっぱい広がっていく。

どこか遠くの町の、アパートの部屋の台所で、エプロン姿の智絵が料理を作っていた。

テーブルの上には、色も鮮やかな数々の料理が乗っていた。

智絵がエプロンをはずしながら幸せそうな顔をどこかに向け、甘ったれた声でだれかに呼びかけた。

——あなたあ

ぷっと、智絵が吹き出した。

(恥ずかしい)

智絵の足がまた、そろそろと動き出す。

遠い町のアパートの部屋には、男の人がいた。その人が、

——智絵

と呼んだ。声は靖之だが顔はよく分からない。

(嫁入り前の娘を呼び捨てにするなんて)

と、智絵は思った。

(失礼な)

そう思った瞬間、夢から覚めた。

もう目の前に、小屋が迫っていた。

智絵は、荷をほどくと、風呂敷包みを抱えて小屋の中に入った。

「あら」

と、智絵が驚いて声をあげた。

河童が、あぐらをかいて座っていた。

「もう大丈夫なの？」

と声をかけると、この河童は、正座をし両手をついた。

(何をしているんだろう)

と、思っていると、

「ご親切にしてください、どうもありがとうございました」

と、深々と頭を下げた。

智絵も、あわてて座り込むと、

「いえいえ、どういたしまして」

と、頭を下げた。

(なんか変だな)

と、智絵は思ったが、礼には礼を持って接するのが礼儀というものであろう。

河童は、頭を上げるとまた、あぐらをかいた。

(河童は、正座はにがてなんだ)

とおかしかったが、人のことは言えない。智絵も、五分正座すると足が痺れる。

——そんなことでは、嫁にはいけんぞ

と、いつも言われる。確かに、嫁にはいけない。祝言のあいだ、花嫁は正座しつづけなければならない。楚々と立ち上がるたびに足が痺れてこけていたのでは祝言が終わらない。祝言が終わらなければ嫁にはなれないであろう。

「智絵姉ちゃん、この子、一平っていうんだって」

と、和美が言った。

智絵はまた驚いたが、河童はことばを話すのである。名前があって当然だろう。

(人間と同じようなもんだ)

と、智絵は思った。

「一平は、河童さんの手を取り戻しに来たんだって」

友一は、そう言うと、右手を一平の肩に回し、「そうだよな」と笑いかけた。もう友一は、すっかり友達になりきっている。

「そんなことより、一平君だっけ。身体は大丈夫なの？」

「うん、もう大丈夫」

と一平は、力強くうなずいた。

「そうか。薬はいらなかったかな」

というと智絵は、風呂敷をといた。といた風呂敷の中から、ぷーんと匂いが漂ってきた。一平

の腹の中で虫が大合唱を始めた。

「お腹、空いてるんだ」

と、智絵が一平の顔をのぞき込んだ。

「へへ」

と一平は、頭をかいている。

「じゃあ、食べて」

と智絵は、風呂敷ごと一平の前に押しやった。

一平は、風呂敷を見つめた。魚はないが良い匂いがする。良い匂いはするものの、どれから食べていいのか、見当もつかない。

「どれでもいいから、好きなものを食べて。あなたたちも」

と智絵は、子供たちに言った。

「お握りあるから、食べなさい」

わっと、子供たちの手が伸びてきた。

一平は、緑色の細長いものを手に取った。粒々がついている。鼻に近づけて匂いをかいだ。

「それ、きゅうりよ」

と、良子が教えた。

一平は、きゅうりをじっと見つめている。

「大丈夫よ。毒じゃないから」

良子は、かいがいい。

「河童はきゅうりが好きだって、みんな言ってたから」

「うん」

と一平が、首が折れそうなほどうなずいた。一平は、きゅうりに心配していたのではなかった。感動のあまり、ことばを失っていたのだ。

(これが、きゅうりか)

一平は、右手に持ったきゅうりを高々と掲げ手首を右に左に返しながら目を細めている。

(これが)

と一平は、なおもきゅうりを振りかざしている。

(お父さんの志だ)

と思ったが、志とは何のことなのか分からない。ばあちゃんが、そう言っていた。

一平は、きゅうりにむしゃぶりついた。

(うまい)

これなら里の河童たちが二言目には、きゅうりはうまかった、というはずである。

きゅうりを食べ終わると、二本目を取ろうとしてやめた。

(もったいないから、とっとう)

一平は、握り飯を取り上げた。

「それは、握り飯よ」

と、良子は親切である。

「握り飯」

と一平が聞き返すと、

「米と麦で作ってあるの」

と、さらに良子が詳しく解説した。

(ああ、米か)

権平じいちゃんが堤を造ったとき、庄左右衛門さんが振る舞ってくれたという、あれである。

(これが、握り飯か)

一平は、何のためらいもなく握り飯を頬ばった。

(結構、いける)

ばあちゃんは、河童は米は食べぬ、と言ったが、これなら河童も食べてもいい、と思った。握り飯を食べ終わると変な感じがした。

(喉がつまる)

一平は、水を探して首をちょこまかと動かした。

「何をしてるの」

と、良子が言う。

「水、飲みたいんだけど」

と、一平が言うと、良子は

「はい、これ」

と、一升瓶を差し出した。

「ありがとう」

と言うと一平は、一升瓶を取り上げた。

変な景色であった。

一平は、むしろを二枚敷いて、そのうえにあぐらをかいて座っている。その前には、風呂敷が広がり、風呂敷のうえには、きゅうりや握り飯、魚の干物などが山盛りになっている。一平の横には、一升瓶が立っていた。一平は、その一升瓶を片手で持ってぐびりぐびりやりながら、目の前の食べ物を次から次へと驚づかみ、口の中へ放り込んでいくのである。

子供がひとりで酒盛りをしている。

そんな感じだった。

一平の前では、子供たちが、一平がやってきたわけを、智絵に話して聞かせている。智絵がないあいだに、子供たちはすでに一平から、河童の里のことや権平じいちゃんのこと、きゅうりを取りにいった行方しれずになった庄平のこと、そして一平がこの村にやってきた理由を聞き出していた。

ほとんど、友一がひとりでしゃべる。友一は、一平の大冒険に感動していた。冒険談は、それを実際にやった者より聞いている者のほうが感動するのであろう。友一は、感動のあまり興奮していた。興奮のあまり、友一の話は、ときどきわけがわからなくなる。そこに、やはり興奮した和美が闖入ってきて、ますます話が混乱する。それを、寛太と良子が修正する。

聞いている智絵は、四人の交通整理をしつつ、話の筋を頭の中で確認していくしかない。乱気流の中を飛ぶパイロットのような気分である。

一平は、ひたすら食い、飲んでいた。

飲み食いしつつも、一平は、ほろ苦い。

(調子に乗りすぎた)

あの、二つの川の合流するところで川に入り、流れに乗った。

まだ山間の、川の流れは速い。

ぐんぐん進んだ。

途中、魚を捕り、食べ終わるとすぐに川に入ってまた進んだ。

愉快だった。

川の流れに乗っているせいで泳ぐ必要はなく、身体のバランスを取るだけでよかった。

もっとも、息をするときには苦勞した。流れに身体を取られるために、流されようとする身体を押しとどめながら頭を持ち上げ、息を吸わなければならなかった。それでも、ときどき水を飲んだりした。

流れに沿って泳いでいると、滝のように川が下っているところが何か所もあり、そういう時は、川から上がって陸を歩いた。

歩きは、堪えた。河童の足は、歩きには不向きである。たいした距離ではなかったが傾斜がきつい下り坂である。

(きつい)

もう休もうか、と思うといつも、緩やかになった川が現れた。

ゆっくり流れる川を見るたびにくたびれた身体に精気が戻った。

すっかり暗くなってから、一平は、川から上がり眠りについた。

翌日は、まだ夜が明けきらないうちに目が覚めた。

川に入って魚を捕り、食べ終わると、すぐに出発した。

川の流れが、一平を運んでくれた。

ただ、きのうほど愉快的な気持ちになれなかった。その代わりに、

——行ける。行くんだ

という決意のようなものが、一平の心に芽生えていた。その決意のようなものは、あの、愉快的な気持ちと比べると重っ苦しかった。しかし、それには、一平を突き動かす力があつた。その力が、一平に勇気を与えた。

一平は、川の流れに乗り、ときに水を飲みながら息継ぎをし、瀬を歩き、沢で魚を食べ、淵を避けて陸を歩いた。

その日、一平は、空に星が見えだしたころ眠りについた。

翌朝、目が覚めた時は、もう夜が明けていた。

太陽はまだ低く、早朝の陽差しが川面に反射していた。

一平は、しばらくぼんやりとしていた。

目の前で、魚が跳ねた。

(ごはんを食べなきゃ)

そう思った一平は、川に入って魚を捕まえて食べた。

一匹で、腹一杯になった。

腹一杯になると、元気が出てきた。

(よし、行こう)

一平は、川の流れに乗り、村を目指した。

途中、何度も淵にぶつかり、そのたびに陸を歩いた。

(少し休もうか)

と、何度も思ったが、

——行かなくっちゃ

という気持ちで、一平の身体を突き動かした。

その日、一平は、魚を食べながら夕焼けを見た。

久しぶりに見る夕焼け空のような気がした。

(ここは、どこなんだろう)

今日一日、川のまわりの風景を見ていないような気がした。

翌日、目が覚めたのは、もう太陽が高く昇ってからだった。

ふう、と息を吐き出すと、一平は立ち上がった。

(行かなくちゃ)

この日、川の流れは緩やかだった。流れに乗っているだけではあまり進んでいる気がしない。手足を動かして泳ぐことにした。

一平は、泳ぎながら、

(今日は、ついでに)

と思った。流れが緩やかだから水を飲む心配もなく、滝のような淵にもぶつからなかった。が、やがて、叩きつけるような水の音が聞こえてきた。それは、川が、急斜面に沿って流れ下る合図だった。この音がしだしたら川の勢いが身体を押し出す前に川から出なければならない。そうしないと、あっという間に川は勢いを強め、身体ごと淵に持っていかれてしまう。一平が旅の二日目に学んだことであつた。

川から出ると、水音を左耳にとらえつつ陸を歩いた。背の高い木が生い茂る山の中を進んだ。少し歩くと、急な下りに出くわした。

一平はため息をつくと、斜面を降りはじめた。一本の木を抱きながら、その下にある木に狙いを定め、滑るように移動した。

急な斜面はすぐに終わった。

一平は、川の音が聞こえるのを確認すると、また歩き出した。

突然、森が終わり、目の前に、夏草に覆われた野原が現れた。

見渡すと、野原が空に消えていた。この野原は、山の一角の、台地のうえにあるらしかった。

(あそこに立てば)

と野原が、空に向かって突きだしている台地の角を見ながら思った。

(下流のようすが分かるだろう)

ひとつ大きく呼吸をすると、野原を斜めに横切り、断崖に立った。

思わず、一平は息をのんだ。

眼下に、村が広がっていた。

回想 一我が冒険（続き）

一平は、呆然として村を見下ろしていた。

何の感慨も湧いてこない。

静かな村のうえを鳶が飛んでいるのが見えた。

（村だ）

やっと、一平は胸の中でつぶやいた。

身体の中が、ぞくぞくと震えだした。

それは、奇妙な感情だった。嬉しさでもなく、楽しさでもなく、それらが解け合い、悲しさまで混じり合っていた。叫びだしたい衝動もあった。すべてのものを叩き壊してしまいたかった。心が持っているありとあらゆる感情が渦を巻いていた。その渦を、怒りにも似た激情が、さらに激しく揺さぶった。

「とうとう、来た」

一平は、村をにらみつけながら、唇を振るわせた。

身体の左から、川の音が聞こえている。

奥歯を噛みしめると、村へとつづく崖のうえを川に向かって歩き出した。

野原が途切れると、二メートルくらい下に、草もまばらな、でこぼこの一本道が伸びている。

（人間が造った道だ）

この道を下れば、村に出るに違いない。

一平は、野原から飛び降りると道を横切り、川をのぞき込んだ。

もう、淵ではなかった。

川の流れはまだ速かったが、少し下流を見ると川幅も広くなり、急速にその勢いを弱めている。川面の色も濃くなっていた。どうやら、川の深さも深くなっているらしい。

一平は、川に向かって斜面を降りはじめた。さっきの、野原に出るときの下り坂とは比較にならないほど急峻だった。転げ落ちないように、片方の手で木をつかみながら、もう一方の手を下の木に伸ばし、木から木に飛び移るように斜面を下った。

ようやく、川辺に降り立ったときには肩で息をしていた。

肩で息をしながら川に沿って歩き出した。

川に入る場所は、すぐに見つかった。

川に入ろうとして一平は、躊躇した。

（少し、休もうか）

一平は、休むべきであったろう。しかし、一平の身体の中にはなお、あの、得体のしれない感情が渦巻いていた。その感情は、一平の血をたぎらせていた。たぎる血のしぶきは、一平の身体を突き抜けて迸り、疲れた身体をしゃにむにの行動に駆りたてた。

一平は、川の流れに静かに足を踏み入れた。

音もたてずに潜った。

ひと掻き、ふた掻きすると息が苦しくなった。

顔を出して息を吸うとまた潜り、水を掻こうとした。

(うっ)

一平は、水中で目を剥いた。

身体が、鉛のように重かった。

一平は、力の限り手足を漕いだ。

しかし、水は重かった。手足を動かそうとしても水が壁を作り、どうしてもその壁を突破できなかった。

一平は、水面に上がろうとした。が、それさえもままならなかった。手足を必死に動かして、やっと顔を出した。

目の前に、岸があった。

一平は顔を出したまま、岸に向かって泳ごうとした。

両手と両脚を円を描くように水の中で動かし、水を掻き分けようとした。

しかし、円は描けなかった。胸の前で両手を合わせ、円を描き始めることはできても、水を掻き分けようとする、とたんに力が入らなくなった。

それでも、一平はあきらめずに、何度も同じことを繰り返した。

しかし、川岸は、いっこうに近づいてきてはくれなかった。

それまで浮いていた一平の頭が、水面から出たり入ったりし始めた。

一平はもう、泳ぐことをやめていた。自分の意志でやめたのではなく、いつの間にか、ただ手足をやみくもに、ばたばたと動かしていた。

岸が、手のすぐ先にあるように見えた。

(もう少し)

そう思っているあいだにも水を飲んだ。

頭が水中に沈むたびに川岸がぼやけて見えた。

(もう少し)

一平が思うことは、それしかなかった。

川岸がぼやけている。頭を水面から出しているはずなのに、川岸が近くなったり遠くなったり、大きくなったり小さくなったりした。

まあ、生きていたので

(そのあとのことは覚えていない)

気がついたら、この小屋の中にいた。

(やばかった。死ぬとこだった)

一平は、決してむちゃはしないという、旅立ちのときに決心したことばを思い出した。振り返ると、一日目は用心しながら進んだが、二日目にはもう、前に進むことに夢中でそれ以外は考えていなかったような気がする。

(もう、あの時は疲れてたんだ)

自分の身体の疲れが自分で分からなかった。旅をし、冒険をする者にとってはあってはならないことである。

(でも、まあ、生きてるし)

と一平は、一升瓶の水を飲みながら思った。

(今度は、もっとうまくやろう)

そう思うと、なにやら急に嬉しくなってきた。今ごろ、河童の里から人間の村までの旅をなし遂げた喜びがこみ上げてきた。

(おれ、とうとうやったんだ)

あの、関門海峡を制覇した若河童には及びもつかないが、あっちは青年であった。一平はまだ、子河童である。自分で自分を誉めても、許されるであろう。

(旅は)

と、一平は思った。

(やった者にしか分からない)

もはや一平は、いっばしの冒険者気取りである。

(くじけそうになったら、縮こまるより、ぶつかっていけて、ばあちゃんが言ってたっけ)

ばあちゃんは、その意味を長々と説明してくれたが、今、やっと分かったような気がした。

(でも、助けられなかったら死んでたな)

一平が今生きているのは、この、目の前でしゃべっている人間のおかげであった。彼らがいなかったら、一平は今ごろ、土左衛門になって川にぷかぷか浮かんでいたかもしれない。

(きっと人間は大騒ぎするだろうな。もしかしたらミイラにされちゃうかも。そしたら、じいちゃんの手といっしょに神社に祭られるんだ)

一平は、顔をしかめた。ミイラになった自分が目に見えるようで気色が悪い。

(冗談じゃない)

と、一平は思った。

(ぼくは、生きて、みんなのところに帰る)

死んだら、何のために旅をしたのか分からなくなる。旅は、生きて戻ってこそ旅になるのである。死出の旅は、生きている者のすることではない。それは、旅立つときに、すでに死んでいる者がする旅であろう。

「一平君」

と、智絵が声をかけた。子供たちの、こんがらかった説明もようやく終わったらしい。

「一平君はいくつなの」

智絵には、この、わらべ河童がひとりで、じいちゃんの手を取り戻しに来たことが信じられない。

「じゅう」

と一平が、自信なさそうに言った。

「十歳」

と、小屋の中が一斉に驚いた。

「すぎえな」

と友一は、のけぞっている。

(たぶん、十歳ぐらい)

と一平は、心の中でつぶやいた。河童は、十歳までは歳を数えてくれるが、それ以上は数えてくれない。河童は、三百年も生きるのである。一つひとつ歳を数えていても無意味ではあった。

一平はすでに、十歳をすぎている。ただ、十歳といわれたのが、去年だったか一昨年だったか判然としない。だれも一平の年齢のことはいわないし、一平も自分の歳を気にしたことがないから自分でも自分の歳がよく分からない。

「なあ、一平」

と友一は、この、剛胆すぎる友達に向かっていった。

「河童って、頭に皿があるんじゃないのか」

だれしものが、最初から思っていた疑問である。

一平の頭は、どう見ても皿を載せたようには引っ込んでいない。むしろ、人間の頭よりも丸みを帯びている。もっとも人間の頭は卵のように楕円をしているが、一平の頭は、もっと円に近い。その頭の頂上を中心にして皮膚の色が灰色に変わっている。灰色の部分は手の平くらいの大きさがあって、ちょうどお皿を伏せたような感じである。

灰色の地肌の部分には髪の毛がない。髪の毛は、伏せた皿の縁に沿って斜め下に突き出すように短く太い毛が生えていた。

「皿はないよ」

と、一平が言った。人間は、河童の頭には皿があって、皿の水がなくなると力が出なくなると思っている。そういう話を一平も聞いたことがある。

——ばかじゃないの、人間は

と、一平は言ったものである。

いつも皿に水を入れておかないとなると、河童はいつも、突っ立っていなければならなくなる。しゃがむときも、棒を身体に入れたようにしゃちほこぼっていなければならない。川に入るときは身体を斜めにするが、その時は、皿の水がこぼれないように、あごを空に向かって突き上げなければならない。不自由なこと、このうえない。

「ちょっと触っていいか」

と、友一が気兼ねしながら言った。

「うん」と、一平はうなずくと頭を突きだした。

友一の手の平が、ぴしゃっと一平の頭に吸いついた。

「硬い」

ごわごわしているように見えたが、それどころではなかった。石のように硬かった。

「うーん」

と、智絵も一平の頭を触りながら感心している。

(これは、あれだな)

と、智絵は思った。

河童はいわば、水棲動物である。水の中を泳がないことには生きていけない。水の中を泳げば、当然水の抵抗がある。頭の中央がくぼんでいては、抵抗が大きくなり、身体の舵を取ることもままならないであろう。河童が頭に皿を載せているというのは、人間がおもしろおかしくした伝説に違いない。

(それに、この硬さ)

河童は、狭い川の中で暮らしている。あちらこちらと泳ぎ回るうちに、水中の石や木にぶつかることもあるに違いない。この、頭の硬さは、その時の衝撃から身を守るためのものであろう。

「百聞は一見にしかず、か」

智絵は、ため息をついた。人の話は当てにならない。

「あのさあ」

一平の頭を堪能し終わった友一は、まだ物たらなそうにしている。

「腕な、腕」

「腕が」

友一が何を言いたいのか、見当もつかない。

「腕、伸びないのか？」

「んっ？」

と一平は、きょとんとしている。

「河童は、腕が伸びるんじゃないか？右手を引っ張ると、左手が縮んで、右手が伸びてくるんだって」

「へえー」

と、一平は驚いた。初耳である。友一は、河童よりも河童の身体に詳しいらしい。

「知らなかった」

と、一平は言った。

「引っ張ってみて」

一平が、友一に左手を差し出した。友一は、一平の手首を持つと、思いっきり引っ張った。

一平の身体が、友一めがけて吹っ飛んできた。

「うぎゅ」と友一が、一平の身体の下から呻いた。身体は小さいが、甲羅を背負っているから重いのである。

「伸びないよ」

と一平は、起きあがりながらがっかりしている。右に左に腕が伸び縮みしたら、魚を捕るときさぞ便利だろう。

「友一君。一平君は疲れてるんだから、いいかげんにしなさい」

と、智絵が友一を叱りつけると、

「そうよ。いいかげんにしなさい」

と、良子が付け加えた。

女二人に叱られて、友一はばつが悪い。

「権平じいちゃんの手は、どうやって取り戻すんだ」

と、話を変えた。

「あさってしかない」

といったのは、寛太である。

「なぜ」

と、友一が聞くと、

「あさっての祭りには、河童さんの手が神社に置いてある」

と、寛太は答えた。

権平の手は、はじめは、庄屋の三左右衛門が作って奉納した祠に納められていた。しかし、木の祠はいつしか朽ち、また、ミイラになっているとはいえ祠に置きっぱなしでは、河童の手の保存にも問題があった。結局、権平の手は、桐の箱に入れられて、神社とは別棟の、今いっきさんが寝起きしている社務所の奥にしまい込まれるようになった。

それが、河童さんの祭りのときだけ、社務所の奥から出され、神社の奥の本殿に安置される。祭りが終われば、また、社務所の奥深くしまい込まれてしまう。

寛太が言う、「あさってしかない」というのは、そういうことであった。

智絵は、子供たちの会話を聞きながら心境はやや複雑である。

(それって、泥棒じゃないのかなあ)

神社から、いわば盗み出すのである。

とはいえ、この、勇気ある子河童を見捨てることもままならない。

「あれっ」

と、和美が小さな声で叫んだ。

「一平ちゃん、寝ちゃったよ」

一平は、あぐらに座ったまま、身体を二つに折って頭を垂れている。疲れ切っているのだろう。智絵は、子供たちに指図して一平を寝かせると、五人そろって静かに小屋を出た。

「大丈夫かな」

と、心配そうに振り向く子供たちをうながして引き戸を閉めると、

(お休み、一平君)

と、胸の中でつぶやいて小屋をあとにした。

この小屋は、もうすぐ取り壊されることになっていた。理由は、だれも使わないからで、使うときといえば、捨てたい物があるが捨てるのはもったいなく、かといって家に置いておくほどでもないという物をこの小屋に持ち込むときだけであった。いわば、村共有の、廃品永久置き場である。結局、今年の春の寄り合いで、稲刈りが終わってから取り壊すことが決まり、それまでは使用禁止になった。

(だから、ここにはだれも来ない)

と、智絵は自信を持っている。寄り合いで決めたことを破るような者は、転がりさんを除いて、この村にはだれもいない。その転がりさんでさえ廃品ばかりが置かれたこの小屋にはやってこない。

(転がりさんは、いないな)

家の中は静まりかえり、自動車もない。

子供たちは、一平の寝ている小屋を見ながら涙橋を渡っていく。

「そんなに見てたら、気づかれるわよ」

と智絵は、子供たちを促した。

やっと渡り終え、お梅さんの店にさしかかったとき、また、店の中からお梅さんの声が出た。

「もう、授業は終わったかの」

(うわーっ、と……)

智絵は、小屋に来るときにお梅さんと交わした会話のことをすっかり忘れていた。

「どうじゃった。理科の生きた授業は」

と、いっきさんまでいる。

(ひえー)

と、智絵は心で叫んだ。

(最悪……)

子供たちは、理科の授業といわれて、きょとんとしていた。今日は、理科の授業など、あつてない。

「おもしろかったよね、みんな」

智絵の形相は、必死である。

「うん、おもしろかった」

と、和美がにこにこしながら答えた。

「そうか。それはよかったのお」

いっきさんもお梅さんも笑っている。

(助かった)

こんな場は、速く逃げだすに限る。

「授業が延びて、だいぶ遅くなったから、わたし、急いでみんなを家まで送るね」

そう言うと智絵は、「行くよ」と子供たちをせき立てた。

智絵と子供たちを見送りながらお梅さんがいっきさんに言った。

「智絵ちゃんが、先生の嫁になるという話はどうなったんじゃ」

「智絵ちゃんが高校を卒業してから話を進めようと思うとる」

「ほう」

と、お梅さんは嬉しそうである。お梅さんには、男の子が二人いるが娘はいない。それだけに智絵が、実の娘のようにかわいくてならない。

「二人が承知すればええがのお」

と、お梅さんが言うと、いっきさんは、

「承知するも何も」

と、声を張り上げ、

「あの二人が夫婦にならねば、この村が立ちゆかん」

と、新時代の結婚観など忘れたような乱暴なことをいった。

「それはそうと」

とお梅さんは、店の奥に引っ込みながらいう。

「大工さんは、もう終わったかのお」

いっきさんは、あさっての祭りの準備で忙しい。

今日は、祭りのことで、バスに乗って町の村役場に出向き、帰ってきてお梅さんの店に顔を出し、駆け落ち娘の智絵と出くわした。

それからすぐ神社に戻り、大工さんと話をした。祭りを前に、神社の方々に手を入れていたのである。大工さんとの話を終え、社務所で祝詞の文言を書こうとして、下書き用の半紙が残り少なくなっているのに気づき、またお梅さんの店にやってきた。

そこでまた、子供たちを連れた智絵に出くわした。狭い村とはいえ、一日に二度も智絵に出くわすなど前代未聞である。

「大工は、明日中には終わるじゃろう」

「何が、残っておるんじゃ」

「鍵じゃ。河童大明神のお箱に鍵を取り付けたら終わりじゃよ」

「河童大明神のお」

とお梅さんは、おかしそうに笑った。

権平の手のミイラは、河童大明神などという、大それた神号をもらっているわけではない。

そもそも、いっきさんの神社は、河童とは縁もゆかりもなかった。

——言祝（ことほぎ）神社

というのが、神社の正式な名前である。

名に由来があった。

昔むかし、ある男が、蕨取りに行った。

向かった場所は、今、神社がある裏手の山であった。山をしばらく登ると、中腹あたりにぼっかりと木が生えていない台地があり、春になるとたくさんの蕨が顔を出した。

男が、台地に近づいたときであった。

なにやら妙に騒がしい。

男が怖る怖るのぞいてみると、なんと、神々が宴を楽しんでいた。

男の神々もいれば、女の神々もいる。輪になった神々の真ん中で男女の神ふたりが踊っていた

。男の神が女神から離れ、大きく開いた両手を狭めたり開いたりしながら上下に動かし、ゆっくりと円を描くように舞う。と、女神は男神とは反対方向に、男神のあとを追って、やはり円を描くように舞う。両手を腰のところから胸のあたりまで上げ、そこで手首を優雅に返すと、腕を伸ばし、伸ばした腕をゆっくりと顔のあたりに持ってくると、手の甲で頬をかすめながら、また腰のところに戻していく。女神の肩から羽衣がたなびき、春の光を受けて、七色に変化していた。

円を描き終えた男神と女神は、顔を見合わせて踊りつづけた。男神がひよっとこのような顔をして、女神の頬を撫でるように両手を動かしながら身体をせり出すと、女神は笑いながら両腕を身体の後ろに回し、手を羽ばたかせて腰を引く。男神が、「あれよー」というように両手を高々と上げて身体を引くと、女神が男神の、脇の下からへその横までを撫でるようにしながら腰をせり出す。

神々の打ち鳴らす手拍子にあわせ、男神と女神は踊りつづけた。向かい合って踊り、それぞれ反対方向に円を描きながら踊り、また向かい合って踊る。同じ動作だが、ひとつとして同じ踊りはなかった。

神々の踊りをのぞき見していた男のところに、えも言えぬ香りが漂ってきた。

——酒じゃ

と、この男は思った。神々が飲む酒に違いない。それにしても、何とかぐわしい香りだろう。このまま天に昇っていきそうなほど心地よい香りだった。

男は、酒の香しさにのぼせてしまった。いつの間にか身体をさらけ出し、神々といっしょに手拍子をうっていた。

神々が、一斉に男のほうを振り向いた。

男は、驚き怖れ、地に這いつくばった。

その、頭上に男の神の声が降ってきた。

——来よ、来よ

その声に誘われて顔を上げると、丸太に腰かけた男神が手招きしていた。

男が這いつくばりながら神々に近づくと、輪の中にいたひとりの男神が両手に持っても大きすぎるほどの杯を手渡した。

男が恐縮して杯を受け取ると、女神がやってきて神酒をなみなみと注いだ。

——もったいなや、もったいなや

という男の手は、がくがくと震えている。

飲め、と言われて少し口に飲むと、身体と心がふわーと軽くなった。いよいよ、天にも昇って
いけそうである。男は、神の前であることも忘れ、喉を鳴らして飲み干した。すると、また女神
が酒を注いでくれた。男はまた、飲み干した。何杯も飲みつづけ、男は酔った。それも、したた
かに酔った。神々に混じって手拍子をうち、神々の踊りを囃したてた。

丸太に陣取った男神が男に言った。

——我も、春を言祝（ことほ）ぐべし

男は、突拍子もない声で田植歌を唄った。

神々は喜び、さらに酒を杯に注いでくれた。

男が目覚めると、もう夜になっていた。

山の頂のうえに月がかかり、天空には星が光っていた。

——夢か

と男は思ったが、身体にはまだ、確かに、神々の酒の名残が残っている。それでも、信じられない面もちで、台地の野原を見渡した。

あっ、と男は声を上げた。

あの、男の神様が座っていた丸太が転がっていた。

男は、無我夢中で村に駆け戻った。

最初は、男の話信じなかった村人も、野原の丸太を見て信じた。村人たちは、入れ替わり立ち替わりこの野原にやってくるが、こんな丸太は見たことがなかった。

それから村人たちは、この野原を『神が原』と名付け、毎日、朝な夕なに拝み、神が原の手入れも怠らなかった。

神が原の手入れをしているうちに、村人は奇妙なことに気づいた。

あの、男神が座っていた丸太が野原の隅っこに移動していた。村人は、丸太を野原の中央に戻したが、丸太はまた、隅っこに戻っていた。何度やっても同じだった。

——神様はもう、丸太はいらんと言ってござらっしゃる

村人たちは丸太を、神が原から村に持って帰ることにした。

しかし、いくら神が、いらん、と言ったとはいえ、一度は神様が座った丸太である。薪にするわけにもいかない。

結局、神社を造ることにした。

神が原を御神体とする神社である。

神が原から持ち帰った丸太は、神々がこの村にやって来るときの目印として神社に奉納することになった。神の依代（よりしろ）である。

やがて、神が原を背にして粗末な、しかし総檜作りの神社ができた。

粗末ではあるが、奥まった本殿の前には三十畳ほどの拝殿もある。本殿と拝殿のまわりには廻廊を巡らせ、廻廊と階段の端には、削っただけの木で高欄も作った。階段を覆うように屋根を伸ばし、いちおう向拝もできた。

もともと、そこで、この村の資金は尽きた。神社の横に、普通の百姓家より少しだけ立派な家を建て、神主一家の住まいとした。

鳥居も、ひとつだけだが作った。

鳥居には、神社の名を掲げる。

村人たちは、男が神から与えられた

——我も、春を言祝ぐべし

ということばから、『ことほぎ神社』と名付けた。

神主には、神々と宴を共にした、あの、蕨捕りの男が選ばれた。

そのような成り立ちを、いっきさんの神社は持っている。

河童とは、何の関係もない。

河童の手は、庄屋の三左右衛門がたたりを恐れ、河童の怒りを静めるために神社に奉納しただけで、この神社の成り立ちからすれば、いわば、神社の宝物でしかない。

——河童大明神

などは論外である。河童の手のミイラが、神様であろうはずがなかった。

しかし、この村は、河童のおかげを被っていた。河童の超人的な働きで洪水の心配がなくなった。が、河童は、その働きを感謝されるどころか、刀で追い回され、手首を切り落とされるという、かわいそうな目にあった。

我が身に置き換えれば、こんな目に遭えば人間を恨むに違いなかった。案の定、庄屋の家には不幸が相次ぎ、橋の一本松は不気味にその姿を変えた。

一家を不幸に陥れ、木の姿を変えてしまうなど人間の力を超えたものであるに違いない。

人々は、河童の呪いに恐れおののきつつも庄屋屋敷以外には何の変事も起こらないことに感謝した。さらには、河童たちが堤を造ってからは一度も洪水が起こらない。

——河童は、庄屋屋敷に呪いをかけつつも、村と村人たちを災難から守っている

いつの間にか、そう村人たちは思うようになっていた。

ひとに呪いをかけ破滅させる力も、ひとを災苦から守る力も、ひとを超越した力であろう。ひとを超越した力の持ち主は、もはや、神である。河童は、神としての名を持たないが村人の心の中では神であり、この村と村の者たちの守護神であった。

いっきさんは、神主である。神主であるから、河童が神社の神でないことはよく知っている。同時に、河童がこの村の守護者であることも知っている。

(呼び方が難しい)

神主としては、村を守っている河童の霊を、

——河童がのお

と、呼び捨てにするわけにはいかない。かといって、村人たちのように、河童さん、と軽く『さん』付けで呼ぶのも神事を司る神主としてはいかなものかと思われる。

ついに、いっきさんは思った。

(面倒くさいわい。河童大明神でええじゃろう)

神に仕える神職としてはいいかげんな結論であったが、神主以外には出せぬ結論でもある。プロフェッショナルとは、そういうものであろう。

「河童大明神の御神体が入った大事な宝箱じゃからのお」

といっきさんは、お梅さんに言う。

「鍵でもかけねば、安心できんわい」

うんうん、とお梅さんがうなずいた。

いっきさんが帰ろうとして腰を浮かしかけたとき、店の前を自動車が通りすぎた。

店の外に出てみると、転がりさんが橋のたもとに止まった車から降り土手を下りていった。

「三左右衛門めは」

といっきさんが、腹立たしそうにいう。

「本気で、この村に温泉宿を作るつもりか」

「温泉宿ではのうて、ホテルじゃ」

「宿とホテルは、どう違うんじゃ」

「宿は和式で、ホテルは洋式じゃ」

さすがにいっきさんも、それくらいのことには知っている。

「なにゆえ、洋式かじゃ」

「さあ、のお。わしは、宿のほうがええがのお」

山芍薬の夢

三左右衛門は今、人生をかけた大事業に取り組んでいた。

温泉の湧く、大歓楽ホテルの建設である。ホテルの中には大小いくつもの宴会場を作る。宴会場だけではなく、卓球場やビリヤード場などの遊戯施設も作る。温泉が売りだから、浴場も大小取りそろえるつもりであった。

(レストランもバーもいる)

三左右衛門の頭は、ホテルの設備を考えはじめるととめどがない。

(子供用の遊び場もいるし駐車場もいる)

三左右衛門は、頭の中の設計図だけでは飽きたらず、川の河原を紙代わりにホテルの設計を練っていた。河原に木の杭を何本も立て縄を張りめぐらせた。間取りのつもりである。さらに、大小さまざまな石を並べた。ある石の列はバーのカウンターであり、その前に転々を並べられた小石は、バーの客席であった。

子供の遊びのような作業に三左右衛門は熱中した。

その結果、河原には子供たちが喜びそうな迷路が出現した。

三左右衛門は、河原の迷路を見ながら思うのである。

(売りは、温泉と蛭、それに河童の伝説じゃ)

河童の伝説も蛭も、確かに、この村にある。

問題は、温泉であった。

この村には、温泉がなかった。

(掘らんかっただけじゃ。掘れば出るじゃろう)

温泉の問題が解決すると、あとはホテル建設の場所である。

(ここじゃ)

と三左右衛門は、河童が切り開いた河原を見渡した。背後の山をつぶして平らにするのである。

(学校は、駐車場にする)

と、自分が骨折って作り上げた小学校をあっさりつつぶした。

(涙橋の前後は飲屋街にする)

飲屋街は、三左右衛門が唯一気の置けるところである。

(ネオンが瞬くぞー)

三左右衛門にとっては心躍る光景であるが、お梅さんの店はなくなるに違いない。

(年寄り引退じゃ)

と三左右衛門は、お梅さんをお払い箱にした。

夢は広がるが三左右衛門には金がない。いろいろつてを頼っているがそうそう金は集まらず、隣村の貧相な村役場ていどのものしか作れそうにない。三左右衛門の夢は、現実の金の前には、みみずの寝言のようなものであった。

(最初は、ひと棟の研修所でええ)

村の、雛さびた風景を売りにして、都会の会社の研修旅行をこの村に誘致するのである。

(必ず、うまくいく)

三左右衛門には自信があった。都会では電化製品が飛ぶように売れ、企業はひとを雇うのに大わらわである。研修所は、いくつあっても足りないであろう。

(ゆくゆくは)

と、三左右衛門の頭の中には、一大歓楽地と化したこの村の風景が浮かんでいる。

(国政に打って出る)

代議士になるのである。とりとめもなく生きてきた三左右衛門であるが、胸の中には若かりしころの夢が生きていた。

(わしの夢は、この国を、平和で、豊かで、貧富の差がなく、老いも若きも生き生きと生きてゆける国にすることじゃ)

三左右衛門は、本気であった。

(夢を実現するには、金がいる)

そう思って、今まで金儲けに精を出してきた。

(しかし、あれじゃな、今までわしは、時代に恵まれなかったな。と言うより、時代を先に走りすぎた)

その結果、三左右衛門の今がある。今までは運がなかった、と思わざるをえない。運こそは、三左右衛門の最大の敵であった。

(しかし、今こそわしの時代じゃ。時代がやっとわしに追いついた)

今度は、運も味方についてくれるであろう。

三左右衛門は、都会で不遇に喘いでいたとき、街角の占い師が言ったことばを忘れたことがない。

——大器晩成型ですね

と、占い師は言った。さらに続けて、

——夢を追い続けて努力すれば成功します

と、当たり前のことをいった。明日は曇らなければ晴れでしょう、といっているようなものである。しかし、不遇の時代には藁をもつかみたいのがひとの常ではある。不遇の時代が長引くにつれ、三左右衛門の心の中には占い師のことばが深く根を下ろしていった。

三左右衛門は、さんざんに努力しつづけた。

ひとつも成功しなかったが、つらかったのは、成功しなかったことではなく三左右衛門の努力をだれも評価してくれなかったことであった。

そういうとき、三左右衛門は、

——運がない。わしは、時代に先走りすぎた

と嘆くのである。

この夜、三左右衛門は、家の中から鉢を抱えだした。

山芍薬が紅色に咲いている。

亡き母が好きだった花で、つい先日、山に入って採ってきた。

三左右衛門は、川縁の近くにしゃがみ込むと、山芍薬を河原の土に移し替えた。

移植し終わると三左右衛門は、スコップを放りだし、空を見上げた。雲の流れが速い。月も星も雲に隠れて見えない。明日は雨かもしれない。

三左右衛門は、山芍薬の花をにらみつけた。

(根づけ)

心の中で、そう、ひと声叫ぶとくるりと花に背を向けた。

まもなく、三左右衛門の家から明かりが消えた。

夜半から降り始めた雨は一気に激しさを増し、しばらく降り続いたあと、夜明け前には小雨になり、子供たちが涙橋を渡って登校するころにはすっかり上がっていた。

雨水をため込み土砂を巻き込んだ川は、土色に濁り勢いよく流れ下っている。

水かさも増していた。葦が水に浸かって背丈が低くなっていた。いつもなら、せいぜい葦の足下あたりに溜まっている水が、葦を通り越して川面より少し高くなっているはずの河原にまで出っ張っていた。

子供たちは、心配そうに一平がいる小屋を見ながら涙橋を渡ったが、二段敷きの河原の二段目にある小屋には水は届いていない。増水した川は、河原に少し乗り上げただけで生い茂る葦に勢いを弱められて流れていく。

もう、雨は上がっている。まだ薄い雨雲が覆っているが、ところどころに晴れ間ものぞいている。これ以上、水かさが増すことはないだろう。

子供たちは、朝から浮き立っていた。明日は、河童さんのお祭りである。神社の境内は提灯で飾られ、たくさんの夜店も出る。村の外からやって来る人たちも結構いる。大人たちは、朝から祭りの準備で忙しく立ち働いている。村全体が華やかな雰囲気にもまれていた。

三時間目の音楽の時間には、入学を控えた恵が母親といっしょに授業に加わった。恵は、靖之が弾くオルガンに合わせて赤とんぼやもみじをいっしょに歌った。

「朧月夜も知ってるよ」

と、恵が目を輝かせていった。

「そうか、えらいな、恵ちゃんは。じゃあ、それ、歌おうか。ほかに何か知っているかな」

と、靖之が聞くと

「いっぱい、知ってる」

と恵は、両手を広げながらいった。

「春よ来いと、春が来たと、春の小川」

春の歌ばかりである。音楽の時間は、春の歌の進行になった。最後は、鉄腕アトムを合唱した。これだけは靖之のリクエストである。

四時間目の体育の時間は、運動場が雨で濡れていて使えないため講堂でドッジボールをした。講堂の中は、子供たちと靖之、それに恵のお母さんの楽しそうな声であふれていたが、恵だけは額から汗を滴らせながら真剣そのものだった。真剣であればあるほど恵は楽しい。四時限目終了のチャイムが鳴ったときは、もう終わっちゃたの、というような顔をしていた。

体育が終わると、恵とお母さんは、学校を出た。子供たちには教室の掃除がある。恵は掃除も手伝いたがったが、お母さんに連れられて学校をあとにした。

校舎を出ると、傘を広げた。

ぽつりぽつりと雨が落ちていた。

涙橋に足をかけながら、

「恵、一年生になったら、お兄ちゃんやお姉さんの言うことを聞かないとだめよ」

といったが返事が返ってこない。振りむくと、ついさっきまで横を歩いていたはずの恵の姿が消えていた。あわてて視線を上げた。

恵がいた。

転がりさんの家の向こうで、こちらに背を向けて河原に立っていた。

恵の足下近くまで水が来ている。

「恵」

と、叫んだ。

「何をしているの」

そう叫ぶと、傘を投げ捨てて恵に向かって走りだした。

「お母さん」

と恵は、笑っている。

「きれいな花が咲いてるよ。ほら」

という恵は、花の後ろに回り込んだ。山芍薬の紅い花が咲いていた。

その時、恵の足下が崩れた。普段から水を含んでいた川沿いの土は、さらに水を吸って柔らかくなり、恵の身体を支えきれずに川の中に滑り落ちてしまったのだ。

恵の身体が足を後ろに引っ張られて倒れた。もう膝まで水に浸かっている。

恵は、起きあがろうとした。起きあがろうとしてまた滑り、力を入れた足下の土がいつそう崩れ、さらに恵の身体を川の流れの中に引きずり込み、腰まで水に浸かった。川は、葦に遮られて勢いを弱めている。しかし、まだ軽い恵の身体は、川に流されそうになっていた。

恵の小さな両手が一本の葦を力いっぱいつかんだ。

その、恵の手首を両手で握りしめた。

「恵、がんばって」

と叫ぶと、恵の身体を引きずり上げた。流れに押されていた恵の身体が少しだけ川から引きづり出された。中腰で前後に脚を開き、さらに力を込め恵を水から引っ張り上げようとのけぞった瞬間、足下が滑り、尻もちをつき、思わず恵の手を離した。

恵の身体が川に流されはじめた。

その、恵の手をまた、河原に腹這いになってつかんだ。恵の右手の四本の指だけをつかんでいた。へたに動けば、水に濡れた二つの手は、滑って離れてしまいそうだった。

「しっかり、お母さんの手を握って」

といったが、恵は気が動転しているのか、あるいは疲れ切ってしまったのか、手を握り返してこない。

「だれかー、助けてー」

と、叫んだが、聞こえてくるのは激しく流れる川の音だけだった。このままでは、恵が流されるのを待つだけであろう。

(飛び込んで助けるしかない)

そう、決心すると、

「恵」

と、叱るように叫んだ。

「葦をしっかりつかんでいて」

恵は、力無く口を開けてお母さんを見ている。

「これからお母さんが」

飛び込んで助けるから、と言おうとしたときだった。

「がんばって！」

という声が、遠くから聞こえてきた。

河童を見た！

靖之の声だった。靖之は、掃除の終わった子供たちを車に乗せて学校を出た。涙橋を渡っていたとき、車の窓越しに子供たちが、川に飲み込まれようとしている恵と、助けようとしている母親を見つけた。

「先生」

と、恵の母は、叫びながらも振り向かない。振り向いた反動で恵の指が滑り落ちてしまいそうだった。

「お母さん、手を離さないで」

靖之は、そう言いながら川に入ると恵を背中から抱え上げた。

「やったー」

という、子供たちの歓声が橋の上で上がった。その中に、友一の姿だけがなかった。友一は、靖之から、お梅さんに知らせるようにと言われて、お梅さんの店に走っていた。

靖之は、恵を抱えながら足下を探っていた。立っているだけで足下の土が水流に掬われて崩れていきそうだった。慎重に片方の足を前に出すと、残した足が後ろに滑りそうになった。

そこへ、恵のお母さんが駆け寄ってきた。水の中に足を踏み入れ二歩目を踏んだとき、体重をかけていた後ろ足が滑った。バランスを取るよう前後に揺れた身体が、バランスを失い、恵を抱えた靖之にぶつかった。

靖之は、恵を抱えたまま川の中に放りだされた。恵を片手で抱え、片方の手で葦をつかもうとしたが、葦はすりと靖之の手の中をすり抜けた。両手で恵を抱え直したときには川の流りに飲み込まれていた。

「流された」

と、橋の上から友一が叫んだ。

靖之は、恵を後ろ向きに抱きながら両脚で水を掻き、水面に出ているのが精一杯だった。

(身体の向きを変えないと)

靖之と恵は、川の流りを身体の正面に受けていた。波しぶきが雨のように二人の顔に降り注いだ。このままでは二人とも水を飲んでしまう。だが、恵の顔を川から出したまま身体の向きを変えるのは、思いのほか難しい。恵を右手で抱え、左手を伸ばして舵を切ろうとするのだが身体のバランスが崩れそうになる。二人とも、水没しそうであった。

「恵ちゃん、うんと息を吸いこんだら、そのまま止めて」

恵の肩が大きく上がり、息を止めた。

靖之は、両手でしっかりと背中越しに恵を抱きしめると、すべての力を込めて身体をひねった。一瞬、二人の頭が波の中に隠れそうになり、すぐに浮き上がった。浮き上がったときには川の流りを背に受けていた。

——岸へ

靖之は、水を蹴りながらそう思ったが、せいぜい川に浮いていることぐらいしかできない。

橋の上では、お梅さんが、

「駐在さんと呼んだぞ。村のみんなも呼んだぞ。がんばれ」

と叫んでいた。が、靖之の耳には聞こえてこない。

(このまま、流されようか)

と、靖之は思った。むやみに脚を動かして岸へ向かうより、沈まない程度に身体を使っている方が、体力の消耗は少ないに違いない。

靖之と恵はすでに、河原の中央をすぎ、もうすぐ河原の端にかかろうかというところまで流されていた。もうしばらく流されると、川は蛇行しながら向きを東に変える。川幅も広くなり、いつもの川であれば緩やかな流れになる。

もっとも、さすがに今日の川は緩やかにはなってくれないだろう。それよりも問題なのは、沈まない程度に脚を動かすことであった。上から川を見ている限りでは、単にいつもより早く流れているとしか見えないが、川の中では波が背をもたげて次から次へと襲ってくる。ともすれば、水を飲みそうになった。

靖之の脚が疲れてきていた。

(だめだ。このままでは溺れる)

と、思ったときだった。

身体が、すっと水面に浮いた。

何かが靖之の腰を支えている。

その腰をグンと持ち上げられた。

靖之の上半身が恵を抱いたまま水面から現れ、そして、後ろ向きに倒れた。

靖之は、恵を両手で胸に抱き仰向けに浮いていた。

靖之の腰と背中を何かが支えている。波も顔にかかってこなかった。

(なんだ)

靖之は、溺れそうになっていることも忘れて持ち上げた首をひねった。

影が見えた。

(何かがいる)

何がいるのか分からないが靖之と恵を助けようとしていた。

靖之の身体が、少しずつ岸に向かって動きはじめた。

(助かった)

ふうーと息を吐いた。

突然、靖之の腰がぐいと引っ張られ、身体が、川のうえに横向きになり、流れの勢いを身体の左側で受けはじめた。

(今度はなんだ)

と顔を左に振ると、一本の丸太が切り口を靖之に向け、牙をむくように迫ってきていた。

(ぶつかる)

と思ったとき、靖之と丸太のあいだに何かが現れた。

丸太は、その、何かに、どんと音をたててぶつかると横向きになり、靖之の頭越しに流れていった。

何者かの支えを失った靖之は、水中に沈んでいた。右手で恵を抱き、左手で水を掻き水面に出ようともがいた。その、左腕をつかまれ振り向いた。

息をのんだ。

(河童だ)

脚を動かすことも忘れた。水中で口を開けてしまったのか水を飲んだ。そのとたん苦しくなり、また脚を動かそうとした。が、動かすまでもなかった。

靖之は、背中まで水面に浮いていた。

水面に仰向けになったまま靖之は、河原に運ばれた。

葦のうえに靖之の身体が乗ると、川の中から二本の手が現れ、靖之と恵をさらに陸に押し上げた。

河童は、水面から身体を出さないようにしているらしいがこの浅瀬では姿は隠せない。水中の河童が、はっきりと分かった。おまけに、水面から背中の中羅が出ていた。

(河童だ。間違いない)

靖之は、立ち上がることも忘れていた。葦のうえに身体を横たえ自分を安全なところへと押し続けている河童を見ていた。

ひとのざわめきが堤のうえを近づいてきた。

「あっ」

と、ようやく靖之は我に返った。

恵を抱きかかえながら、立ち上がり、

「ありがとう」

と声をかけると、河童の手が水中に消え、岸から遠のき、川の中の影が遠ざかっていく。泳いでいるようにも川に流されているようにも見えた。

恵は、お母さんに抱かれて大泣きしていた。

「よかったのお」

とお梅さんが、恵の顔をのぞきこんだ。

「これだけ大泣きすれば、まずは大丈夫じゃ」

やっと駆けつけた駐在さんが、

「もうすぐ救急車が来るから」

というと、靖之のほうを振り向き、

「先生、あんたは大丈夫か」

と、靖之に聞いた。

「ぼくは大丈夫です。恵ちゃんを」

駐在さんはうなずくと、恵を抱いたお母さんといっしょに土手を上っていった。

靖之はまだ、川を見つめている。

河童の影はもう、見えなかった。

「靖之さん」

と呼ぶ声がした。振り向くと、智絵が土手を駆け下りていた。智絵の後ろからも、ひとが走ってきている。

「智絵ちゃん」

「大丈夫？」

と智絵が、息を切らせて言った。

「ぼくも、恵ちゃんも大丈夫。それより、智絵ちゃん」

靖之は智絵を、ひとの群れから離れたところに連れていった。

お梅さんは、思いつめたように川を見ている。

その横に、いっきさんが立った。

「えらいことじゃったのお」

「無事でよかった」

というと、お梅さんはようやく肩の力を抜いた。

「それにしても」

といっきさんは、川面をうねらせて流れる川を見ながら言った。

「よう、助かったのお」

「川の主のおかげじゃ」

とお梅さんが、川を見ながらつぶやいた。

「ほお」

といっきさんは、さほど驚いたようすもない。

「河童が出たか」

といっきさんがいうと、お梅さんがうなずいた。

「そうか。元気にしておったか」

いっきさんは、なにやら嬉しそうでもある。

子供たちは、橋のうえから一部始終を見守っていた。

丸太が橋のしたを流れ下っていったときは、四人声をそろえ、あらん限りの声で先生に叫んだ。丸太が先生にぶつかろうかというとき、川の中から現れたものが先生と恵を守った。

「一平だ」

と友一は、思わず叫んだ。

そのあと、先生は何もしないのに恵を抱いたまま川に寝そべり、そのまま岸に着いてしまった。何かが水中で先生を運ばなければ、ああはならないであろう。

——間違いない。一平だ

四人とも、確信していた。

「行こう」

という友一の声で、子供たちは靖之のもとへと走りだした。

一本松を過ぎたところで、雨合羽を着た転がりさんとすれ違った。不機嫌そうな顔をしていた。転がりさんは、車を堤のうえに止めていた。靖之の車が橋の真ん中に止まっているために橋を渡れなかった。

「先生」

と子供たちは、堤のうえから声をかけると、土手を転がり落ちるように駆け下った。

「大丈夫だった？」

「ああ、大丈夫だ」

先生が大丈夫なことは、ここに来るまでの先生のようにすでもう分かっている。友一は、先生への義理を果たすと川辺に立った。友一の横に子供たちが一列に並んだ。

「いないな」

と、友一が声を潜めていった。

「小屋かな」

と、寛太がささやく。

「違うよ」

という和美の声は、大きかった。

しっ、と良子が人差し指を口に当てた。

「小さな声で」

「あのね」

と今度は、聞き取れないような小さな声で和美が言う。

「一平ちゃん、流されたよ。一平ちゃんの影が、あっちへ」

と和美は、川が東に向きを変えるあたりを指さした。

「動いていった」

「行こう」

という、友一は土手に向かって走りだした。

土手を駆け上る子供たちの背を、智絵の声が追いかけてきた。

「あなたたち、ちょっと、ねえ」

言い終えたときには、子供たちの姿は消えていた。

子供たちは、川が曲がり始めるところまで来ると一平の搜索を始めた。

リーダーはもちろん、友一である。

「和美ちゃんは、土手のうえで見張り」

と、友一は言う。恵が溺れかけたばかりである。和美を川に近づけるわけにはいかない。

「良子ちゃんは、土手の真ん中から探して」

と、土手の中腹を指さした。

「寛太は、したに降りて探せ」

そういいながら、葦の生えているあたりを指さすと、さらに付け加えた。

「葦の中には、絶対に入るな」

葦の中に分け入って探すのは、友一の役目である。

川が東に流れを変えてから五百メートルほど下流に橋が架かっている。村から出る幹線道路なので、涙橋より遙かに大きい。

その橋に向かって、堤のうえから川縁にかけて分かれた四人の姿が少しずつ移動していった。

「向こう岸かな」

と、寛太がいった。もう、橋が近づいていた。

「あそこ！いる！」

と、良子の声がした。橋の根本を指さしている。

友一が真っ先に駆け寄った。

葦をかき分けると、一平が仰向けになって空を見上げていた。

「一平、大丈夫か」

友一がしゃがみ込みながら叫んだ。

「一平、けがしてないか」

「一平君、しっかりして」

「一平ちゃん」

と最後にいった和美は、年長者三人が言いたいことをぜんぶ言ってしまったために、名前を呼ぶ以外いうことがない。

一平は、葦の中で起きあがると、

「へへっ」

と、頭を掻きながら笑った。

「一平」

と叫びながら、友一が抱きついてきた。友一は、泣いていた。「よくやった」とか「すごいな」とか言いながら、一平の肩のうえで涙を流している。良子も、寛太も、和美も鼻を噉りあげていた。

一平は、何となくきまりが悪い。が、嬉しくもある。なぜか、一平まで涙がこぼれそうになった。あわてて、

「あれくらい、たいしたことない」

と笑った。

「でもさあ、あんな川をよく泳げたな」

一平の肩から顔を上げた友一が、まだ一平の腕をつかみながら言った。

「あれくらいだったら」

といったが、河童の里で暮らしているときは、あれほどの勢いのある川に潜ったことはなかった。ときに遠出をして急流を見ることはあったが、ばあちゃんやお母さんが川にはいることを許さなかった。

一平が初めて勢いよく流れる川に入ったのは、この村への旅の途中である。それも一度や二度ではなく何度も川に入った。何度も繰り返しているうちに、自分が泳げる川と危険な川が見分けられるようになった。あれくらいだったら、というのは、そういうことであった。

「丸太が当たったけど、大丈夫か？」

と寛太が、心配そうに言った。

うん、と一平はうなずくと

「甲羅は、こういうときのためにある」

と、胸を張った。が、実をいうと、やや痛かった。一平の甲羅は、まだ発達途上なのである。

「丸太は、小さかったし」

と、一平は両手の親指と人差し指で円を作った。

「そうかなあ。大きかったけどなあ」

寛太はそう言いながら、胸の大きさほどもある円を両手で作って首をかしげた。

「一平君、疲れていない？」

と良子は、いかにも女の子らしく一平の疲れを思いやった。他人の演じる活劇に陶醉してしまう男の子では、こうはいかない。

「ちょっとね」

と一平は、正直なところをいった。

「運んでやろうか」

と、友一は勢い込んだ。良子が、ぽかんと口を開けて友一を振り返る。あきれていた。河原で気絶していた一平を、三人がかりでやっと小屋に運びこんだことなど、すっかり忘れてしまっているらしい。

「大丈夫。泳いでいけるから」

と一平は、手を振った。

「とりあえず、みんな、一度、家に帰ったほうがいいな」

と、寛太がいった。さっきの騒動で、家の者は心配しているに違いない。ここで長話していると見つかる心配があった。

「そうだな」

と、友一はうなずいた。

「見つかるなよ」

「うん」

「あとで、飯を持ってきてやるから」

うっ、と一平はことばにつまった。

——魚を捕って食べるからいいよ

といたかったが、昨日食べたものは、どれもこれもおいしかった。あれがまた、目の前に並ぶかと思うと、よだれが出そうである。

「ありがとう」

とって、待ってるから、ということばを、かろうじて飲み込んだ。

一平は、川を横切り、向こう岸に着くと、葦の根っこをつかみながら川を遡った。途中何度か、葦のあいだに身体を休ませた。小屋まで一気に行けなかったわけではない。しかし、それは、無用の労力であろう。

——急ぐ必要がないときは、急がない

急ぐ必要もないのに急いで、その結果死にかけた一平は、そう思っていた。

人気がないのを確認して小屋に駆け込んだ。

小屋の中には、魚の干物が散らばっていた。

きのう、一平は寝入ってしまって、智絵と四人の子供たちが帰ったことを知らなかった。

夜中、雨の音で目が覚めた。引き戸を開けて顔を出すと川が増水していた。しばらく、空模様と川のようなすを見ていたが小屋まで水はこないと判断して引き戸を閉めた。河童の勘であったが、自然の中で生きる動物の勘である。まず、外れることはない。

その後、食べ残しのものを食べて、また眠った。きゅうりだけは一本しか食べなかった。

翌朝目が覚めたときは、もう昼近くだった。

腹が減っていた。食料は、魚の干物ときゅうりだけしか残っていなかった。一平は、魚の干物を口に入れた。どちらかといえばおいしかったが、干物を食べれば食べるほどきゅうりが食べたくなかった。ついに我慢しきれなくなってきゅうりに手を伸ばした。一本食べると止まらなくなり、とうとうぜんぶ食べてしまった。

そういうわけで、今、一平の目の前には魚の干物しかない。

(友ちゃんたちが何か持ってきてくれるまで待とうか)

とも思ったが、まだ日が高く夕方にもなっていない。結局、魚の干物を食べることにした。一平は、ごろりと横になり、肘枕を付きながら干物を噛んだ。

(少し疲れたな)

自分ひとりならともかく、二人の人間を水中で持ち上げ、小さかったとはいえ丸太を甲羅に受けた。疲れないほうがどうかしていた。

(でも、友ちゃんも、寛ちゃんも、良子ちゃんも、和美ちゃんも喜んでくれたし)

それに、と一平は思った。

(ばあちゃんも、お母さんも誉めてくれるだろう)

ばあちゃんも、お母さんも、よく、

——困っているひとを見たときには、勇気を出して、自分のできることをやりなさい

と、言っていた。河童は、素朴な礼儀と倫理にははなはだやかましいのである。

一平は、今日はその通りのことをした、と思っていた。もはや、いっばしの冒険家になったつもりの一平だったが、やはり、ばあちゃんやお母さんから誉められるのが一番嬉しい。もっとも、そのあと、ときどき、ばあちゃんやお母さんはそっと付け加えた。

——じいちゃんも、お父さんも、そういうひとでしたよ

じいちゃんも、お父さんも知らない一平には、実感が湧かない。でも、もしかしたら、じいち

ちゃんもお父さんも、困っているひとのために自分でできることをやろうとしただけなのかもしれない。

(でも、死んじゃった)

と一平は、あっけらかんとしている。

(死んだら、なんにもならないや)

もし、靖之と恵を助けるために、自分が死んでしまったらどうなのか、とまで考える歳ではなかった。一平は、助けられると思ったから二人を助けたと思っている。

——助けられないと思ったら二人を見捨てたのか

という問いはまだ、一平にとっては荷が重すぎるであろう。

それより、気がかりなことがあった。

二人を助けあげ陸から離れるとき、視界の隅のほうに一本の松の木が映った。

(あれが、もしかして)

権平じいちゃんが太郎に斬られた松なのだろうか。だとすれば、ぜひ松の木のところに行ってみたい。

(まあ、いいや)

と、一平の悩みはつづかない。

(あとで、友ちゃんや寛ちゃんに聞いてみよう)

それにしても、と一平は思った。

(良子ちゃんは優しいな)

友一や寛太が聞いたら首をひねるに違いない。

(和美ちゃんはかわいい)

和美については、それしか言うことがないが、友一も寛太も納得するに違いなかった。

(問題は、どうやってじいちゃんの手を取り戻すかだ)

しかし、こればかりは一平の力では無理であった。第一、じいちゃんの手があるという神社には行ったことさえない。

(ま、いいや)

あくまでも一平は、楽観主義者である。

(五人で話し合えば、何とかなるだろう)

だけど、と一平は、食い切った魚の干し物を裏に表に返している。

(変な食べ物だな)

と、思った。

(食っても食っても、腹一杯にならない)

そのくせ、咀嚼回数だけはやたら多かった。おまけに、やたらのがどが渴く。

一平は、寝っ転がったまま、一升瓶の水をぐい飲みした。

豪快なものであった。

一平は、いつの間にか寝入っていたらしい。

息苦しくて、目が覚めた。

声を出そうとして驚いた。

声が出なかった。口の中に、何か詰め込まれていた。一平は、舌を突きだして口の中のものを押し出そうとした。が、口の中から出ていかない。その時初めて、自分が猿ぐつわをされていることに気づいた。

「うー」

と声を上げると、目の前が真っ暗になった。頭から、何かをかぶせられたらしい。

一平は、ようやく逃げだそうとした。逃げようと身体を動かしてみても、自分がぐるぐる巻きに縛られていることに気づいた。

身体を持ち上げられ、肩に担がれた。

「おめえ、ちびのくせに重いな」

転がりさんの声だった。

この日、転がりさんは、朝早くから鹿児島市に出かけた。例の、歓楽ホテルの建設について建設会社の社長に会うためである。

社長は四十年配で、たばこを吸いながら部屋に入ってきた。いすにどかりと座るなり、転がりさんに向けてたばこの煙を吐きだした。

転がりさんもたばこに火を付けた。煙を肺いっぱい吸い込むと、大口を開け、天井めがけてたばこの煙を吐いた。

(品のない男だ)

と、転がりさんは思ったがお互いさまであろう。

ホテル建設の話を持ち出すと、社長は、転がりさんの話を途中で遮り、「金は用意できたか」

といった。転がりさんは、むっとした。

(金があるなら、おまえのところになんか来るか)

と思ったが、社長は、少なくとも転がりさんより金持ちではある。転がりさんは、「そこを何とか、社長さんのお力で」

と、頭を下げた。社長は鼻で笑った。

転がりさんは、さんざんにあしらわれた。

あげくに、社長は、

「薩摩隼人は、ひとの力は当てにせん」

といったのけた。

さすがに転がりさんも、頭に血が上った。転がりさんは、社長を当てにしているのではなく協力を要請しているのである。

(ひと一人の力など大したことはない)

と、転がりさんは思っている。知恵を出し合い、金を出し合い、たくさんの者が協力し合って初めて、事業は遂行できる。そう、転がりさんは思っていた。

(協力しあうために必要なのは、互いを信頼し、尊敬しあうことじゃ)

転がりさんは、我を忘れると尋常人に戻る。尋常人に戻った転がりさんは、紳士であった。

「わしも社長さんも、鹿児島生まれの鹿児島育ちじゃ。鹿児島のために、わしは微力を尽くします。社長さんの力も、ぜひお借りしたい。お互い、地元の発展のためにがんばりましょう」

社長には、笑止千万である。地を這うごみ虫が、大空を飛翔している鷹に向かって、おれとおまえは友達だ、と言っているようなものである。社長は、たかってくるはえを追い払うように大いに笑った。

転がりさんは、むなしく帰途についた。

腹の中は、まだ煮えくりかえっている。

社長の笑う顔が目には浮かんだ。

(若造めが)

転がりさんは、途中何度も車のウィンドウを開け、つばを吐き捨てた。汚いこと、このうえないが転がりさんの唾が落ちる先は公道である。だれからも文句を言われる筋合いはない――と転がりさんは思っている。

村にはいると、涙橋のうえに車が止まっていた。

転がりさんは舌打ちをすると一本松の手前から堤のうえにハンドルを切り、車を止めた。外に出てみるとひとが集まって大騒ぎをしていた。

しばらく見ていて事情が分かってきた。

どうやら、恵が溺れかけてそれを靖之が助けたらしい。

(母親は、何をしておるんじゃ)

と、転がりさんは思った。

(わしの母は)

と、昨日植えた山芍薬に目をやった。未明の雨にも負けず紅い花を咲かせている。

(いつも優しい人じゃった)

子供を溺れさすなど、子供への優しさが足りない証拠であろう。転がりさんは、ますます不機嫌になった。この騒動では、車はしばらく動かさないに違いない。仕方なく、車を置き捨てて家に向かった。その横を、子供たちが駆け抜けていった。

転がりさんは、川に面した畳部屋の引き戸を開け、部屋の中に転がり込んだ。転がりさんの掘っ立て小屋は、四畳半一間と四畳半大の土間しかない。土間には引き戸があって、いちおうそこが玄関だが、なにせ河原に建った掘っ立て小屋であり塀も垣根もない。部屋から出入りするほうが土間を通らない分、便利であった。

(酒でも飲むか)

と思ったが、面倒くさい。ごろごろしているうちに、寝入ってしまった。

目覚めると、暗くなりかけていた。

(酒でも飲むか)

と、一眠りした転がりさんは起きあがった。

部屋の隅の一升瓶を手にとって、ちっ、と舌打ちした。酒が入っていなかった。土間の隅の、台所のようなところから一升瓶を取り出し、また、ちっ、と舌打ちをした。四分の一くらいしか酒が残っていなかった。

一升瓶を手に持ち、部屋に戻ろうとして、いつも開けっ放しの折り戸から何気なく外を見た。

転がりさんの掘っ立て小屋と向かい合っ立っている小屋の引き戸が、半分くらい開いていた

。

(子供たちか)

と思ったが、こんな夕暮れ時に子供たちがあの小屋に集まっているはずがない。

(閉め忘れたんじゃな)

そう思った転がりさんは、ひとり酒を飲み始めた。猪口に二、三杯飲んだが、薄暗く口を開け

た向かいの小屋のことが気にかかる。

転がりさんは立ち上がると部屋から外に出た。出ると、河原である。しばらく腕組みをして向かいの小屋を眺めると、小屋に向かって歩き出した。

(困った連中じゃ)

とは、子供たちのことである。

(親のしつけがなっとらん)

この小屋は、村共有の小屋なのである。使うのは自由だが、使ったあとは、戸ぐらい閉めるべきであろう。

転がりさんは、小屋まで来ると中をのぞき込んだ。

子供が寝ていた。

こら、と怒鳴りつけようとした口が啞然と開いている。

(なんだ、これは)

人間ではなかった。

転がりさんは、寝転がっている子供の姿形を目に焼きつけると、息を潜めて家に戻った。

(あれは、河童じゃ)

転がりさんは、酒を飲むことも忘れて考えこんでいる。

(河童に間違いない)

小屋の中の子供は、背中に甲羅を背負っていた。背に甲羅があるなど、河童以外にいるはずがない。

(それに、子供じゃ)

突然、転がりさんの胸に歓喜の波が押し寄せてきた。

(あれを捕まえれば、ひと儲けになる)

ひと儲けどころではないであろう。新聞も、テレビも取材にやってくるに違いない。そのうえ、子供河童なのだ。

(売りになる)

あっという間に、ホテル開業の資金も集まるに違いない。

よし、と転がりさんは立ち上がった。

捕まえるなら、今である。

あの子河童は、正体不明に寝込んでいる。

(寝込みを襲うのは)

と転がりさんは、あわただしく捕り物道具を用意しながら思った。

(兵法の常じゃ)

死ぬか生きるかの世界では、ひとを信頼して一瞬でも油断するものがばかを見る。

河童の捕獲は、簡単だった。

目を覚まさないよう、そろりそろりと足首をそろえ縄でぐるぐる巻きにした。次には、両手を後ろにそろえ、またぐるぐる巻きにした。まだ、河童は目を覚まさない。口の中に布を押し込むと、「うう」と呻いた。転がりさんは急いで猿ぐつわを噛ませ、頭の後ろで引き絞り結わえた

。

ようやく、河童が暴れ出した。転がりさんは、河童の頭に大きな風呂敷をかぶせると首のまわりでぐるぐると巻いた。もがく河童を肩に乗せて小屋を出た。

「おっと」

と転がりさんは、転がりそうになって思わず声をあげた。

「雨上がりで滑るのお」

転がりさんの声は、楽しそうである。家の前まで来ると、

「河童」

と、威勢良く言い放った。。

「川じゃ。よく見ておけ。もう、二度と見れんぞ」

そういうと、肩に担いだ河童の尻をぴちゃぴちゃと叩きながら、

「風呂敷をかぶっているは、見れんか」

と、高笑った。

友一が家を出たのは六時を過ぎていた。外はすっかり暗い。雨は降っていなかったが、雲が空一面を覆い、月も星も隠していた。

家を出る前に、台所や納屋から見つからない程度に食べ物を失敬し、風呂敷の中につめた。

「寛太の家に行ってくる」

と言うと、家の奥の方から、

「遅くならないようにね」

というお母さんの声が返ってきた。いつもなら、こんな時間から、といわれるところだが、今日は祭りの前日である。遅い外出も許されている。

祭りの夜の前夜で、大人も華やいでいた。友一のお父さんは朝から神社に行ったきりだし、お母さんも神社と家を何度も往復し、ごちそう作りで忙しい。作ったごちそうを社務所に持ち寄ってみんなで食べるのである。ただ、みんなで食べるだけであるが、大人も子供も心から楽しむひとときなのである。

友一は、家の前でこぼこ道から神社に向かう道に出た。五百メートルほど先に駐在所の赤い光が見える。走りだそうとして、やめた。駐在さんに見つかったら困る。

急ぎ足で、駐在所の前を通り過ぎた。

神社の三つ角まで来ると走りだした。神社の境内に明かりがついている。静まりかえっているが、社務所の中では大人たちが楽しんでるに違いない。

お梅さんの店の前がほのかに明るい。店の横の電柱に、笠をかぶった裸電球が黄色い光を放っていた。その光の中に人影が見えた。

「良子ちゃん」

と、友一は呼びかけた。右手に風呂敷包みをさげ、右手に懐中電灯を持っている。

振り向いた良子は、

「きっと、一平君、お腹空かしてるよ」

と、おかしように笑った。

「鮎を一匹持ってきたよ」

と、和美は嬉しそうに、蓋をした小さなバケツを差し出した。

「すごい。一平、喜ぶぞ」

というとき友一は、和美の手を取った。

「和美ちゃん、急ごう」

「うん」と和美は、いつものように、元気よく返事をする、友一の手を引きずって歩き出した。

お梅さんの家は真っ暗だった。神社に行っているのだろう。

橋のたもとまで来ると、転がりさんの家から電球の光が漏れていた。

「車は、あそこに置きっぱなしなんだ」

と友一が、堤に止めてある転がりさんの車を見ながらいうと、

「♪ころがりさんは～不精もん～♪」

と、だれが教えたのか和美が歌った。ぷっと友一は吹き出したが、良子は、そしらぬ顔であごを突き上げている。妹の躰に厳しいお姉さんであるが、そういうところもあるらしい。

三人は、転がりさんに気取られないように足を忍ばせて歩くと、一平がいる小屋の引き戸を静かに開けた。

中は、真っ暗だった。

良子が、懐中電灯で小屋の中を照らした。

「寛太、もう来てたのか」

と友一が、引き戸をまた静かに閉めながら言った。小声である。目と鼻の先の小屋には転がりさんがいる。転がりさんでなくても智絵以外の大人は警戒するに越したことはない。

「一平ちゃんは」

と、和美も小声である。秘密会のルールをようやく覚えたらしい。

寛太が、泣きそうな顔で友一を見上げている。

「いないんだ」

「いないって？」

友一は、きょとんとしている。

「一平は、たぶん」

という寛太は立ち上がり、友一と良子の顔を見ながら唇を震わせた。

「転がりさんに連れ去られた」

四人の子供たちは、その場に立ちつくした。寛太は肩を落とし、ほかの三人はぼかんと口を開けている。ごくり、と友一がのどを鳴らした。

「ほんとに？」

と良子は、首をひねった。

「足跡がある」

そう寛太がいうと、友一が引き戸を開け放って小屋の外に飛び出した。

「友ちゃん」

と寛太が、友一の肘を引っ張りながらささやいた。

「転がりさんに気づかれる」

友一は、こくんとうなずくと後ろを振り返った。

「良子ちゃん、静かに閉めて」

そういうと、しゃがみ込み、地面を調べはじめた。良子が、懐中電灯を友一に渡した。

「これ」

と寛太が、大きな足跡を指さす。その足跡は、地面にめり込みながら点々と河原の二段目を歩いていた。友一は、足跡のまわりにしゃがみ込んでいる三人に、

「ここで、待ってて」

という、足跡をたどりはじめた。

足跡は、確かに転がりさんの家に向かっている。

その足跡は、転がりさんの家の、粗末な玄関の前で消えていた。

友一は、寛太を手招きした。

腰をかがめるようにやってきた寛太にいった。

「おれが下になるから開き戸から中をのぞけ」

開き戸から明かりが漏れている。転がりさんは、開き戸を開いておくためのつつかえ棒を外しただけなのに違いない。

寛太は、友一の背に乗ると腰をかがめ、戸の端に指をかけ持ち上げた。音もせずに開き戸が上に持ち上がった。

寛太は、あごを突きだして中をのぞき込んだ。寛太が右に左に顔を動かすたびに友一の背中に寛太の足がぐりぐりと食い込んでくる。友一は、両目をつむり歯を食いしばって耐えた。

やっと寛太が降りてきた。友一の顔を見るなり何か話そうとする寛太を制して小屋に戻り、引き戸を閉めた。

「いる」

と、寛太が小さく叫んだ。

「一平は、縛られて土間に倒れている。その向こうに転がりさんが酒を飲みながら座ってる」

作戦

懐中電灯の明かりが照らす小屋の中で、友一と良子、それに寛太の小さな声が行き交っていた。

——一平を助ける

という点では、みんな一致していた。問題は、どうやって助け出すかだった。

——大人に知らせたら

とは、だれも言わなかった。そんなことをすれば大騒ぎになって、一平はどこかに連れて行かれるだろうし、河童の里探しが大々的に始まるに違いなかった。

「智絵ちゃんには知らせてもいいんじゃない」

と、良子がいった。友一も寛太も、智絵を「ちゃん」付けで呼ぶなど、とてもできない。が、良子は平気で、智絵ちゃん、と呼ぶ。

「それは、いいよ」

と、友一も同意した。さすがに友一も、相手が転がりさんでは手に余るような気がする。

「でもさ」

と寛太は、首筋を直角に折って顔を伏せている。寛太が、その、天賦の企画力を総動員して考えるときの癖である。

「早くしないと、転がりさんは、一平をどこかに連れて行ってしまうかもしれない」

その通りであろう。転がりさんがホテル建設のために金策に走り回っていることは子供たちでも知っている。へたをすれば今夜にでも一平を動物園に売ってしまうかもしれない。

「友ちゃん」

と、良子がせき立てた。良子は、自分の手に負えないことが起こると、「友ちゃん」といって友一に対処させるのである。しかし、友ちゃんにも名案がない。そもそも、友一に名案が浮かんだ試しがなかった。

「これ」と、小屋の中のがらくたを見ていた寛太が言った。手には、網をつかんでいる。

「使えないかな？」

友一は、跳ね起きると網をひっぱりだした。かつて、転がりさんが良子のおじいさんに買ってきた網である。いつの間にか、良子の家から引っ越してこの小屋にやってきていた。

振り向いた友一の、唇の端が笑っていた。

「友ちゃん」

と、良子が気負いこんで言った。

「何か思いついた？」

「これで」

と友一は、網を放りだした。

「転がりさんをぐるぐる巻きにしちゃえ」

「どうやって」

と、良子は心配である。こちらは三人いるとはいえ相手は大人なのだ。

「それは、これから考える」

と友一は、妙に自信たっぷりである。

(転がりさんの頭に被せなきゃ、だめだ)

友一の頭は、実行段階になるとめまぐるしく回転していく。

(被せるだけじゃ、ぐるぐる巻きにはならないな)

頭から被せても、転がりさんがしゃがみこんで網を下から持ち上げれば簡単に抜け出せるに違いない。

(蚊帳みたいに)

と友一は、蚊帳の中でもがいたときのことを思い出した。寛太が泊まりに来たとき、蚊帳を吊ろうとしていたお母さんがわざと、寝ている二人のうえに蚊帳を落としたことがあった。その時は、蚊帳が身体に絡みついてなかなか出られず、寛太と二人で大騒ぎした。

(部屋で寝ている転がりさんに網をかぶせたら)

と思ったが、寛太は、転がりさんは起きて酒を飲んでいるといていた。それに、部屋の中では、網を頭から被せて終わりである。それに、網は蚊帳より硬い。ただ寝ている転がりさんに網を被せただけでは、あっさり抜け出してしまうかもしれない。

(立っている転がりさんの頭から網をかぶせて、そのあと、転がりさんを倒す。倒したあと、転がりさんを転がして、網を転がりさんの身体に巻きつける)

その通りにいけば、転がりさんは網の中から出られなくなるに違いない。

(頭から網を被った転がりさんを倒すには、どうしたらいい)

そう思ったときには、友一の計画は完成していた。

「土手だ、寛太。土手のうえに網を広げて、転がりさんを呼び出す。転がりさんが土手を上ってきたときに、うえから網をかぶせる」

それから、転がりさんの足を取ってひっくり返し、土手を転がしながら網でがんじがらめにするのである。

「なるほど」

寛太は感心したが肝心なことが抜けていた。

「だれが、転がりさんを呼び出すの？」

友一が、黙りこくった。いつものことだが、そこまで考えていなかった。

良子の声が、沈黙を破った。

「わたしがやる」

思わぬひと言であった。今まで良子が積極的に、自分がやる、といったことなど一度もない。一度か二度はあったかもしれないが、とりあえず、友一にも寛太にも記憶がなかった。

「わたしなら、転がりさんは家を出てくる」

良子には、自信があった。

昔、転がりさんは、良子のおじいさんから鮎や魚を買うため、よく良子の家にやっていた。ほどなくして転がりさんは、別の仕事を始めたためあまり家には来なくなった。おじいさんも昨年、死んだ。それでも、転がりさんとの付き合いはつづいていた。もともと、付き合いといっ

ても別に親しくしているというわけではない。たまに、酒や料理を転がりさんに持って行ってやるだけである。転がりさんに施しをしているわけではなく、これも村の付き合い方のひとつにすぎない。

ときには、良子が酒や料理を持っていくことがあった。良子に持たせてやるときには、お母さんが必ず言う。

——橋のうえから転がりさんと呼んで、転がりさんが出てきたら、ここに置いておきます、と言って帰ってきなさい

転がりさんからすれば文句のひとつも言いたくなる扱いはある。良子のお母さんも、転がりさんを色魔だとは思っていなかったが村の人間とは認めていなかった。村の外からやって来る人間は、何をするか分からない。

「だから、わたしが呼べば必ず転がりさんは家を出てくる」

と、良子はいった。

友一は、うつむいて考え込んでいる。

(女の子に、そんなことをさせていいのか)

できれば良子には安全なところに隠れていてもらいたかった。

「それが、いいよ。友ちゃん」

と寛太が、うつむいた友一に話しかけた。

友一も、決心した。それしかないであろう。あれこれ考えている時間はなかった。こうしている間にも、一平はどこかへ連れ去られてしまうかもしれない。

「そうする」

と、友一が顔を上げた。

「おれと寛太は、ここで準備する。良子ちゃんは和美ちゃんを家に送ってから、智絵姉ちゃんを呼んできて」

智絵の家は、良子の家から畑ひと畑をはさんだ隣であった。それに、和美をここに置いておくわけにはいかない。危険だし、一平を救出したあと、逃げるときに足手まといになるであろう。いつもなら、いっしょにいる、と駄々をこねる和美も今日は黙っている。さすがに恐いのだろう。

良子が、和美を連れて小屋を出ていくと友一は、小屋の中のがらくたを引っかき回して縄を取り出した。

「これ、どうすんの」

寛太は、土間に放りだされた二本の縄を手に取りながら聞いた。

「それで、転がりさんを縛る」

網でぐるぐる巻きにした転がりさんの身体を、さらに縄で縛りあげるのである。

「なるほど」

といいながら、友一のほうを振り返って寛太は絶句した。

友一が、鎌を持っていた。

「友ちゃん」

という寛太は、凍りついている。

「まさか、友ちゃん」

寛太の脳裏に恐ろしい光景が浮かんだ。網でぐるぐる巻きにされ縄で身動きできなくなった転がりさんに、馬乗りになった友一が鎌を振り上げ今にも転がりさんに振り下ろそうとしている。

「これで」

という友一の声も、緊張していた。

「一平の縄を切る」

寛太は、ほっと息を吐き出した。

(それならいいや)

友一は、首に縄をかけ、鎌を腰のベルトに通し、一升瓶と懐中電灯を網の中に突っ込むと、

「寛太、運ぶぞ」

と、網に手をかけた。

網は、重かった。重いうえに土がぬかるんでいて足下が悪い。懐中電灯も使えない。両手は、網でふさがっていた。一步、一步、足下を確かめながら、友一が先になり、寛太が後ろから網を抱え土手を上りきった。

二人は、土手の上から転がりさんの家を見下ろすと網を広げた。網は、幅広かった。土手の降り口の、端から端まで届いている。

(こんなに網を張ってたら、ばさっと被さらない)

と、友一は思った。網は、被せたときに転がりさんの身体に巻きつくように垂れる必要があった。網がぴんと張っていても網の下をかいくぐられるだけであろう。

寛太に声をかけて二人のあいだを狭めた。

「寛太、網を持って」

練習である。

土手の下り口から少し離れて、網の両端を持ってしゃがみ込んだ。網の左端、涙橋に近い方に友一が構えている。土手の傾斜は右も左も同じだが、涙橋のほうは河原の一段目に降りているために下りづらいのである。

「寛太、脚を開け」

と、友一が小声で注意した。寛太は、両足を揃え、かかとの上に尻を載せていた。

寛太は、何のことか分からないらしい。首をひねった。

友一は、自分の足を指さすと、

「脚を前後に開け」

といった。やっと寛太にも理解できらしく、足を動かした。

「違う。右脚が先だ」

寛太の左脚が前に出ている。友一は、蹴り足を前に出せ、とっているのである。

——右脚を前に出しておかないと、素早く動けない

それは、学校の体育の時間、先生と五人でソフトボールをしていたときに発見したことであった。一塁に出た友一は、いつものように盗塁をしようとした。投手は先生である。先生相手でも、盗塁に失敗したことはなかった。友一は、いい気になって一塁ベースから少し離れて突っ立っていた。先生がボールを投げた瞬間、走った。

あっ、と思った。

何かが違う。違っていた。

盗塁は成功した。捕手の寛太が投げたボールは、二塁を守っていた良子に届かなかった。ボールは、先生の横を通過してバウンドし、一、二塁間を転がっていった。

——なに、やってんのよ

といいながら、良子がボールを追いかけていった。

盗塁は成功したものの、友一は納得できない。授業が終わってからも、あの時のことを思い出しながら何度も盗塁のスタートを繰り返した。

ようやく分かったのは、次の体育の時間、五十メートル走の時間を計ったときだった。

スタートラインに立った友一は、右脚を前に踏み出していた。ほかの三人を見てみると、みんな右脚を前に出している。

盗塁のときは逆だった。あの時、友一は、左脚から踏み出したのだ。

——蹴るときは、右脚で蹴らないとうまく動けない

友一が寛太にいう、右脚が先だ、というのは、そういう意味であった。もっとも、寛太は、そういうことまでは分からない。友一から言われたとおりに、右脚を前に出した。

「寛太、大丈夫か」

友一は、心配である。いつもは落ち着いている寛太が妙に小さく見える。

(恐いんだろうな)

と、友一は思った。

(おれも恐い)

恐いうえに、緊張していた。身体ががたがたと震えそうになる。

しかし、ここで止めてしまえば、一平は救えない。

「寛太、一平を助けるためにがんばれ」

「うん」と、寛太が声を出した。一平を助け出さなければ、という思いは、友一と同じであった

。

(おれが、しっかりしないと)

友一は、げんこつで自分の腰の辺りをひとつ殴りつけた。

「寛太、おれが、いち、と言ったら右足のかかとを上げろ」

「に」で腰を上げ、「さん」で飛び出す。

友一は、寛太を指導しながら何度も繰り返した。災害の避難訓練と同じである。何度も繰り返して身体に覚え込ませれば、いざとなっても、かってに身体のほうが動く。

「少し、休もう」

と、友一がいった。のどが、からからになっていた。

「友ちゃん」

と、寛太が涙橋のほうを見ながら言った。

自転車のライトが近づいてきていた。

お梅さんの店の電球に照らされて自転車の人影が見える。

「良子ちゃんだ」

寛太の声には、生き返ったような元気があった。

良子は、涙橋の手前で自転車を降りると急ぎ足で橋を渡ってきた。良子は

「智絵ちゃんはいなかった」

というと、

「はい、これ」

と、ビール瓶を手渡した。中には、水が入っていた。良子は、ビール瓶を二本用意してきていた。もう一本を、網を乗り越えて寛太に手渡した。良子はやはり、優しいのかもしれない。

水を飲みながら友一は、気持ちが落ち込んでいくのを避けられない。

(智絵姉ちゃんが来ない。どうしよう)

からからになったのどを、水がいやしていく。

(こないものは、仕方がない)

水がのどの渴きを止め、友一の全身に浸み渡っていく。

(やるっきゃない)

萎えていた友一の気力が再び燃え上がろうとしていた。水のおかげかもしれない。

「寛太、良子ちゃん」

友一の語気は鋭い。

「やるぞ」

と、短く声を発した。

良子が一升瓶を抱えて土手の下り口に立っている。その後ろ、土手の降り口から三十センチくらい離れて網を手に持った友一と寛太が身体を伏せていた。

「いくよ」

と、良子が友一を振り返った。

「オーケー」

と、友一が答えた。

良子は、寛太を振り返ると、

「いくよ、寛太。友ちゃんのやるとおりにやって」

と、声をかけた。

「うん。やる」

寛太の声を聞き終わると良子は、暗がりには沈んでいる転がりさんの家を見おろした。板で葺いただけの、小さな、おんぼろ小屋だった。河原に面した転がりさんの部屋から電球の明かりが頼りなさそうに漏れていた。

良子は、息を吸い込んだ。

風が顔にあたり、黒髪が肩に舞った。

「転がりさーん」

良子の声が、河原に響いた。

「わたしです。良子で一す」

転がりさんの部屋の引き戸が開く音がした。

「おうい、良子ちゃんか。どうしたあ」

毒にも薬にもならない転がりさんの声が返ってきた。

「お酒、持ってきました。お母さんが、転がりさんに持って行きなさいって」

「おおっ」

と転がりさんが、宝くじの一等賞にでもあたったかのように叫んだ。

転がりさんが小屋から出た。

「ありがとさん」

と、何も知らない転がりさんはのんきである。

転がりさんが土手に向かって歩き出した。

「来た」

と良子は、振り返らずに小さく言った。

良子が、足ひとつ分あとずさりした。

これが、転がりさんが土手の下に来た、という合図だった。

「ここに、置いときます」

と良子は、転がりさんを見ながら笑っている。

友一からは良子の顔は見えない。が、声は聞こえている。良子の声が笑っていた。

(良子ちゃんは)

と、友一は驚いている。

(ど根性女だ)

俄然、友一の身体の中に勇気が湧いてきた。

(良子ちゃんに負けてたまるか)

良子は、まだ下がらない。転がりさんが土手を上りはじめたら、一升瓶を抱えたまま友一の背後に隠れることになっていた。

「いつも、すまん」

という、転がりさんの声がした。

(まだか)

友一が焦れたとき、良子が動いた。

すっと、良子の身体が後ろに退き、振り返ると、腰をかがめて友一の後ろに回り込んだ。友一の横を通り過ぎるときに、

「来た」

と、ささやいた。

友一が寛太を見た。寛太も、友一を見つめていた。友一は、寛太に向かって一度うなずくと、小さな声で、

「いち」

といった。寛太の上体が少し前に倒れた。前に出した右足のかか上がっている。

「よっこらしょ」

という、転がりさんの声がもうすぐそこに聞こえている。

「にい」

友一の声で寛太の腰が跳ね上がった。

いきなり、土手から、転がりさんの顔がぬっと現れた。

「さん」

友一は叫ぶと、思いっきり地面を蹴った。

身体が軽々と宙を飛んだ。宙を飛びながら友一は、転がりさんを見た。顔のしわまで見えた。転がりさんは、土手に顔を出したときと同じ顔をしていた。その顔に網が被さっていくのが見えた。

(成功した)

と思った瞬間、どさっと土手のうえに落ちた。

友一は、転がろうとする身体を両手で押し止めると、すばやく身を翻し、転がりさんの足下に走り寄った。

転がりさんは、まだ突っ立っている。何が起こったのか分からないでいるらしい。

友一は、転がりさんの右脚を両手でつかみながら叫んだ。

「寛太、手を離せ」

土手を駆け下りた寛太は、まだ網を手を持っている。網が寛太のほうに向かって張っていた。

友一は、転がりさんの右脚を抱え上げた。転がりさんは、土手の坂にぽけっとして突っ立っていた。友一に片足をもち上げられ、ひとたまりもなく、どうと横向きに倒れた。

転がりさんが、土手を転がりだした。

転がる転がりさんを友一が押した。

土手の終わりまで転がって、やっと転がりさんは転がるのを止めた。

転がりさんを縛る縄を取ろうと首に手をやった友一が、えっ、と驚いて胸元を見つめた。縄がなかった。土手に落としたのであろう。友一が土手を振り返ろうとしたとき、目の前に縄が現れた。良子が縄を差し出していた。友一が良子の手から縄をひったくるように受け取ったとき、
「こらあ、おまえらあ」

という、転がりさんの怒声がした。ようやく状況が飲み込めてきたらしい。

友一は、転がりさんの身体をまたぎ越えると縄を地面に延ばした。転がりさんをひと転がしすれば、馬乗りになって縄を結ぶだけでいい。

転がりさんは、

「いい加減にせんと、ほんとに怒るぞ」

と本当に怒りながら、網の中で、むやみに暴れている。やみくもに動けば動くほど身体に網が絡むだけであるが、転がりさんはまだ頭に血が上っているのだろう。

友一はまた転がりさんの身体をまたぐと、待ちかまえる縄に向かって転がりさんを転がしはじめた。が、今度はうまく転がってくれない。もう坂は終わっているうえに、転がりさんは両手、両脚で転がされないように身体を突っ張っている。友一の横に、良子と寛太が並んで転がりさんを押しはじめた。ぐらっと転がりさんの身体が動いた。

突然、

「痛あー」

と、寛太が叫び声を上げた。転がりさんが寛太の腕を網越しにつかんでいた。

友一は、とっさに手を伸ばし、土をつかむと、転がりさんの顔めがけて投げつけた。

「うわっ」と、転がりさんは叫ぶと、しかめっ面に目をつむり、顔を左右に振った。友一の投げた土が目に入ったらしい。

また、三人で転がりさんを押した。

転がりさんは、何の抵抗もせずに転がり、縄のうえに網まみれの身体を横たえた。

(なんだ)

と、思ったのは友一である。

(最初から目くらましすればよかった)

が、今は、自分のけんか上手に感心しているときではない。転がりさんの身体に馬乗りになって縄を結びながら寛太に向かって言った。

「一平を助ける」

寛太と良子が小屋の中に駆け込んでいった。

——鎌を持っていけ

と、友一はいおうとしたが、その時には、良子が土手の上に置いていた鎌を持って走っていた

。

二人が小屋に駆け込む音を聞きながら友一は、転がりさんの胸と膝を縄で結んだ。

結びながら、

(だめだ)

と思った。転がりさんが叫びながら身体を動かすためにきつく結べない。おまけに網越しであった。いくら縄を絞めてもたるみが出る。友一は、転がりさんの身体から離れると網と縄でぐるぐる巻きにされた転がりさんを見つめた。

膝から下が、網から出ていた。網の目も、大きかった。転がりさんの腕は通らないにしても、指は十分に使える。指が使えれば、網をほぐしていけるに違いなかった。縄も、緩かった。身体を動かしているうちに、網ごと、頭から外れてしまうかもしれない。

しかし、網の中の転がりさんは、ただ叫び、もがいているだけで、網から抜け出す気配はない。今のうちに一平を助け出し、逃げるのが最善の策だろう。

友一は、小屋の中に駆け込んだ。

土足のまま畳に駆け上がると、寛太が叫び声をあげてきた。

「友ちゃん、だめだ。切れない」

友一は、土間に飛び降りると寛太の差し出す鎌を手にとった。

鎌の刃が錆びていた。

「ぼろぼろだ」

友一は、つぶやいた。

「縄を切ろうとしたら刃が欠けたんだよ」

友一が、土間の隅の台所に目をやると、

「包丁はない」

と、寛太がいった。何もなかったために寛太は、手で縄を解こうとしていた。

一平は土間に転がっていた。両膝と両足首を縛られ、両手首も後ろで縛られている。転がっているより仕方がなかった。

「一平、しっかりしろ」

といいながら友一は、一平の足下に座り込んだ。まずは、足首の縄をほどかなければ話にならない。ぐるぐるに巻かれている縄自体は、さほどきつくない。しかし、結び目だけはしっかり結ばれていた。

「友ちゃん、小刀」

と、耳元で良子の声がした。

弾かれたように友一が振り返った。

「こんな小さいのしかないのよ。転がりさんの家、包丁もないんだから」

そんなことはどうでもいいとばかりに友一は小刀をひったくると、足首を結わえている縄の、結び目の横に刃を押し当て力を入れて押し下げた。ざくっと縄が切れた。

「よし」

という友一の声に、寛太と良子の歓声が混じり合った。

ようやく作業が進み始めた。足首の結わえ目の両脇を切ると縄はするすると解けた。あとは、同じ要領だった。膝の縄を切り、手首の縄を切り、縄をほどいた。

小屋の外の、転がりさんの声がいつの間にかしなくなっていた。

「寛太、代われ」

というと友一は、小屋の外に飛び出した。

転がりさんは、もう転がっていなかった。地面に上半身を起こし、しきりに肩を動かしていた。

（まだ、大丈夫だ）

転がりさんは、まだ網の中でもがいていた。ただ、膝までかかっていた網が腰あたりまでずり上がっている。

友一はまた、小屋に飛び込んだ。

一平が、土間に立っていた。もう、猿ぐつわもとれ、口の中のぼろ切れも吐きだしている。

「一平、大丈夫か」

と声をかけると、一平は、こくんとうなずいた。さすがに、あまり大丈夫ではないらしい。

「逃げるぞ。みんな、出る」

四人が、一斉に駈けだした。

土手を上ろうとした四人の背に、

「待て、こらー」

という罵声が浴びせられた。

友一が振り向くと、転がりさんは地面に横たわってしきりに身体をくねらせている。膝の縄がほどけていた。網はもう、転がりさんの胸のあたりまで上がっている。胸で縛ったはずの縄は、転がりさんの頭のうえで力なくゆるんでいた。

「急げ」

友一は叫ぶと、土手を駆け上がった。

涙橋を越えた。

目の前には、お梅さんの店がある。

店の前の電球が四人を招いているように光を放っていた。

しかし、お梅さんの店までは遠かった。一平が遅かった。一平の後ろから来る友一は早足で歩いている。それでも一平は走っているつもりであった。しかし、もみじのように広がった足では人間ほど強く地面を蹴ることができなかった。

涙橋を渡り終えたとき、一平は、

(川に飛び込もうか)

と思った。しかし、川に飛び込んだあと、うまく逃げ切れる自信がなかった。

(川に飛び込んでそのまま家に帰ったら)

とも思ったが、思っただけで、どういうわけか、帰ろうという気は起こらなかった。

やっとお梅さんの店にたどり着いたとき、転がりさんの声が闇に響いた。

「こらー」

という声で振り向いた。

「待てー」

転がりさんの声が突然、大きくなった。

「逃げられんぞー」

という声とともに、転がりさんの黒い姿が橋の向こうにのっそりと現れた。

「逃げろ」

と、友一が叫んだ。が、一平は、相変わらず遅い。転がりさんはもう、涙橋を渡りきろうとしていた。追いつかれるのは時間の問題だった。

「先に逃げろ」

と友一は、良子と寛太に叫んだ。

「行け。早く」

ちゅうちょしていた良子と寛太が後ろを振り向きながら走りだした。

(お梅さんがいたら)

と友一は思ったが、お梅さんは神社に行っている。お梅さんの家の中は真っ暗だった。

(追いつかれたら、どうする)

どうしようもなかった。神社までは遠すぎる。追いつかれるだろう。

(闘うしかない)

勝ち目はないが、友一が転がりさんと取っ組み合いをしているうちに神社に逃げ込むしか方法はないであろう。

「神社に逃げ込め」

と、友一は叫んだ。

「一平、こっち」

寛太が走りながら神社のほうを指さした。良子と寛太が神社寄りに、道の左肩に走っていく。このまま神社に駆け込むのだ。

転がりさんは、ものも言わずに追ってくる。もう、お梅さんの店にさしかかろうとしていた。

(逃げ切れるかもしれない)

友一は、転がりさんの激しい息づかいを背中に感じながら、一平の後ろを、ときに早足で歩き、ときにゆっくり走っている。

一平は、力いっぱい走っていた。速くはないが、さっきよりはだいぶ速い。神社まで、まだ百メートル以上あるが、転がりさんはやっとお梅さんの店の前にやってきたところだ。

友一は、小走りしながら後ろを振り返った。転がりさんが喘いで歩いていた。橋からお梅さんの店まで全力疾走した転がりさんは、息が続かなくなっらしい。

「一平、あそこだ」

と、友一が神社を指さした。神社に逃げ込めば森の中に身体を隠すことができる。指さす先を、良子と寛太が走っていた。二人はもうすぐ、神社の中に入るだろう。

「待てー」

また、転がりさんの大声が聞こえてきた。

四人いっしょに振り返った。

転がりさんがまた全速力で追いかけてきていた。

(やっぱり、だめだ。追いつかれる)

友一は、とうとう観念した。

「走れ」

友一は、良子と寛太に怒鳴りつけた。

神社の前は、広めに土地が空いていて、鳥居は道から少し奥まっている。このため、道路の左肩からは神社に近づかないと鳥居が見えない。

良子と寛太のスピードが上がった。先を走る良子と寛太の前に神社の鳥居が見え、ふたりは、

一平を気遣いながらも鳥居に向かって走りつづけた。

鳥居の前の空き地までもう少し、というところまできた――その時だった。

神社前の三叉路に突然車が飛び出してきた。

車は、タイヤを軋ませながら曲がり鼻先を鳥居に向かって走る二人に向けた。

良子も寛太も、ヘッドライトの光に目がくらみ立ちすくんだ。

車は、すぐに向きを変えた。鳥居前の空き地に向かって突進すると、空き地の縁の木をなめるように転回し背中を見せた。いったん止まったかと思うと、良子と寛太に向かって後ろ向きに突進してきた。

二人のそばまで来ると車が止まった。

助手席からひとが飛び出してきた。

「乗って、早く」

智絵の声だった。

智絵は今日、授業が終わると、友達の誘いも断り、さっさとバスに乗った。明日は、河童さんのお祭りである。母の手伝いもしなければならず、祭りの準備が進む神社にも行ってみたかった。それに、何よりも一平のことが気がかりだった。

バスから降りると、川のほうが騒がしい。

川へ向かう途中で駐在さんから、靖之が川で溺れかけた恵を助けたという話を聞いた。

智絵は、肝がつぶれた。

「先生は、ぴんぴんしておるぞ」

という駐在さんに腹を立てながら、堤を走った。

靖之は、確かにぴんぴんしていたが、その代わり動転していた。靖之は、智絵を人混みから連れ出すと、智絵の両肩を握りしめ、思いつめた目で智絵の瞳を見つめながらささやいた。

「智絵ちゃん、河童を見たんだ」

端から見れば、愛の告白の姿にしか見えないに違いない。

河童を見た、と言われて、智絵もまた動転した。智絵は、靖之の目を見つめ返した。じっと靖之の目を見つめると静かに目を閉じた。やがて、そっと目を開けると、靖之の瞳を見つめながら、その、ほのかに紅い唇を開いた。

「靖之さん、わたしも河童を見たの」

智絵と靖之は、互いの瞳を見つめあった。

靖之がうなずくと、智絵がうなずき返した。

二人の心が通い合い、二つの心が信じ合った。

もう、ことばは要らないであろう。

二人で信じ合った、ひとつの確信さえあれば、世の中の人間がすべて敵に回ろうとも、二人、力を合わせて乗り切っていけるに違いない。

智絵と靖之は、二つの心をひとつにするかのように肩を寄せ合って土手を上った。

堤のうえから智絵と靖之は、生まれ育った、ふるさとの村を見渡した。

稲穂の波が、まわりの山々の麓までおおい尽くし、その中に、農家がぽつんぽつんと浮かんでいた。曇り空から吹き下ろす山おろしの風が、神社の森を揺らし、智絵と靖之を吹き過ぎていった。

「智絵ちゃん」

と、靖之が呼びかけた。しかし、やはり、それ以上言うことばはなかった。

「大丈夫」

と、智絵がつぶやいた。何が大丈夫なのか、などと問うことは愚かであろう。自分の心は、自分でも分からない。ひとの心は小宇宙である。その、広さも奥行きも、自分では知る手がかりもないであろう。ひとは、ほかの人の心に映る自分の心を見て、初めて自分の姿が分かるのかもしれない。あるいは、映る分しか自分の姿は分からないのかもしれない。

智絵は、自分の心を靖之の心に映していた。そこには、不安や信頼、安らぎや恐怖、友情や愛

など、無数のものが映っていた。それらを、ことばにすることなど、できるはずもない。

二人の心は、意味もない二つのことばでひとつの思いにつながれていた。

その、ひとつの思いこそ二人にとって真実であった。

——河童は実在する

その、思いである。

智絵と靖之は、一本松の下で駐在さんに呼び止められた。

「先生。隣村まで車を出してくれんか」

恵とお母さんは、念のため救急車で隣村の病院に運ばれた。しかし、入院するようなことはないであろう。

「そうなるんじゃ。二人は、バスで帰ってこなければならん」

身体に別状はないとはいえ溺れかけた恵である。精神的には相当参っているはずであった。だから、と駐在さんという。

「先生が車を出してくれたら二人も気を楽しんで帰ってこれるじゃろう」

靖之に異存はない。快く引き受けた。

「それに、先生。あんたもついでに、診察してもらったらええ」

智絵が、ぷっと口を尖らせた。が、駐在さんは気づかない。さらに、駐在さんはいった。

「先生の事情聴取は、あしたでええから」

智絵が駐在さんをにらみつけた。事情聴取とはどういうことであろう。人助けをしたのに、まるで、犯罪人扱いである。しかし駐在さんは、公権力の行使者であった。権力を行使される側の、庶民の気持ちには無頓着である。

「ほいじゃ、二人とも、気をつけて行ってこい」

というと、さっそうと自転車を漕いで去っていった。

「なに、あれ」

智絵は、駐在さんの後ろ姿をにらみつけた。

ああ、と靖之の声は、間が抜けている。

「じゃあ、病院に行ってこようか。智絵ちゃん、家まで送ろうか」

「もう」と智絵は、靖之をにらみつけた。

「しっかりしてよ」

うん、と靖之がうなずいた。

(頼りない)

結局、智絵も病院に行くことにした。

往路、一平のことを、靖之に話して聞かせた。

靖之は、終始黙って聞いていた。

智絵が話し終わると、

「そういうことだったのか」

とつぶやいて、ふーと息を吐き出した。

車内の会話は、ぼつりぼつりと続いていく。

「でもね」

と智絵が、首をかしげて言った。

「手を取り戻すって泥棒するのと同じじゃない？」

靖之は、答えない。

「かといって、見捨てるわけにもいかないし……」

「それは、そうだ」

と、今度は答えた。

「どうしたら、いい」

と智絵は、靖之に尋ねたが、自分に言っているようでもある。

靖之にも、答えが出なかった。

救出

夕方、恵とお母さんを車に乗せて病院を出た。恵は、すっかり元気になっていた。「お礼に」と、食事に誘われ、村に帰り着いたときには暗くなっていた。

神社前の三叉路から駐在所の前を通り、すぐに左に折れると智絵の家が見える。靖之の車は、智絵の家の、はるか手前で止まった。

家の前まで行って、と言おうと思ったが、何となく遠慮して車を降りた。ドアを閉めようとしたとき、

「あそこにいるのは、和美ちゃんじゃない？」

と、靖之が前方を見ながら言った。

ヘッドライトの明かりの先に小さな人影が見えた。

その人影が、二人のほうに走り寄ってきた。

「和美ちゃん」

と、智絵が駆け寄った。

「どうしたの。こんな時間に」

そういう智絵の背中越しに、車を降りた靖之が、

「叱られたのかな」

と、和美の顔をのぞき込んだ。

しかし、和美は何も言わず、真剣な面もちで智絵だけを引っ張っていかこうとする。

「一平君のこと」

と、智絵は聞いた。驚く和美に、

「先生は、一平君の味方だからいいの。何かあったの？」

というと、和美は、緊張の糸が切れたのか、突然泣き出した。

智絵と靖之は、和美をなだめながら車に乗せると、やっとのことで事情を聞きだした。

「転がりさんの家に行かなきゃ」

と智絵がいったときには車は走りだしていた。靖之の血相が変わっていた。駐在所の前を猛スピードで走りすぎ三叉路を左に曲がった。曲がると、走る間もなくヘッドライトの中に良子と寛太が浮かび上がった。

「転がりさんに追われてる」

と、智絵がいうと同時に靖之は、右にハンドルを切った。神社前で方向転換をすると、ギアをバックに入れ、車を後退させて先頭を走る良子と寛太の近くで止めた。

「後ろを開けるから子供たちを乗せて」

と、靖之が言った。車外に飛び出した智絵は、車の後ろのドアを開けながら、「乗って、早く」と叫んだ。

良子と寛太が、車に飛び込んできた。

友一と一平はまだ走っている。

「早く。急いで」

という智絵の声をかき消すように、転がりさんの声が降ってきた。

「そいつら、泥棒だ。捕まえてくれ」

転がりさんは、友一と一平のすぐ後ろ、五メートルくらいまで迫っていた。

「あきらめろ。逃げきれんぞ。挟み撃ちだ」

転がりさんはゆったりと歩いていた。前方に現れた車を自分の味方だと思って油断したらしい。転がりさんは、一平を追いかけるのに夢中で良子と寛太が車に乗り込んだことに気づかなかった——あるいは、このあたりはお梅さんの店以外には電球の光がなく、月明かりも星の光もないために、車に乗り込む姿が見えなかったのかもしれない。

一番後ろを走る友一と転がりさんの距離が開いた。

転がりさんは、また叫んだ。

「おい、車のひと。そいつら、捕まえておいてくれ。悪ガキどもだ」

転がりさんは、荒い息を吐いて散歩していた。無理もなかった。小屋からここまで、かれこれ三百メートル前後、走っているはずであった。

一平と友一がとうとう車にたどり着いた。

転がりさんは、悠々と歩きながら、

「ばかどもが」

と、大口を開けて笑った。

笑っている間に、ついに、一平と友一が車に乗り込んだ。

「あっ、こら」

転がりさんもやっと気づいたらしい。車のひとは、味方ではなく敵だった。

智絵は、車の後ろに跳ねあがったドアををばたんと閉めると、セーラー服のスカートの裾を翻して走った。

「待て、待たんか」

転がりさんは難儀なことに、また走らなければならなくなった。疲労困憊とはいえ、転がりさんも大人である。走ればそれなりに速かった。またたくうちに車に迫ってきた。

智絵が助手席に乗り込んだときには、転がりさんはもう、車に手が届きそうなところまで来ていた。後ろの荷台で、子供たちが「早く、早く」と大騒ぎしている。智絵がドアを閉めると同時に、車が発進した。発進するとき、車体の後ろから、どんという音がした。転がりさんが車の屋根を叩いた音だった。

車の後ろの窓越しに転がりさんがみるみる遠ざかっていった。

「もう、大丈夫だ」

と、友一がため息をついた。

「まだ、追ってくるよ」

寛太がリアウィンドウにへばりつきながら言った。当然である。転がりさんにとって一平は、起死回生の、最後の一手のようなものだ。地の果てまでも追ってくるに違いない・・少なくとも

追うつもりではあろう。

「それにしても」

と靖之は、三叉路を右折しながらいった。

「みんな、むちゃしすぎだぞ」

先生の口調である。子供たちは、黙り込んでしまった。

「こういうときは、ちゃんと先生に」

といいかけて、靖之は口をつぐんだ。助手席に埋もれるように座っていた智絵が振り向くと、靖之が苦虫を噛み潰したような顔をして前方を見つめている。

「どうしたの」

といいながら身体を起こして、智絵は、絶句した。駐在所の前で赤い光が円を描きながら回っている。

駐在さんが、非常用の懐中電灯を回していた。

車が駐在所の前でゆっくりと止まった。

駐在さんが、助手席に近づいてくる。

智絵が不安な目で靖之を見ると、靖之はうなずき返した。荷台の子供たちは、一平を取り囲むように身体をうづくまらせている。

智絵が車の窓を開けると駐在さんは、手に持った懐中電灯で肩を叩きながら、

「おー、智絵ちゃんか。先生とデートか。不純異性交際はいかんぞ」

と、からかうようにいった。

(まったく、もう)

と智絵は、おかんむりである。今日の駐在さんは、智絵の天敵であった。会うたびに、腹を立てなければならない。

その時、後ろのほうから声がした。

「おうい、その連中は泥棒じゃ。捕まえてくれ」

罪責問答

駐在さんが振り返ると、月明かりもない暗闇をひとが走ってきていた。

「あの声は、三左右衛門じゃな」

三左右衛門は、駐在所を照らす電球の光の中にはいると、膝に手を付き、息を切らせながらいった。

「わしの家から盗んだんじゃ」

「だれがじゃ」

と、駐在さんの声は冷ややかである。

「子供たちじゃ」

駐在さんは、顔をしかめている。駐在さんは長年、警察官を稼業としてきた。その経験から犯罪者には勘が働く。分校の子供たちはみな、いい子であった。盗みを働くような子はひとりもない。とはいえ、盗んだ、といわれては、駐在さんとしても動かざるをえない。

「子供たちは、どこにおる」

「そこじゃ」

と三左右衛門は、車を指さした。

駐在さんは、懐中電灯を車の中に向けた。

なるほど、子供たちがいた。さっき、智絵に話しかけたときは車の中をのぞかなかったために気づかなかったのだろう。

（うずくまっておるな）

と、駐在さんは気づいたが不審には思わない。子供たちを乗せた靖之の車とはよくすれ違うが、そのたびに子供たちはあわてて身体を隠す。身体を隠すのを楽しんでいるのである。

「で、なにを盗まれたんじゃ」

と駐在さんは、まだ冷ややかである。

「河童じゃ」

「あーん」

途方もなく大きな、あきれ声だった。

「いや、その、河童が」

と、とたんに三左右衛門はしどろもどろになってしまった。

「河童がどうした」

「河童がいて」

と三左右衛門は、あとのことばが続かない。

駐在さんが、懐中電灯の光を三左右衛門に当てた。訳の分からないことを言うやつがいたら、まず顔を観察するのが警察官の習い性である。光から顔を背ける三左右衛門に向かって駐在さんは言った。

「河童がいて、それからどうした」

三左右衛門は、進退窮した。河童がいた、と言ってしまったことを後悔した。

(河童の置物を盗られた、とでも言っておけばよかった)

と、つまらないことを思った。車の中から、河童の置物が出てこなかったら、それはそれで、おおごとである。

「わしが、河童を捕まえたんじゃ」

「あーん」

「その河童を、子供たちが盗んだんじゃ」

「あーん」

「その子供たちを、智絵と先生が助けたんじゃ」

「あーん」

もはや駐在さんは、あきれかえることしかできない。どう考えても、目の前で窃盗の訴えをほざいている男は、尋常ではない。

(もともと、三左右衛門は変じゃた)

と駐在さんは、過去形で思った。

「河童のお」

そう言いながら、駐在さんはにやにや笑っている。

「本当じゃ」

三左右衛門は、とうとう悲鳴を上げた。このままでは、気が変になったと思われそうであった。

「その車の中を調べてくれ。河童がいる」

「ふむ」

駐在さんとしては、そこまで言われては調べないわけにもいかない。車に近寄った。

「後ろの席じゃ」

といいながら、三左右衛門も車に近づいてきた。

「おまえは、そこにおれ」

駐在さんは、三左右衛門を怒鳴りつけると助手席から顔を突っ込み、懐中電灯で荷台を照らした。子供たちが荷台にひと固まりになって身体を寄せ合っていた。良子と和美がぴったりくっついて前に座り、友一と寛太が後ろに座っている。前の二人と後ろの二人の間に不自然な空間ができていた。まるで、何かを取り囲み隠しているかのようである。

(ふむ)

と駐在さんは、うなった。

駐在さんは、助手席から身を引くと、後ろのドアに手をかけた。ドアにはロックがかかっていなかった。駐在さんは、ドアを開けると倒されたシートのうえに腰をかけた。

懐中電灯を持った左手を、良子と和美の、くっついた腕に伸ばしていく。

懐中電灯の先が良子と和美の腕にかかった。二人は、ぴたりと触れあわせた腕を離そうとしない。駐在さんは、懐中電灯の先を左右に動かすと、力を入れて二人の腕を押した。腕が分かれた。が、まだその向こうは見えない。駐在さんは、二人のあいだに懐中電灯を差し込むと、今度は大きく左右に振った。良子と和美の身体が右と左に傾いた。懐中電灯の光が子供たちのあい

だに届いた。

そこに、五人目がいた。

駐在さんは、まじまじと観察をつづけた。

(これは)

と、駐在さんは思った。

(人間ではない)

子供たちがすぎるような目で駐在さんを見つめている。

(ふむ)

と駐在さんは、前の座席を振り返った。智絵と靖之も、すぎるような目で駐在さんを見守っていた。

(ふむ)

と駐在さんは、何度目かのうなり声を上げると、

(これは、河童じゃな)

と、ごくあっさり結論を出した。ごくあっさり河童の存在を認めたのは、子供たちも、智絵も、靖之も、転がりさんも同じである。この村の文化かもしれず、駐在さんも、この村の文化をいつの間にか身につけてしまっていたのかもしれない。

(しかし、三左右衛門の申し立ては不審じゃ)

駐在さんは、河童を懐中電灯の明かりでとらえながら考えた。

(なにゆえ、この六人が盗まねばならん)

三左右衛門が盗んだと言っている相手は、分校の無邪気な子供たちであり、村一番の好青年の靖之であり、村一番気だてのいい智絵なのである。六人とも村の宝であった。その六つの宝が、そろって泥棒をしたという。

河童が三左右衛門の所有物なら、確かに泥棒である。が、この車内は、三左右衛門のものを泥棒してきた雰囲気ではない。

(逆じゃな)

と、駐在さんは思った。三左右衛門が河童を盗み、それを六人が取り戻したのであろう。

(勘で分かる)

勘こそは蛇の道の蛇になるための必要欠くべからざる条件である。

(そもそも、警察官の本分は)

と駐在さんは、まともに入った。

(人間の犯す犯罪を摘発し、かつ、犯罪を予防するにある)

河童は、人間ではない。人間以外の動物は、それを飼っているものに所有権がある。

(思うに、この河童の所有権は、この六人にある)

何の証拠もないが、どうせ駐在さんが自分の頭を整理するための思考である。証拠など、どうでもいい。

(それを、三左右衛門めが盗んだ)

それを、六人が取り戻した。取り戻すときに三左右衛門に傷を負わせたのならともかく、三左

右衛門はいたって元気である。

(罪に問うべきは、三左右衛門である)

駐在さんは、上っ滑りの法律論を駆使して結論をだすと、車のドアを閉めて三左右衛門に向き直った。

(問題は、この男をどうやって、この六人から引き離すかじゃ)

三左右衛門は、ふてくされた顔を駐在さんに向けている。

「三左右衛門、おぬし」

と駐在さんは、変な言葉遣いをしている。

「かっぱと申したな」

三左右衛門は、激しくうなずいた。首の骨が折れそうであった。

「見つけられぬ」

そう駐在さんが言うと三左右衛門は、身体をのけぞらせて驚き駆け寄ろうとした。

「動くな」

駐在さんの語気は鋭い。

「わしが、見た。間違いはない。それとも、その方」

と、駐在さんのことばはますます時代がかってくる。

「わしが見落したと申すか」

「い、いや、しかし」

三左右衛門は、駐在さんのただならぬ気配にとまどうわ、車の中のかっぱは気にかかるわで、どう振る舞っていいのか途方にくれている。

「えーい、黙れ」

と、駐在さんは一喝した。この場の三左右衛門にとって、目の前の駐在さんは、いつものことながら不運であった。

駐在さんは、遠山の金さんを演じる近衛十四郎のファンだったのである。まだ駐在さんが若かりしころの三十歳ごろ、鹿児島市の映画館で、その映画を何度も見た。

駐在さんは、実直な人柄であるが、反面、ひょうきん者であり、根は単純だった。映画館から出るたびに、そのつもりになった。遠山の金さんのつもりになったのか、近衛十四郎のつもりになったのか、自分でも分からない。ともかく、そのつもりになり、官舎への帰路、頭の中で何度もせりふを繰り返した。

官舎に帰ると、駐在さんの英雄気分は吹き飛ぶ。二人の幼い子供がぎゃあぎゃああと騒ぎ立て、子供たちが寝静まると、身重の妻が腹を突きだしてあれやこれやと愚痴を言う。

駐在さんは、映画館からの帰り、寄り道をするようになった。バーやキャバレーに行くのではない。行き先は、甲突川である。甲突川のほとりで、だれも見えていないのを確認すると、身振り手振りを交えて遠山金四郎を演じるのである。何度も演じているうちに、映画の中の、遠山の金さんの、あるいは、近衛十四郎の息づかいまで分かるようになった。ついには、

——わしは、警察官より映画が向いている

とまで思った。病、膏肓に入ったのである。

その後、駐在さんは、映画スターになることもなく、定年を迎えようかというこの歳まで、警官稼業をつづけてきた。

しかし、今、三左右衛門を前にして、遠い記憶のかなたから、銀幕のスターになり損ねた自分が甦ってきた。今を逃せば、二度とスターにはなれないであろう。

「その方、かっぱなどと、やいのやいのと申し立て、不埒千万」

「しかし、本当に河童が」

「黙らっしゃい」

駐在さんは、いい気分である。権威を笠にきて、ひとを一喝するのがこれほど気持ちいいとは思わなかった。新発見ではある。

「その方、かっぱは家に置いておるのであろう」

「いや、車の中に」

と三左右衛門は、閉口のあまり氣息奄々である。

「まだ申すか。たわけ者」

三左右衛門は、若かりしころ、先祖伝来の田畑を小作人たちに売り払った男である。確かに、田分け者ではあった。

「そもそも」

という駐在さんは、右足を一步踏みだし、ちょっと頭を振った。見得を切ったつもりであった。名奉行の、名裁きは、ここからが見せ場である。

「雨も降っておらぬのに、なにゆえ、雨合羽を盗み出す必要がある」

ぽかんと三左右衛門が口を開けた。

「いかに、三左右衛門」

三左右衛門は、呆けた面をさらしている。訳が分からない。それでも、三左右衛門は口を開いた。

「合羽じゃのうて、河童じゃが」

「その方、酔っておるな」

と、駐在さんの声が急に低くなった。動と静の抑揚こそ時代劇の醍醐味である。

「いや、酔ってなぞ」

といいかけた三左右衛門に、駐在さんがおらぶ。

「かっぱは、かっぱであろうぞ」

そう言うと、少し間をおき、今度はドスのきいた低い声で言った。

「かっぱではないが、かっぱであるなど、酔っぱらいの戯れ言」

酔っているのは、駐在さんのほうかもしれない。

「わしに息を吐きかけてみよ。三左右衛門」

さすがに、三左右衛門も気がついた。

(はめられた)

ここは、逃げだすしかないであろう。

「もう、ええわ」

三左右衛門は、駐在さんに背を向けようとした。

「待てい、三左右衛門。罪なき者を咎人呼ばわりし、それで済むと思うか」

三左右衛門が、ぎょっとして駐在さんの顔を見つめた。

「その方、至醇なる若者と、花も盛りの娘子のみか、年端もいかぬ子供までも盗人呼ばわり。この罪、なんと心得る」

「すまんこって」

「たわけ。捨て置けぬ」

と叫ぶと駐在さんは、つかつかと三左右衛門に歩み寄り、むんずと襟首をつかむと、

「きりきり、引ったてい」

と吼えたが、これは、「来ませい」の間違いであろう。

駐在さんは、三左右衛門を駐在所に押し込むと、智絵に目をやり、右目でウィンクすると、ぴしゃりと戸を閉めた。

車の中では、まだ、七つの口がぽかんと空いていた。

「行かなきゃ」

と智絵が上の空で言うと、靖之は、

「はあ」

と空気の抜けるような声で返事をし、車を出した。

しばらく走ると、智絵が、ぷっと笑い出し、たちまち車内は爆笑に包まれた。

「おもしろかったあ」

と寛太が、大声で叫んだ。

「初めて見た。あんなの」

そう良子がいうと、

「上手だったなあ。駐在さん、俳優になればよかったのに」

と、友一が言った。駐在さんが聞いたら、勘違いして人生を悔いるかもしれない。

「サインもらおうかな」

と和美まで、駐在さんの見果てぬ夢を後押しした。駐在さんのファン、第一号である。

「たいしたもんだ」

と靖之は、ひたすら感心している。

智絵は、黙っている。今日は、駐在さんに、腹の中でさんざん悪態をついた。なにやら、申し訳ない気分ではある。

一平も、にこにこしながら黙っている。何がおもしろいのか分からないのかもしれない。

ひとしきり、駐在さんの名俳優ぶりに花を咲かせ終わると、

「で、どこに行ってるの？」

と、智絵が言った。さっきから、村の中をぐるぐる回っている。

えっ、と靖之が驚いたように言った。

「どこかに行くの」

この二人の会話は、いつも、どこか、ちぐはぐである。

車には、一平が乗っているのである。このあと一平をどうするか考えないといけない。明日の、祭りの夜のことも相談しなければならない。ここまできた以上、子供たちを外して、智絵と靖之だけで決めるわけにもいかないだろう。

結局、子供たちを連れて町までドライブすることになった。車の中ほど、密談に適した場所はない。子供たちの家に寄ってドライブに連れていくことを話し、最後に智絵の家に寄った。

智絵が家に入り、靖之が車の中で待っていると家の中からひとが飛び出してきた。智絵ではなく、粗忽者の、智絵の父親だった。靖之は、あわてて車を飛び出した。車の中をのぞき込まれでもしたら大変である。

智絵の父は、大喜びであった。いきなり、

「いやあ、先生。できの悪い娘じゃが、よろしゅうお願いします」

といわれて、靖之は面食らった。どういう返事をしていいのかわからない。頭を掻きながら、「はあ、どうも、恐れいります」などといっていると、智絵がうんざりした顔で家から出てきた。

「こら、智絵」

と振り返ると、

「ちゃんと、先生に挨拶をせんか」

と叱りつけた。智絵は、家を空けることを知らせるためにちょっと家に立ち寄っただけである。ここで靖之に挨拶するほうが変であろう。

「どうも、行儀作法もできとらん娘で。先生には、ご迷惑をかけて申し訳ないが、よろしゅうお頼み申します」

そういうと智絵の父は、深々と頭を下げた。なにが何でも智絵を靖之に縁づけたらしい。

智絵は、さっさと車に乗り込んだ。靖之は、まだ父としゃべっている。耳に息を感じて振り向くと、身を乗り出している良子と目があつた。

うふっ、と良子が笑った。良子ももう、そういうお年頃である。

智絵は、そしらぬそぶりで顔を戻した。頬が染まっていた。

車は、隣村を過ぎ、町に向かって走っている。

隣村を出ると、道路は山沿いに町に向かって降り、右の車窓には平地が広がっていた。

平地のかなたに町がぼんやりと光っている。町へ向かう黒い川のような道路のうえを、数台の車が赤いテールランプの光を引きづりながら走っていた。

一平には、初めて見る風景である。

車の窓から町へと続く景色が見えたとき、その広さに驚いた。里にいたときは、山々に視界を遮られ、どこまでも広がる平野の景色など見たことがなかった。

一平は、川の流れを探した。

しかし、見えなかった。

空は曇り、月も星もない。

夜の帳の中に、ぽつんぽつんと散らばる家から電球の光が漏れていた。

(寂しそうだな)

家の窓から漏れる光は、弱々しかった。夜の暗闇に吸い込まれるように頼りなかった。

(あの中に)

と一平は、ひとつの光を見つめた。

(お母さんと、ばあちゃんがいるんだ)

一平が見つめる先の家には、ひとつの家族が、あの光に包まれて笑い、話しているに違いない。

(暖かそうな色)

山吹の花の色に似ていた。その花を見ながら、お母さんとばあちゃん、おじさんとおばさんの

五人で楽しく語り合ったことがあった。暖かい春の日だった。

「一平、大変だったな」

と、友一が話しかけてきた。うん、と一平は、うなずいた。さすがに、元気のいい返事は出なかった。

「あのひと、どんな人」

と、転がりさんのことを聞いた。

「いつも走り回っている無精もんだよ」

と、和美が言ったが、言い得て妙ではあった。

「それに、金儲けのことしか考えてない」

と、寛太が付け加えた。

「それに、ひとを利用することばかり」

と、さらに良子が付け足した。かつては、良子のおじいさんが利用された。今は、良子が転がりさんに酒を持って行っている。が、振り返ってみると、転がりさんに利用されているような気がしてきた。

「それに、貧乏なのに太ってる」

と友一は、前々から疑問に思っていたことを初めて口にした。

「ふうーん」と一平は、お握りを食べている。ドライブに出かける前、家に寄ったとき、どの家でもお母さんが、お握りを人数分、大急ぎで作ってくれた。一平のことは秘密だから、ひとり、六個ずつ持ってきた。智絵は、一平の分まで入れて七個作ってきたから、車にはぜんぶで三十一個のお握りが集まった。

「恐かったですよ」

と、良子がしみじみといった。

「うん」

と、一平はうなずいた。恐くはあったが、それよりも逃げだすことで頭はいっぱいだった。身体ひとつで自然の中に生きるものは、恐がって震えているばかりでは生き抜いてはいけない。

(変なひとだったな)

というのが、一平の感想である。

里にいたときおじさんが、気狂いした人間だけ注意しておけばいい、と言っていた。気狂いした人間は、すぐ刃物を振り回す。しかし、転がりさんが気狂いしているとはどうしても思えなかった。かといって、普通の人間とも思えない。

(猪と猿が一緒になったような人間だ)

猪は普段、ぼけーとしている。しかし、ものの弾みでいきなり怒り、追いかけてくる。猿は、油断がならない。浅知恵のくせに、ずるがしこく、相手を脅したかと思うと逃げだし、いなくなったかと思うと、後ろで待ち伏せていたりする。

(きっと、ばあちゃんたちが村に住んでいたころは、あんな人間はいなかったんだろうな)

急に一平の顔がくしゃくしゃになった。唇が横に延びて、両端が下がっている。目尻も、情けなさそうに下がっていた。

(なんだ、これ)

梅干しを嚙んでいた。

一平は、泣きそうな顔で種ごと飲み込んだ。おいしくないからといって吐きだすとお母さんから怒られるのである。

「川だ」

と一平が、小さな声で叫んだ。

車の左側を、細い川が流れていた。車は、いつの間にか山を降り平地を走っていた。細い川だが、村を流れる川よりずっと広い。

(この川にも)

と、一平は思った。

(河童は、住んでいるのだろうか)

川は、町に向かって流れていた。

(お父さんは、この川を通ったんだ)

一平の父は、かっぱと人間が、やがて一緒に暮らせなくなると信じ、薩摩、大隅の川を経巡り、河童たちに移り住むよう説いて回った。その時に、きっと、この川を下っていったに違いない。

(どこかで、休みながら行ったんだ)

一平は、村に向かうとき休むことも忘れ死にそうになった。しかし、お父さんは、そんなへまはしなかったに違いない。

(お父さんは、大変だったんだ)

里から村へ出て来るだけでも大変だった。それを、一平の父は、薩隅二州の、川という川を駆け回ったのだ。

(すごいひとだ)

涙が溢れそうになった。顔も知らない父が、この川の畔に立って、向こうに見える町をじっと見つめている姿が目につかんできた。その父の、後ろ姿は逞しく、腕を組んで町をにらむ姿は雄々しく、顔は凜々しかった。

(お父さん)

一平は、生まれて初めて父を身近に感じていた。涙が後から後からこぼれ、頬を流れていった。

ひとときの安息

靖之は、町に入る手前で車を止めた。

「町に入って、面倒なことが起こると困るからな」

そういうと、両手を頭の後ろに組んでくつろいだ。

「すごい光」

と、一平は目を丸くしている。

一平は、変な格好をしている。靖之の背広を着ていた。背中に甲羅を背負っているとはいえ一平には大きすぎた。背広の下半分が床に垂れ、両手も袖に隠れている。頭には、大きな麦わら帽子が乗っかっていた。これも大きすぎた。麦わら帽子は一平の額まで覆い、つばに隠れるように目がのぞいていた。出来損ないの、かかしのような姿である。

「鹿児島のは、もっとすごいよ」

と、寛太がいった。この、目の前の町は、人口三万人ほどである。それなりにしか光っていない。

しかし、一平にとっては、目もくらむ光の渦であった。遠くから見ているときはぼんやり光っているだけだったが、近くに来てみると、一つひとつの光が一平の目を刺すように鋭い。光の色も、白や赤、中には緑や橙色に次々に変化しているものもある。

一平は、あまりの光に酔いそうになった。いや、もう酔っているのかもしれない。目がちくちくしている。

(夜、眠れないや)

と、思った。

靖之が再びエンジンをかけ、車は帰途についた。

一平は、遠ざかっていく町の灯を、記憶に鮮明に留めようとするかのように見送っている。ひとつひとつ見えていた町の灯りがしだいに混ざりあい、やがて町は、けぶるような光りに溶けあい、小さくなっていった。

「脱輪してやがる」

と、靖之が嬉しそうにつぶやいた。舗装道路から片方の後輪をはみ出した車が車道に止まっていた。車の後ろには夫婦らしい年配の男性と女性が途方にくれて立っている。

(間抜けなやつだ)

と思ったが、口には出さない。教育上の配慮がある。

靖之は、間抜けな車の手前に車を止めた。

「ちょっと……手伝うつもり」

智絵は驚いた。面倒なことが起こることを怖れて町に入ることを止めたのである。一平を乗せている以上は係わり合いを避けるのが賢い判断というものであろう。

「大丈夫だよ。すぐ戻るから。みんな、車の中にいろよ」

という靖之は、ヘッドライトを消すと車を降りた。

夫婦に靖之が加わって車の後ろを三人で抱え上げた。が、車は持ち上がらない。脱輪した車の

後輪は、道路脇の、さほど深くもない溝に完全にはまりこんでいた。道路から雨水を逃がすための溝なのかタイヤの下を水が流れていた。

とうとう、智絵も車から降りて手伝った。が、やはり上がらない。

「おれたちも行こう」

と、友一が車を降りた。

「一平は、ここにいろよ」

と言い残し、脱輪車に駆け寄った。

今度は、車は持ち上がった。しかし、持ち上がったただけだった。車はまた同じところに落ちてきた。

(持ち上げるだけだから、だめなんだ)

と思ったのは、一平である。持ち上げたとき、車輪は溝から出ている。ただ、横に移動させる力がなかった。

一平は、車から降りた。靖之の背広が膝まで垂れていた。

一平が、脱輪した車のほうに歩き出した。麦わら帽子と背広が、かってにとことこ歩いているようであった。

一平が、みんなの後ろまで来たとき、「二」というかけ声がした。「三」で持ち上げる。一平は、バンパーの下に手を掛けた。

「三」という声で持ち上げた。

やはり、河童は力持ちだった。車が、ぐんと持ち上がった。

さすがにそれ以上は無理で、横には動かせなかったが、それで十分だった。車を持ち上げるのに精一杯だった力に余裕が生まれ、タイヤが溝から外れ地面に落ちた。

「やったー」

と、子供たちが一斉に声を上げ万歳をした。

ばかなことに、一平まで声を上げて万歳をしていた。

一平の声で、仲間たちが気づいた。みんなが一平の顔を見た。驚いていた。

が、車の夫婦は気づかなかつたらしい。嬉しそうに顔を見合わせて何か話していた。

一平は、車に駆けつけた。駆けながら、

(やっちゃった)

と、ぺろっと舌を出した。車に駆け込むと荷台に寝ころんだ。

(また、調子に乗りすぎた)

車を持ち上げたところまではよかったが、なにも、みんなと一緒にあって歓声をあげなくてもよかった。さすがに、自分がお調子者であることを認めざるをえない。

一平のあとを追うように、子供たちが乗り込んできた。先頭の友一が、

「一平、すげー力持ち」

といいながら、一平の腕をつかんだ。寛太も、もう一方の腕をつかむと、不思議そうに首を傾けながら自分の腕を掴んだ。

良子は、一平の顔を見るなり、

「車から出たらだめって言ったでしょう」

と、叱りつけた。

一平が、「へへ」と頭を掻いていると、友一が、

「こんな腕で、よく力が出るな」

と感心した。

「見つかったら、また、大変よ」

と良子はまだ、小言を言っている。

「どうやって、鍛えてるの」

と、寛太が聞いた。寛太は、頭はいいが腕力はからっきしであった。一平がうらやましくて仕方がない。

「一平君、頭を下げなさいよ。見つかるわよ」

と良子は、窓の外を心配そうに見ながら言った。靖之と智絵がまだ、車の夫婦と話していた。

「一平、腕相撲しようぜ」

と友一が、うつぶせに寝転がった。

「友ちゃん、見つかったらどうするの？」

良子は、気が気ではない。

「おれ、行司」

と、寛太も寝そべった。

「やめなさいったら」

とうとう良子が、金切り声を出した。気づかれるおそれは、良子の声のほうがよほど大きい。

「やっと、来た」

と、和美がはしゃいで言った。靖之と智絵が、小走りに戻ってきていた。

靖之はすぐに、車を発進させた。智絵と靖之が、車の夫婦に頭を下げようとする、男のほう、行く手を遮るように車に近寄ってきた。

いったん、車を止めざるをえない。男が何か話しかけてきた。智絵は、やむを得ず窓を開けた。

「どうも、助かりました」

「いえいえ、どういたしまして」

先を急ぎますので、といおうとしたとき、奥さんが「これ、食べてください」と紙包みを差し出した。智絵は、お礼を言わざるをえない。

「どうも、ありがとうございます」

また、先を急ぎますので、と言おうとしたとき、男が助手席から、子供たちをのぞき込み、

「君たちも、どうも、ありがとう。おかげで助かったよ」

と、笑った。その、笑っていた顔から突然、笑いが消えた。一平と、目が合っていた。

男は、じっと一平を見つめながら亀が首を伸ばすように顔を突きだした。

その時、一平は何を思ったのか、麦わら帽子を取ると顔を突きだした。

「ばあー」

「うわあー」

靖之が車を発進させた。

呆然と見送る夫婦を尻目に車内では、友一と寛太が笑い転げていた。

「ほんとに、もう」

と、智絵も苦笑するしかない。

「ほんとに、もう」

と、良子も同じことをいったが、こちらは眉をひそめている。

「ほんとに、もう」

と、最後にいったのは和美であったが、これは楽しそうだった。

靖之も苦笑していた。

(無邪気なのか、剛胆なのか)

考えてみれば、一平は、遙か山奥から、じいちゃんの手を取り戻すために、たったひとりで村までやって来たのである。剛胆というべきであろう。

(しかし、無邪気でもある)

この、一平のそそっかしさは子供のものであった。

(邪気無しか)

と、靖之は、転がりさんに思い至った。

転がりさんは、邪気の固まりである。邪気に満ちた転がりさんは、金や名誉のためならともかく、ばあちゃんを喜ばすために千里の山道を越えることなどしないに違いない。いや、金や名誉のためでも、しないであろう。そもそも転がりさんには千里の道に行くという発想がないのである。

(夢ならある)

と、靖之は思った。転がりさんはいつも、千里を踏み越えた自分を夢見ている。

(しかし、あのひとは)

とは、転がりさんのことである。

(最初の第一歩を踏み出すための力がない)

なぜそうなのか――とは、転がりさんに興味のない靖之は思わない。

(夢を持つなら、夢を実現させるために、まず一歩を踏み出さないと)

翻って自分を考えた。

(おれの夢は……)

しかめっ面をした。

夢を何とかひねり出そうとしている自分にうんざりした。

お帰りなさい

車が村に入ろうとしていた。

前方の暗がりに鎮守の森が見える。

一番遠い寛太の家に向かっていて、鎮守の森を右手に見ながら進み、鳥居前の三叉路を左に折れて駐在所前を通り過ぎたその先に、寛太の家がある。

もう、十時を回っている。

子供たちは、後ろで眠っていた。

「教師失格だな」

と、靖之が笑った。こんな時間まで子供たちを連れ回したことがばれたら、教育委員会から譴責処分を受けるかもしれない。

「でも」と智絵は、靖之を見ると拳を振り上げ、

「今日の靖之さんは、がんばった」

と、力強く言った。

はは、と靖之は笑うといった。

「今日の、じゃなくて、今日もだよ」

「うん」

と智絵は、素直にうなずいた。

前方に、神社の森が見えてきた。いつもは夜の闇に溶けこんでいる鎮守の森が、今夜はほのかに明るく見える。明日の祭りの準備の明かりがまだ灯っているのかもしれない。

智絵が目を細めてつぶやくように靖之に語りかけた。

「今日、一日、いろんなことがあったね」

智絵は、助手席の窓越しに、村の家々の灯りを見るときも眺めている。

「何だったんだろう。今日は」

靖之がぼんやりと言った。

「とても大事な一日だったような気がする」

そう、つぶやくと目を伏せた。

(わたしにとっても靖之さんにとっても)

車が、神社前の三叉路に出た。

お梅さんの店の前には柔らかい電球の明かりがいつものように灯っている。

その、ともしびは、

——お帰りなさい

と、そう呼びかけるかのように灯っていた。

三叉路を曲がって、電球一個が照らす駐在所の前を通り過ぎた。

「なんか、懐かしいな」

靖之は、苦笑しているようでもあり、感慨に耽っているようでもある。

寝ている寛太を起こして車から降ろし、遅くなったことを二人で詫びて友一の家に向かった。

友一を家に帰し、良子と和美を送り、最後に智絵が車を降りた。

「じゃあ、明日ね」

「うん、また、明日」

「一平君のこと、頼んだわね」

「任せといて。お父さんには、よろしく言っといて」

「ああ」と、智絵が笑った。

「変な父親でごめんなさい」

「いやあ」と、靖之も笑った。

「ぼくは、お父さんのこと、好きだよ。気が合ってる」

「似たもの同士って」

「そうかも」

二人は顔を見合わせると小さな声で笑った。

靖之は、智絵の後ろ姿が消えるまで見送ると、車を学校に向けて走らせた。一平を、学校の宿直室に泊めるためだった。

転がりさんの隣の小屋は、さすがに使えない。宿直室に泊めることにした。靖之も泊まる。いかに転がりさんでも学校に侵入することはないだろうが、敵は転がりさんであり、絶対安全ともいえない。万一に備えて靖之と一緒にいることにしたのである。

（しかし、おれは必要か）

と、車を走らせながら思った。一平は、怪力である。あの腕力なら、転がりさんなど一発で吹っ飛びそうであった。一平が、転がりさんに追われて逃げ回ったなど信じられない思いである。

（でも、まあ、それとこれとは、別なんだろう）

怪力とはいえ、まだ子供である。大人に追われたら逃げだしてしまうのだろう。

お梅さんの店を通り過ぎると、一本松がヘッドライトに浮かんだ。松の木の下に、自転車が立っていた。良子が乗ってきた自転車だった。靖之は、ヘッドライトが一本松を照らすように車を止めた。

「一平君、おい、一平」

と、一平を呼びながら肩を揺さぶった。

仰向けに寝ていた一平が目を開けた。

「見ておかないか。松の木を」

「松」

と一平は、まだ寝ぼけている。

「おじいさんが、太郎さんに斬られたときの松だ」

一平が飛び起きた。

「これだよ」

と、靖之が松の根本から一メートルくらい上のところを指さした。

松の幹のささくれだった樹皮が細長く割れていた。それは、たった今斬りつけたように生々しく木肌をさらしていた。

一平は、ひざまずくと木に刻みつけられた傷の跡に目を近づけた。

幹の傷は深く長く、くさびを打ち込んだように幹に食い入っている。太郎は、あらん限りの力で刀を振り下ろしたのだろう。肌色のくさびの内側がかさかさに乾いていた。

不思議なことに、いくら傷を見つづけても何の感慨も覚えなかった。村を去り、権平が死んでから生まれた一平には心を動かすよすががなかったのかもしれない。

(ばあちゃんも、これを見たんだろうか)

きっと見たに違いない。一平が旅立つ夜、ばあちゃんは、じいちゃんに会いたそうに話していた。おそらく、おそろおそろ松の木に近づいて、こわごわ、幹の傷をのぞき込んだであろう。

(きっと、ばあちゃんは泣いただろうな)

村にしまわれているじいちゃんの手を「亭主の亡骸じゃからのお」とつぶやいたばあちゃんの声が忘れられない。

(でも)

と傷跡を見ながら、一平は思った。

(ばあちゃんは、太郎さんを憎んでいない)

ばあちゃんは、太郎さんも権平じいちゃんも哀れだといっていた。哀れというのが一平にはよく分からないが、ばあちゃんの口ぶりからは、たぶん、かわいそうということだろう。

(何で、太郎さんがかわいそうなのか分からないけど)

と一平は、傷跡を指でなぞった。

がさがさした感触が指の先に伝わってきた。

一平は、指の先で切り傷の跡を押した。

痛かった。

斬られた権平じいちゃんは、もっと痛かっただろう。

(じいちゃん、かわいそうに)

手首を切り落とされたじいちゃんは、泣きながらばあちゃんのところに戻ったが、太郎さんの悪口はひと言も言わなかった。じいちゃんだけでなく、ばあちゃんも、お母さんも、おじさん夫婦も、太郎さんを恨まなかった。

(お父さんも恨まなかった)

もし恨んでいたら、あの、お父さんのことだ。きっと、太郎さんに復讐したに違いない。しかし、一平の父は、復讐するどころか、そんなことは忘れたようにこの村で河童たちの指導者になり、人間たちと共に暮らし、河童の里を開くために奔走した。

(じいちゃんは、そんなお父さんを見守っていた)

そんな光景が、見えるような気がした。

(ぼくたちは、だれも太郎さんを恨まなかったんだ)

この村に来てから一平は、太郎さんが松の木を斬ろうとして雷に撃たれて死んだことを知った。友ちゃんや良子ちゃん、寛ちゃんや和美ちゃんが、そう話してくれた。

(太郎さんは、死ぬまでじいちゃんを恨んでいた)

河童はだれも恨んでいないのに、太郎さんはひとり、河童を恨みながら死んでいった。もしかしたら、松の木の姿をおどろおどろしく変えてしまったのは、太郎の恨みの一念だったかもしれない。太郎の恨みが松を庄屋屋敷へと呼び寄せ、自らが招いたとも知らず、屋敷を絡め取るように変化した松の姿に太郎は怯え、ついには、この松を斬り倒そうとしたのかもしれない。

もしそうなら、太郎は、自分の影におそれおののいたのであろう。そして、松を斬るつもりで自分を斬ってしまったのかもしれない。

(太郎さんは)

と、一平は思った。

(あわれなひとだ)

何となく、そう思った。

一平は、両手で傷跡を囲みながら顔を近づけた。

(じいちゃん)

と、心の中で呼びかけた。肌色の傷跡が目を細めるように一平を見つめ返している。微笑んでいるようだった。

「じいちゃん」

一平は、そう呼びかけると額を松の木に押し当てた。閉じた目からこぼれた涙が一筋、頬を伝い、松の幹の切り裂かれた傷に流れ落ちた。

祭りの日

祭りの日の朝、村は快晴だった。

晩夏の空には雲ひとつなく、どこまでも蒼く澄んでいた。

靖之は、校門を出ると、すぐに車を止めた。一平を、分校から河原へとつづく山に隠すためだった。

靖之は、朝、駐在さんの現場検証に立ち会わなければならない。そのあいだ、一平をどこかに隠しておく必要があった。学校の中は隠れ場所がありそうでなかった。それに、学校はフェンスで囲まれていて追われたときの逃げ場がなかった。かといって、河原の小屋に連れて行くわけにもいかない。河原が、現場検証の現場なのである。

さんざん考えたすえ、河原へと降りている山の中に一平を隠すことにした。ここなら、河原のようすを上からのぞき込める。だれかが山の中に入ってきたときも、生い茂る雑木林の中に身を隠すことができる。何よりも、いざという時には靖之がすぐに駆けつけることができた。

「ともかく」と、一平に言った。

「転がりさんには注意しとくんだぞ」

そう言われたが、一平は、転がりさんの顔をよく覚えていなかった。転がりさんと身近に接したのは、転がりさんの小屋に誘拐されたときだけである。その時も、顔の風呂敷をとられたときに転がりさんの顔を見ただけで、あとは、転がりさんに背を向けて土間に転がっていた。

(知らないひとが来たら隠れよう)

そう思いながら一平は、河原をのぞける場所に移動した。

見つからない注意しながら河原をのぞき込んだ。

河原にはもう、ひとが集まっていた。

川岸に、駐在さんを中心に、靖之、恵、恵のお母さん、智絵、お梅さんが輪を作るように集まっている。川はもう、いつもの川に戻っていた。

(友ちゃんたちもいる)

子供たちも輪の中にいた。

(あのひとが、転がりさんだ)

駐在さんの横で、小太りの男が何かしきりにしゃべっていた。

駐在さんは足下を指さすと、はえを追い払うような仕草をした。輪が崩れ、駐在さんが指さす先が見えた。紅い花を付けた山芍薬が揺れていた。

現場検証は、長かった。昼過ぎまでつづいた。

子供たちが時々、山のとっぺんを見上げる。一平は、思わず手を振ろうとして思い止まった。調子に乗りすぎてはまた失敗する。

(腹減った)

と思ったが、食べるものは何もない。がまんするしかなかった。

やっと、みんなが帰りはじめ、最初に転がりさんが駐在さんにしょつ引かれるように一緒に帰っていった。そのあとを、お梅さんと恵とお母さんが話しながら涙橋を渡っていった。最後に、

子供たちと智絵が帰っていった。

智絵は、風呂敷包みを靖之に手渡していた。包みのうえのほうが妙に出っ張っている。

(きゅうりだ)

一平の目が、輝いた。

「へへ」

と笑うと、腹の虫がぎゅうと鳴いた。

靖之は、河原から一度山の上を見上げると土手を上りはじめた。一平も、車に向かって林の中を突切った。腹が減ってたまらなかった。

靖之は、車に寄りかかって一平を待っていた。

一平は、「へへ」と笑った。風呂敷包みから目が離れないのが自分でもおかししかった。靖之が笑いながら風呂敷包みを差し出すと、一平は両手で抱きかかえて中をのぞき込んだ。

(やっぱり、きゅうりだ)

ドアが開くのを待ちかねて中へ飛び込むと一平は、風呂敷の包みをむしるように解いた。きゅうりをわし掴むと噛み切った。

車はすでに、動き出している。

靖之が、ひたすらむさぼり食う一平に言った。

「一平。夜まではまだ、だいぶん時間がある。それまで車の中だけがまんするんだぞ」

んぐんぐ、と一平の返事が返ってきた。

靖之は、車を走らせながら心中は不安だらけである。これからの計画がうまくいくか、自信がなかった。さらに不安を駆りたてるのは、河童の手を盗み出す、という行為だった。

——それは、犯罪だ

という思いがある。

昨夜のドライブの帰り、子供たちが寝てしまってから智絵ともそのことを話し合った。窃盗、ということでは、二人とも一致していた。

——してはならないこと

ということでも、二人は一致していた。しかし、

——一平を放っておけない

という思いも、二人一緒だった。

考えがまとまらないまま、靖之と智絵は、河童の手のミイラを盗み出す計画を立てた。

計画を立てながら靖之は思った。

(全責任は、おれがとる)

覚悟を決めたというより、ここまできたら、それしかなかった。

(いっきさんに事情を話したら許してくれそうな気も……)

ぶるんぶるんと首を振った。

(みんな、未成年だしな。おれ一人を窃盗罪にしてくれといったら、駐在さんが何とかしてくれるだろう)

全責任を一人でかぶるといっている割には、ずさんな計画ではあった。

靖之はいったん家に戻り、着替えをすると、すぐに車に戻った。驚いたことに、さっきまで手当たりしだいに食べ散らかしていた一平が寝入っていた。疲れているのであろう。

(無理もない)

何日もかけて村へやって来て、村に着いたとたんに溺れかけ、翌日、濁流に飛び込んで靖之を助けたかと思うと、転がりさんに連れ去られ、やっと救出されたのもつかの間、転がりさんに追いかけてまわされたのである。

靖之は、家からバスタオルを持ってくると、そっと一平に掛けてやった。

(無邪気なもんだ)

一平の寝顔を身ながら苦笑した。大の字に両手両脚を伸ばし、口は、これでもかというくらい開けっ放しである。

(おれも、一眠りするか)

靖之も疲れていたのであろう。一平の寝息を聞いているうちに自分まで眠くなってきた。とはいえ、ここは危険である。靖之が車を止めているのは、自分の家の庭であった。自分の家ではあるが、靖之の両親は、一平のことを知らない。無用な騒ぎが起きる可能性は、極力避けるべきだろう。

(あそこがいい)

と靖之は、にやりと笑うと車を出した。

向かう先は駐在所である。駐在所の横は、車二台分くらいの縦長の空間がある。

駐在所に車を入れ、駐在さんを訪ねると、駐在さんの代わりに駐在さんの奥さんが出てきた。

「今、分署まで転がりさんを連れて行っています」

と、駐在さんの奥さんは言った。

靖之は、狂喜した。転がりさんがいないとなれば一安心である。留置場にでも入れば、今夜は帰ってこないかもしれない。

(やったね、駐在さん)

さすがは名奉行である。

「どうかしたの、先生」

奥さんが、怪訝な顔をして靖之を眺めている。無理もなかった。靖之の顔は、崩れっぱなしに崩れていた。

「ははあ」

と奥さんは、あごを引くと上目遣いに靖之を見上げた。口元が笑っている。

「さては、先生、智絵ちゃんと河原の小屋で逢い引きするつもり」

靖之は、うろたえた。狼狽しながら、

「とんでもありません、そんなこと、絶対ないです」

と、早口でまくし立てた。奥さんは、声を立てて笑っている。純情な青年を色恋沙汰でからかうほど楽しいことはない。

(それにしても)

と靖之は、泣きたくなる。

(どこまで噂は広まっているんだろう)

なにやら、村の衆に担がれて、衆人環視のもとで、智絵と恋に落ち、愛を語らい、このままゴールインしそうな感じである。

(おれと智絵ちゃんは、見せ物じゃないぞ)

と思ったが、すでに、きのう、河原で見つめあい、寄り添って村を見つめる姿を村の衆に見られている。昨夜のドライブも、まもなく村の衆に広まるだろう。もはや、手遅れかもしれない。

靖之は、車の中で寝る許可をもらい、あたふたと駐在所を出た。中に入って休みなさい、という奥さんを何とか煙に巻いて車に戻った。一平に掛けたバスタオルを顔までかぶせ、座席を後ろに倒し、身体を預けた。

村祭りの夜

目が覚めると、もう夕暮れていた。

一平は、まだ寝ていた。

靖之は、一平を起こすと神社へと車を走らせた。

暮れなずむ鎮守の森に上弦の月がかかっていた。

神社前の三叉路をいつもとは逆に右に折れた。歩くようなスピードで、鳥居から遠ざかっていく。

道路が森に沿ってカーブしている。靖之は、左にハンドルを切りながら車をゆっくりと走らせた。

森の中から人影が現れた。

友一と寛太だった。

車に駆け寄った二人は、無言のまま後ろのドアを開けた。

森の中に走り込む三人に、

「がんばれよ」

と、小さく声をかけた。三人が振り返った。靖之が微笑むと、友一が右手の親指を突きだし口元を引き締めた。

三人の姿が消えると智絵の家に向かった。

智絵の家からまず出てきたのは、良子と和美だった。

二人は、浴衣姿で車に乗り込んできた。

智絵は、普段着である。

靖之も手伝って、何度も家と車を往復し大量の荷物を車に積み込んだ。風呂敷包みに、大小の紙箱に木箱、通学の時に使うかばんまで積み込んだ。

荷物を積み終わると神社に向かった。

神社の鳥居を車でくぐった。

言祝神社は、どこまでが参道で、どこからが境内なのかよく分からない。鳥居をくぐると、参道が徐々に、かつ急速に広がっている。広まっていく参道の両側に夜店が六つ出ていた。

境内に入ると、敷石の列が手水舎の横を通ってまっすぐに延び神社が建っている。境内には神社と社務所しかないが、そのわりには結構広く、何も無い夜にここに来ると、二つの建物があまりの寂しさに泣き出しそうに見えるほどだった。

神社の敷地は、角の取れた長方形のような形だが中心線がずれていた。向かって正面に神社があるが、その右側の空間が左側に比べて狭い。神社の左側は、右側の広さの二倍くらいあるだろう。社務所は、その、狭い左側の敷地にあり、社務所の中に、いっきさんが寝泊まりする場所もあるのだが、外から見ている限り社務所といっきさんの家との区別はつかない。

社務所は、今宵は大忙しであった。

河童さんのお守りである。

お守りには

——河童大明神

と太々と書かれていた。

河童さんのお守りは、人気があった。呪いの伝説のせい、まわりの村や町からも買いに来る人がたくさんいた。もっとも、主な交通手段がバスしかなく、この村まで足を運ぶひとはさほど多くない。この村の知り合いやバスに乗って参拝に来る人に頼んで買ってきてもらうのである。

河童さんのお守りは、何にでも効能がある。

まずは、厄除けである。呪う力の持ち主は、呪いを払う力も持つであろう。

次は、水難である。河童は、川の主である。溺れかけたら助けてくれるに違いない。

水難だけではない。川の主なら、方々の地理にも詳しいだろう。よって、道中安全の効能もある。

また、川の主であれば、洪水を納める力を持つに違いないし、日照りの時には、川に水を流してくれるであろう。よって、農業の神でもある。

さらには、この村にとって河童は、村と村人の守り神であった。よって、家内安全である。

もうひとつ付け加えれば、健康と長寿の効能がある。河童は何百年も生き、そのうえ、あまり病気をしない。人間も、あやかりたいものである。

さらに、恋愛成就・夫婦円満・学業成就と並ぶ。いっきさんの付け足しである。

効能たっぷりのお守りではあるが、以前から売れていたわけではない。

売れ出したのは、いっきさんが、『河童大明神』とお守り袋に刻印してからである。いっきさんは、商売気を出したわけではなかったのだが、結果として、ブランドを作り出す商人になってしまった。お守りの売り上げに目を細めつつも、なにやら、後ろめたいのである。

靖之は、社務所と鎮守の森のあいだ —— 社務所の裏庭に車を入れると森の木立に沿って車を止めた。祭りのざわめきが遠くに聞こえていた。

社務所の十二畳の和室、二間つづきの引き戸を開け放った。ここは、村の寄り合いで使われるが、実質は、飲み食い騒ぐ場所ではある。

四人で車から荷物を降ろし、奥の部屋に運び込んだ。

智絵と良子、和美は、そのまま奥の部屋に消えた。すでに、いっきさんから、この部屋を使う許可は取ってあった。

靖之は、引き戸を戸袋にしまい込み、二つの和室を仕切っているふすまを外していく。

太鼓の音が聞こえてきた。

(始まったな)

最後の一枚を戸袋に力を込めて押し込むと神社へと向かった。もう、すっかり暗くなっていた。

神社の前に人集りができていた。

拝殿にも人がいた。

拝殿の隅っこで、男のひとが太鼓を叩いている。

「踊りが始まるんだよ」

と、寛太が言った。

三人とも、木立の奥の闇の中に身を潜めていた。

「何の踊り？」

と、一平が聞くと、寛太は、

「河童さんに捧げる踊り」

と答えた。一平は、驚いた。ばあちゃんが、じいちゃんの手は村で祭ってくれている、と聞いていたが、どうやら本当のことらしい。

「全然、おもしろくないぞ。ゴジラのほうがおもしろい」

と、友一が一平にささやいた。

拝殿では、いっきさんが祝詞を読み上げている。その後ろには、五人の男と三人の女が背中を見せて座っていた。

「何を言ってるの」

と、一平が尋ねた。

「さあ」と寛太が首をひねると、友一が、

「いつも、いっきさんは、むにゃむにゃ言ってて、よく分からない」

と教えてくれた。いっきさんのむにゃむにゃが終わると、拝殿に座っていた人が左右に分かれた。

「一平、あれだ」

と、友一が指さした。拝殿の真ん中が奥まっている。その、奥まった奥に、脚の長い机が置かれている。

「あの机の上にあるのが、じいちゃんの手だ」

そう、友一はいうが、遠く離れているうえに、いっきさんの身体が邪魔をしてよく分からない。

横笛の音が、流れ出した。

ぽんぽん、という鼓の音も聞こえてきた。

「笛はいいんだけどさあ。何で、鼓とか打つんだろう」

と、友一がいうと、

「音が間抜けだよ」

と、寛太が答えた。

一平は、鼓の音に聞き入っていた。鼓の音は、ひとつ鳴ったかと思うと、二つつづけて鳴る。緩急を計るのが難しい。

(そよ風の調子だ)

と思った。

拝殿では、二人の男が踊っている。

「左の、甲羅を背負っているのが河童さんだ」

マッチ棒ほどにしか見えないが、権平じいちゃんであった。両脚を交互に動かし、身体を右に左にねじりながら両手を上げては振り下ろしている。

「堤防を作ってるつもり」

と、友一が解説を加えると、寛太が、

「土を掘ってるつもり」

と、さらに詳細な解説を加えた。

一方の男は、ぎくしゃく回りながら河童の前に来ると、両手をそろえて上に上げ、肩の高さまで下ろすと手首を上下させる。

「あれは、河童に、休め、と言っているつもり」

と、寛太がいうと、友一が、

「長いよなあ」

と、うんざりして言った。

神社の前に集まった人混みからは、誰それは去年よりうまくなった、などという批評も聞こえていた。

「毎年やってて、よく飽きないよね」

寛太もうんざりしているらしい。とうとう、座り込んでしまった。

拝殿の河童が、手を掲げて、きょときょと遠くを見回している。どうやら、堤造りは終わったらしい。拝殿の庄左右衛門が河童の後ろから近づき、両手を河童の両肩に触れては大げさのけぞり、また、肩に触れる。拝殿のうえの庄左右衛門さんは、何度も同じことを繰り返した。

「あれはな」

と、友一が解説を加える。

「村の人たちが、堤を造ってくれた河童さんに感謝してるんだ」

一平は、首をひねった。村の人たちというが、踊っているのは二人だけだった。

「庄左右衛門さんとじいちゃんじゃないの？」

「いや、違う」

と答えたのは、寛太である。

「踊っているのは二人だけだけど、二人は河童と人間の代表なんだ」

友一が、さらに付け加えた。

「二人で、ぜんぶの河童と、ぜんぶの村人を表しているつもり」

何のかんのと言いながらも、友一も寛太も村の伝統芸能を理解しているらしい。

拝殿では、女三人が、河童と庄左右衛門に杯をわたし、酒を注ぐまねをしている。

「友ちゃん、やっと終わりだ」

と、座り込んでいた寛太が立ち上がって言った。寛太が立ち上がると今度は、友一が座り込

んだ。

「ここからが長い」

拝殿のうえでは、河童と庄左右衛門の男二人、酒を注いだ女三人が一緒になって舞っている。

「舞を舞うっていうけどさあ」

と友一は、小枝を口にくわえている。

「舞というよか、どう見ても盆踊りだよな」

「でもさ」

と、寛太が異議を唱えた。

「盆踊りはすぐ踊れるけど、河童さんのは練習しないと踊れない」

もう、二人とも木立に寝転がっている。

「踊れるよ。あんなもん」

「そうかなあ。一年中、練習しているよ」

「運動神経が鈍いんだ」

盆踊りも踊れない友一には、そもそも歌舞音曲に対する感受性が欠けていた。

拝殿からまた、いっきさんの声が聞こえてきた。

「終わった」

と、友一が飛び起きた。

「あー、長かった」

寛太も、のっそりと立ち上がった。

拝殿では、祝詞を読み終えたいっきさんが奥に入って何かごそごそやっている。

「一平、疲れたろう」

と友一が言ったが、一平は、感動していた。村の人たちの温かい心遣いが伝わってくるようだった。

「もう少しで、だれもいなくなるから」

そういう寛太の声は、疲れていた。

いっきさんを先頭に拝殿からひとが出ていった。

神社の前の人垣が崩れようとしたとき、靖之の声が響いた。

「いっきさん、舞を奉納された皆さん、見物された皆さん。お疲れさまでした。御礼に、これから、村の娘三人が踊りを披露します。出し物は」

靖之は、いったんそこで、ことばを切った。わざと切ったのではなく、一気に大声でしゃべったため息が切れただけである。しかし、肝心のところで息が切れたために聴衆に耳を澄ませる効果になった。

じっと耳を傾ける聴衆に向かって、靖之は吼えた。

「出し物は、小学校一年生の女の子が踊る、村の鎮守。ご存じでしょう。村の鎮守の神様の、という歌です」

ほうー、と群衆から声が上がった。だれかが、「そりゃあ、目出度いのお」と大声で言った。

「二つ目の出し物は、村の分校の、しっかり者の女の子が舞う、リンゴの歌。皆さんも踊りに合わせて一緒に歌ってください」

おお、という声が上がった。「まるで、都会のショーみたいじゃのお」という声が上がった。

「三つ目は、この村一番の器量良しの、十八歳の」

と言って、靖之は口ごもった。

(智絵ちゃんは、女の子じゃない)

と思ったが、もう、ここまできたら勢いで突っ走るしかない。

「十八歳の女の子が舞う、祇園小唄であります」

群衆が、どよめいた。

「先生、あれか。祇園小唄ちゅうのは、月はおぼろに、というやつか」

「そうです」

「おお、あれか。わしゃあ、だらりの帯よ、というところが好きじゃ」

群衆は口々に祇園小唄を口ずさみながら言いたいことを言い合っている。

「いやいや、二番がええ」

と、靖之は、口を入れる隙もない。にこにこしながら見守るしかなかった。

「なんの。極めつけは、燃えて身をやく大文字、じゃ」

と口ずさむように言うと、ええのお、と夢見るようにつぶやいた。

「舞うのはだれじゃ」

村の衆の目がいっせいに靖之に注がれた。

靖之は、たじろいだ。

舞手がろくでもないのなら許してはおかん、というような雰囲気である。

「舞手は」

というと、靖之はつばを飲み込んだ。できれば名を出したくなかった。

「智絵ちゃんです」

どよめきが、歓声に変わった。

「それは、見ずんばなるまい」

と、だれかが喚いた。

田舎もんは、がさつである。

「智絵ちゃんももう、十八じゃ。見るなら今のうちじゃぞ」

靖之は、智絵の名を出したことを後悔した。智絵が汚されたような気分である。

「最後に」

という靖之の声に、心なしか元気がない。

「みんなで、上を向いて歩こう、を歌います。皆さん、一緒に歌ってください」

みな、大喜びである。

神社から村人を引き離そうという靖之の計画は、みごとに成功した。

「では、みなさん、こちらへ」

というと靖之は、肩を落として歩き出した。

ひとの群れは、まだ口さがない。靖之の背後でしゃべり散らかしている。

「智絵ちゃんは近頃、急に色気が出てきたの」

「しっ、先生がおる」

「なんじゃ？」

「あれじゃ。智絵ちゃんは、先生のこれじゃ」

「ほっ、そうか！」

「おっ、みな、夜店はほっぽり出して見物か」

「十八の娘が踊る祇園小唄など二度は見れんからの」

靖之は、泣きたい思いである。

この計画を立てたのは、靖之であった。

昨夜、車の中で段取りを話し合った。

祭りの夜は、ひとが多い。多いうえに、あちらこちらに散らばっている。それらをひとつに集め、さらに神社から引き離す。その隙に、一平と友一が河童の手のミイラを取り戻す。

そういう段取りができあがった。

その、ひとを集め引き離す手段として靖之が考え出したのが、三人の女の子による舞の披露である。

「どう？」と、靖之は勢い込んだが智絵と良子は煮え切らない。舞など、舞ったことがなかった。喜んでいるのは和美だけである。

しかし、ほかに良い手だてを思いつかない。

やむを得ず、靖之の提案に同意した。

二人がうなずくと靖之は、演目選びに熱中した。

「和美ちゃんは、ちょうちょ、でどうだ」

和美は喜ぶと思ったが、いやがった。

和美は、

「保育園みたいで、やだ」

といった。この二日間で、和美は和美なりに何かが変わったのかもしれない。

靖之は、頭を絞った。絞ったあげく、「村の鎮守は？」というと和美は歌を知らなかった。歌を唄いながら解説をしてやると、和美は喜んで、

「それでいいよ」

といった。

(ちょうちと、村の鎮守は、どこが違うんだ)

と靖之は思ったが、和美についてはこれで一件落着である。

「良子ちゃんは」

と靖之は、さも、すばらしい思いつきのように言う。

「炭坑節がいい」

良子は、むくれた。まるで、良子には炭坑節が似合っている、というような言い方である。

——君のイメージは、炭坑節だ

といわれて喜ぶ女の子は、そうめったにはいないに違いない。「踊りやすいから」と靖之は言ったが、あとの祭りであった。

靖之はまた、頭を絞らなければならなくなった。

「りんごの歌はどうだ」というと、良子も納得した。赤いリンゴに唇を寄せて黙って空を見上げている女の子は優しそうで、自分にぴったりのような気がした。

「智絵ちゃんは」

靖之がちらりと智絵を見やった。

「祇園小唄がいい」

智絵は、驚いた。歌は知っていた。しかし、祇園小唄に合わせて踊るのは京都の舞妓さんである。智絵に舞妓の踊りなど真似できようはずがない。

「無理よ、そんなの」

そうだったが、靖之は納得しない。

「大丈夫。絶対できるって。踊りは、ぼくが教えるから」

智絵はまた、驚かざるをえない。

「踊れるの、靖之さんは、祇園小唄を」

「いや、踊れるわけじゃないけど見たことはある」

「どこで」

「京都で、大学生のとき」

京都の大学に入学した、その月 一一 立身出世した郷土の先輩が、後輩数人を祇園のお茶屋に連れて行ってくれた。

座敷に上がると、まもなく数人の舞妓さんが現れた。

ひとりの舞妓さんが靖之の横にやってきた。

舞妓さんの色香が鼻につ一んときて、頭がくらくらしそうになった。

舞妓さんが靖之に酒を注ぎながら、

——にいさんも鹿児島のお生まれですか

と、いったような気がした。靖之は、

「はい。そうであります」

と応えた。ただ言っただけのつもりだったが襖を震わせるほど大きな声だった。

杯を飲み干す靖之に、また、舞妓さんが何か言った。当たり前ではあるが舞妓さんは、流暢な京都弁である。靖之は、鹿児島山奥からぽっと出てきたばかりの田舎もんであった。引け目がある。そのうえ、めまいがしそうなほど緊張していた。舞妓さんのことばがよく聞き取れなかった。

「はっ」と鋭く言いながら靖之は、きっと首をひねった。背筋が、ぴんと伸びている。

「何か、おっしゃいましたか」

舞妓さんは、くすっと笑うと、紅をさした柔らかそうな唇を開いた。

——お国には、良いお人がいてはりますのやろ

といったように聞こえた。良いお人など、いるはずもなかったが口がかってに動いていた。

「はい」

言い終わると、杯を飲み干した。もう、自分が自分でなくなったような気持ちである。

舞妓さんが杯に酒を注ぎながら何か言った。何を言っているのか、依然として、よく分からない。しかし、聞き返すのはやめた。また、笑われそうだった。最後のほうだけが聞き取れた。

——よろしゅう、おすなあ

と、いったように聞こえた。

「ありがとうございます」

と靖之は、深々と頭を下げた。

(勘弁してくれ)

靖之は、心中悲鳴を上げている。横に座っている舞妓さんがとてつもなく息苦しい。色香に酔うというより酔いすぎて吐いているような苦しさである。

それでも、靖之は耐えた。背筋を伸ばし、正座を崩さず、左手は腿に当て、右肘をぴんと横に張って杯を飲み干しつづけた。

靖之は少し、酒に酔ったのかもしれない。

舞妓さんが、

——兄さんは、お酒が、お強うおすなあ

と、あきれたようにいうと、

「おいは、薩摩隼人ごわす」

と、切り返した。

その時、襖が開いた。

襖の向こうに、舞妓さんが三人、立っていた。

三人の舞妓さんが流れるように舞いはじめた。
舞を乗せる音曲は、祇園小唄だった。

その後、靖之は、一度も、花街に足を踏み入れたことはない。行こうにも貧乏学生の分際では行けようはずもない。もっとも、心優しい先輩が誘ってくれたことはある。しかし、靖之は行かなかった。今の自分が立ち入ってはならない世界のような気がした。

それでも、あの、三人の舞子が艶やかに舞う姿は、鮮やかに思い出せた。振りの一つひとつを思い出せるわけではなかったが面影は残っている。

「だから、智絵ちゃん」

と、靖之はいった。

「ここはこんな具合というくらいのこと可言える」

「ふーん」

と、智絵はそっけない。苦学していると思っていたが、先輩に連れられて一度だけとはいえ、学生の分際で、しかも未成年のくせして、花街で舞妓と遊ぶなどもってのほかである。

「舞妓さん、きれいだった？」

智絵は、靖之の顔を思いっきり下からのぞき込んだ。思わず、靖之は、

「いや」

と、首を振った。智絵の笑い顔が不気味だった。

「たいしたことはなかった」

という裏で、靖之の杯に酒を注いでくれた舞妓さんの、白く細い指がまぶたに浮かんだ。

「全体のイメージは残っているから、それらしい踊りにはなるよ」

「自分でやるからいい」

と、いってから、しまった、と思った。智絵は、祇園小唄を舞うことを承知してしまっていた。

「よし、決まり」

と、靖之が嬉しそうにしている。子供たちも、後ろで声を上げて拍手までしていた。もう、後戻りはできそうにない。

智絵はまず、良子と和美の振り付けを考えた。

村の鎮守もリンゴの歌も、それほど難しくはなかった。

最後に残ったのは祇園小唄である。

靖之の車で社務所に荷物を運び込んでからも、まだ、智絵は悩んでいた。

(色気を振りまけばいいんだから)

と、思って、姿見に向かって色っぽく振る舞ってみた。が、いっこうに色気が出ない。そのうち、鏡に映る自分がばかみたいに思えてきた。

(一度でも舞妓さんの踊りを見てたらなあ)

と思ったが、靖之の力を借りる気にはならない。靖之の後ろに舞妓の影がちらついているような気がする。

智絵は、途方にくれた。智絵の踊りを見に、ひとがやってくる。ひとが多かろうが少なかろうが、それは問題ではない。人前で踊ることが問題であった。

(どうしよう)

不安でいっぱい脳裏に社務所の裏庭を埋め尽くした見物人が浮かぶ。無数の目が、踊りだそうと立ち上がる智絵を固唾をのんで見つめていた。

(だいたい、靖之さんは)

と、智絵は思った。

(わたしを見せ物にして)

平気なのか――考えてみれば靖之は、躊躇する智絵に強引に祇園小唄を押しつけてきた。良子や和美のときとは、大違いである。

(それほど)

舞妓が好きなのか――とでも言ってやりたい気分ではある。八つ当たりであったが、八つ当たりでもしなければ腹の虫が治まらない。

(自分は、のうのうとして)

今ごろ靖之は、群衆に交じって河童さんへの奉納踊りでも見物しているに違いない。

(わたしを、ほっぽり出して)

と思ったが、これは逆うらみである。靖之の協力を断ったのは智絵自身であった。

(そんなに、わたしを見せ物にしたいのなら)

智絵の八つ当たりは、靖之めがけて飛んでいく。

(色気を振りまいてやる)

花も恥じらう十八歳の乙女の色気を、靖之などは無視して群衆にたっぷりと振りまいてやるのである。

(靖之さんは、どんな顔をするかな)

なにやら、度胸が据わってきた。

姿見の前に座ると、にっこり頬笑んだ。

(よし、いける)

智絵は、ひと声気合いを入れると鏡に向かって口紅を引いた。

乙女の舞

姿見に向かって仕草を繰り返す智絵に和美が駆け寄ってきた。

「来たよ」

智絵の耳にも群衆のざわめきは聞こえている。

智絵は、三味線を弾いている良子に声をかけた。

良子は、三味線が弾けるのである。良子は、物心がつく前から三味線を弾いて育った。おじいさんが小唄好きで、自然と良子も三味線を弾くようになっていた。その三味線で、良子は、祇園小唄の伴奏をすることになっている。

歌は唄わない。良子は、三味線を弾くだけで手一杯である。智絵は、踊るだけでも手に余る。祇園小唄の歌い手は、靖之であった。さすがに靖之はいやがったが、女三人で、いやがる靖之を押し切った。

——何もしないんだから歌くらい唄いなさいよ

という、智絵のひと言で押し切られた。

「行くよ」

智絵の呼ぶ声に、良子が三味線を引く手を止めて顔を上げた。

智絵の顔が引きつっていた。

廊下を歩き襖の前に来ると、良子と和美が左右に分かれ襖に手をかけた。

襖の向こうから靖之の声が聞こえてくる。

「小さいお子さんをお連れの方は、こちらの座敷にお入りください。お年寄りや、女性の方もどうぞ」

靖之がそう言い終わると、座敷にひとがわらわらと駆け上ってきた。

座敷の群衆の一番前には、あの、救出劇の主人公の、恵とお母さんが座っていて、恵が、靖之に向かって手を振っていた。

「では」と言う靖之は、ざわめく人々を見渡した。

「三人娘の登場です」

ざわついていた見物人の群れがぴたりと静まった。

襖が、静かに開いていく。

庭に立っている者はあごを突きだし、座敷に座っている者は身体を前のめりにして開いていく襖に目をこらしていた。

「おー」と、一斉にざわめきが起こった。

智絵が三つ指をついて顔を伏せていた。

智絵の後ろに、襖を開き終えた良子と和美が現れた。

二人が三つ指をついて顔を伏せると靖之の声が朗々と響き渡った。

「和美ちゃん、良子ちゃん、智絵ちゃん、どうぞ」

智絵が、すうーと立ち上がり顔を上げた。

「おお」と群衆がどよめく。

菊水文様の振り袖が艶やかに智絵を彩っていた。

智絵が前に進み出た。

もはや村の衆は、息をするのさえ忘れて智絵に見入っている。

見入っているのは靖之も同じだった。

頬に紅をさし、薄紅の口紅を引いた智絵は、靖之には目もくれずに、靖之の前を通り過ぎた。ほっそりした横顔を伏し目がちに長いまつげが震えていた。

(きれいだ)

と心から思ったが、ばかなことに、舞妓さんの横顔と比べていた。

(智絵ちゃんのほうが断然きれいだ)

靖之の脳裏にはまだ、酒を注いでくれた舞妓の顔が浮かんでいる。

(どんな舞妓さんより智絵ちゃんのほうがきれいだ)

靖之にとっては最上級の誉めことばである。智絵もきっと、理解してくれるだろう。

智絵を先頭に扇形に広がった三人娘が座敷の中に進み出た。

長い黒髪を後ろでまとめ瑠璃色の珊瑚の簪をさした智絵が、鴨居から畳一畳手前で立ち止まり、三つ指をついて智絵が口上を述べはじめた。

「皆様、本日は、お疲れさまでございました。御礼に、わたくしどもの踊りをご披露させていただきたいと思えます」

鞠を転がすような声が、静まりかえった人の群れの中を流れていく。

靖之は、あっけにとられていた。

(あんな声は、聞いたことがない)

それに、あの落ち着きようはどうだろう。

(すごいな)

女は化け物だ――とは、思わない。そういうことを思うほど、靖之はまだ、人生にくたびれてはいなかった。ただひたすら、智絵の度胸のよさに感心した。

庭の暗がりの中から「智絵ちゃんは、きれいじゃのお」という声が聞こえてきた。

(おまえなんぞが)

と靖之は、教師らしからぬ言葉遣いでどやしつけた。

(智絵ちゃんなどと気安く呼ぶんじゃねえ)

智絵の口上は、続いている。

「では、まず最初に」

といいながら、顔を上げた。視界の隅に違和感を感じた。

「和美ちゃんの踊りをご覧ください」

そういいながら、視界の端っこの人影をとらえた。

友一と寛太が庭の人垣の最前列にしゃがんでいた。

思わず智絵は、息をのんだ。計画では、今ごろ二人は一平と共に、だれもいなくなった神社に

侵入しているはずであった。

(何してんのよ、あなた達)

と思ったが、叫ぶわけにはいかない。靖之に知らせたかったが、この状況では振り向くわけにもいかない。靖之が動く気配もない。二人には気づいていないのだろう。

智絵は、二人を睨みつけてやりたかったが、ここで、そんなことをするわけにもいかない。八方ふさがりである。不自然にならないように振る舞いながら智絵が二人を追い払うしかないであろう。

「その前に」

というと、智絵は立ち上がり、胸元で両手を合わせ、

「この振り袖、今宵のために母からいただきました。母のだいじな振り袖、わたくしに」

そう言いながら、縁側に降りると、

「似合っておりますでしょうか」

と野次馬どもに頬笑みかけると、右手を肩のあたりにあて、左手で長い袖を押しえながら顔をわずかに傾けてくるりと回った。

おお、と村の衆は、ざわめくばかりである。「智絵ちゃんのお母さんより、ずっときれいじゃ」という声が出たと思うと、「比べものにならん」とだれかが言う。この群衆の中に智絵の母も混じっているはずであった。

回り終えた智絵は、友一と寛太を身体の正面でとらえている。足を揃えるときに、かかとで縁をどんと踏んだ。それでも二人は、しゃがみ込んだまま智絵を見上げている。目がうつろだった。

(だめだ、こりゃ)

こうなれば、二人の目の前まで行って目を覚まさせるしかないであろう。

智絵は、胸元から扇を取り出すと振り袖の袂を左手で押しえつつ、しなやかに腕を振って扇を空に向けた。人の群れに笑みを投げかけている。

「月は朧」

智絵も、自分が何を言おうとしているのか分からない。分からないまま、ことばを紡ぎ、両手を胸に合わせ、肩をすぼめるように両脚をせわしなく動かし、縁側を歩いていく。

「朧は夢、夢は幻」

座敷の上がり口には踏み石があり、そのうえに草履が置かれてあった。

踏み石の前までくると智絵は、庭の群衆に向き直った。

頬笑んでいた。

「幻なれど、今宵は祭り」

と智絵は、夜空を見上げながら唄うように言う。

「祭りの灯りは幽玄にて」

といいながら、草履を履いた。

「ここに集いし人々を」

智絵は、人の群れに背を向けるように空を見上げながら歩いていく。視界には、しっかりと友

一と寛太をとらえていた。

「一場の宴にいざないまする」

とうとう、友一と寛太を膝元にとらえた。智絵は、人の群れから二人を隠すように身体を入れた。横目で、友一をにらんだ。が、友一は、ぼけーとして智絵を見上げている。腑抜けになっているらしい。智絵の怒った顔も、それはそれで魅力的ではある。

「あれ、あの月のように」

というと、村の衆に顔を向け、扇を月に向けて突きだした。群衆の顔が月を振り仰いだ。月が、社務所の庭をのぞくように顔を出していた。

智絵は、すばやく背を向けると、扇で友一の頭をひっぱたいた。

友一が、あっという顔をして目を見開いた。やっと正気に戻ったらしい。

——ばか

と、声を出さずに言った。

「みなさま」

と、村の衆に背を向けたまま智絵は、芝居をつづけている。

振り向くと、両手を首もとであわせ、扇をはらりと広げた。薄墨色の地に月と雲を黄金色であしらった扇が智絵の顔を隠した。顔を隠したまま智絵は、扇の向こうから群衆に語りかけた。

「わたくしどもの踊りが、いつまでも皆様方の心に残りますように」

そう言うと、扇を傾けて顔を出し、頬笑みかけると、くるりと身体を翻し、月に向かって扇をかざした。いよいよ舞妓である。

忍者のごとく

智絵に頭を叩かれて目を覚ました友一は、寛太とともに木立の中に飛び込んだ。

そこに、一平が待っていた。最初、計画では、友一だけが踊りの始まりを確かめるために社務所の裏庭に行くことになっていた。何かの都合で踊りが中止になったりすれば計画そのものが成り立たない。踊りの始まりを確かめる必要があった。

ところが、夜店の人達まで踊りを見に行ってしまう、お守り受け所まで閉まってしまう、人っ子ひとりいなくなってしまった。

しめた、とは思わなかった。あまりにうまくいきすぎたことに、逆に、友一は、何とはない不安に駆られ三人一緒に行動することにした。その方が安全なように思われた。

三人一緒に踊りの始まりを確認するため木立の中を走った。

参道を渡り、木立の中を走ると社務所の裏庭に人垣が見えた。

友一はそこで立ち止まり、一平に、

「ここで待ってろ。すぐ戻る」

というと、寛太と二人で駈けた。

二人は、木立の中に身を潜めて座敷の中をうかがったが、見えるのは見物人の背中ばかりである。友一は、

「前に行こう」

というと、人垣の端の中ほどに陣取った。座敷を斜めから見ることになったが、引き戸はすべて開けてある。座敷の奥の襖まで見えた。

襖が開いて、智絵が出てきた。

出てきたときにはもう正体を奪われていた。

二人とも口をあぐり開けて突っ立っていた。

(お姫様だ)

と友一は思ったが、智絵は打ち掛けを着ているわけではなく、ただの振り袖姿である。

それから先は――記憶がない――

智絵から頭を叩かれて、友一は、いつの間にか最前列まで出ていることに気づいた。

寛太の袖を引っ張ると腰をかがめて転がるように人垣を離れた。木立の中に飛び込むと、一平がいた。

友一を先頭に参道を横切り、神社に一番近い木立の中からあたりをうかがった。

「だれもいないね」

と、寛太がささやいた。

社務所の裏側からざわめきが聞こえてくる。が、神社のまわりは静まりかえっていた。

「寛太」

と、友一は振り返った。寛太はうなずくと腰をかがめて木立を抜け出した。木立を抜けたところでいったん止まると、あたりを慎重にうかがい背を伸ばし、

――今、神社にきたばかりです

とでもいうように歩き出した。

寛太は、見張りである。神社の前を歩きながら神社に近づく人影があれば、すぐに友一に知らせることになっていた。

寛太の姿が小さくなっていく。社務所と神社のあいだを歩きながら寛太は、人影がないか目を走らせていた。寛太の姿が神社に隠れた。神社を一周して安全を確認するのである。

寛太が神社の後ろから姿を現したとき、参道から話し声が聞こえてきた。参拝者は、親子連れだった。子供が犬を連れていた。

(犬はあぶない)

そう思った友一は、一平を連れて神社の後ろに回り込んだ。木立が二人の動きに合わせて小さく音を立てた。

移動の途中、見回る寛太に出会ったが寛太は気がつかない。友一は、短く口笛を吹いた。寛太は、木立の中を見ると親指を突きだした。了解したらしい。

友一と一平は、神社の後方の木立に身を潜ませた。もう、神社の正面は見えない。

友一は、ここに留まるべきか迷った。が、神社の正面に近いところに戻れば、参拝人がやってきたとき、用心のために、また移動しなければならないかもしれない。

(それより)

と、友一は思った。ここに留まって寛太の合図を待ち、神社の床下に飛び込み、床下を這って正面に出る。正面に出ようとしたときに参拝人がやってきたら奥に移動して隠れればいい。奥で待っていれば、寛太が参拝人を社務所の裏庭に連れていくだろう。それに、寛太の声も、その場所であれば聞こえるに違いない。

「一平、ここで待つ」

と、友一が一平の耳元で言った。

一平は、うなずいた。一平の大きな目が月の光に光っていた。寛太の声が聞こえた。二人に聞こえるように、わざと大きな声でしゃべっている。どうやら、さっきの親子連れを社務所の裏庭に連れていったらしい。

友一は、寛太の合図を待った。

が、合図がこない。

(まだか、寛太。踊りが終わるぞ)

と思ったが、神社の正面は静まりかえっている。

友一は、待った。ただ待つ時間は、長い。今にも踊りが終わって、社務所の裏側からひとが押し寄せてくるような気がした。

友一が隠れている場所とは反対側の、神社の裏手から足音が聞こえた。

寛太だった。

寛太は、友一と一平の前を通り過ぎるとき頭の後ろで両手を組んだ。「待て」の合図だった。寛太がまた見えなくなった。神社の正面を見回っているのだろう。

また、寛太の足音が聞こえた。走っていた。友一が潜んでいる木立の近くまで来ると、短い口笛を吹き、右手をぐるぐる回した。行け、の合図だ。

「行くぞ、一平」

と振り返ると、木立を飛び出した。一平も飛び出してきた。

「あそこ」

と友一は、神社の床下を指さした。拝殿をぐるりと取り巻いている廻廊の下である。一平が、床下に駆け込んだ。あいかわらず遅い。木立のそばで神社を見張りながら一平を見守っている友一には、急ぎ足で歩いているようにしか見えない。

一平の姿が床下に隠れた。

友一も床下に飛び込んだ。

奥に移動して次の合図を待った。

ずいぶん待ったが合図がこない。合図どころか、寛太の足音もしなかった。

友一は、焦れた。床下の端に移動し、首を出すと、神社の正面を見つめた。が、見つめる先はひっそりとしている。

「一平」

と、呼んだ。叫んで、耳元の、荒い一平の息づかいに驚いて振り返った。

一平は、緊張していた。最初は、さほどでもなかった。というより、床下に駆け込むまでは余裕すらあった。

(神社の中に行くだけでいい)

それは、今まで一平が体験したことに比べれば取るに足りないことだった。しかし、床下に入ったとたん、息苦しくなった。神社の床が空ごと落ちてくるような息苦しさだった。この村へ来るときの出来事、そして、この村での出来事はすべて、今までの一平の世界の延長線上にあった。しかし、神社の床下は違っていた。ここは、すさまじく重苦しかった。まるで一平を、全く違う世界に引きずり込もうとするかのように息苦しかった。

(瀬戸の渦に)

一平は、あの、冒険家の河童が言っていた、関門海峡の話を思い出していた。

(飲み込まれるときは、こんな感じかもしれない)

「一平、行こう」

と、友一が言った。一平は、うなずいた。神社には、今夜初めて来たばかりである。友一を信頼して付いていく――結果がどうなろうとも。

友一と一平は、聞き耳を澄ませながら神社の縁の下を移動していく。

中ほどを過ぎたときだった。

突然、うなり声がした。

振り返ると、犬が歯を剥きだして一平を睨みつけていた。さっきの親子連れが連れていた犬だった。

「向こうへ行け」

友一は、そっくりながら、手で犬を追い払おうとした。が、犬は、一平を睨みつけながらうなりつづけている。柴犬の大人だった。子犬を追い払うようにはいかない。

一平は、友一の背中に隠れていた。一平には勇気があるが歯や牙をむきだして襲ってくる連中は、恐い。狂気に立ち向かうのは狂気である。勇気とはまた別物であろう。

友一は、「向こうに行け」と言いながら石をぶつけた。

石を喰らった犬は、尻尾を向けて逃げだした。が、すぐに、頭を向けた。また、うなりながら近づいてくる。友一はまた、石を投げつけた。一平も投げた。犬は、石があたると背中を見せるが、またこちらを向いてうなりながら近づいてくる。

(切りがない)

友一は、犬を追い払いながら思った。犬は、一平に執着している。一平がいる限り、どこまでもついてくるに違いない。

(殴れば逃げていくんだけど)

と友一は思ったが、そんなことをすれば、吠えたて鳴き喚くかもしれない。犬がけたたましく騒げば、ひとがやって来るかもしれない、そうなれば、河童の手を取り戻せないどころか、一平も見つかってしまうかもしれない。

(でも、逃げだすわけにもいかない)

背中を見せれば犬は、一平に飛びかかってくるに違いない。

(今のうちに追い払うしかない)

そのうち、うなり声に吠え声が混じり、やがては、激しく吠えたててくるだろう。

かといって、この犬を追い払う名案もなかった。

手元の小石がとうとう、なくなった。

友一は、土をつかんで投げた。が、転がりさんのときとは違い、うまくいかない。河原の土と違い、床下の土は固く、ひとつかみで土をつかむことができない。指先で土をかき集め、指先で投げつけるだけでは犬には効果がなさそうだった。

犬が、床下をのぞかんばかりに近寄ってきた。

友一は、一平を背中に隠したまま後ずさった。

犬が、吠えはじめた。

(奥に逃げ込もうか。外に出て、追い払おうか)

迷ったが、奥に逃げ込んでも状況は変わらない。

(床下から出て追い払おう)

危険だが、それしかない、と思った。

「一平」

と、言おうとしたときだった。

犬が急に、きゅーんと悲しそうに鳴いた。

犬の横に、二本の足が立っていた。

一瞬、寛太、と叫ぼうとしてつばを飲み込んだ。

大人の足だった。

足の主の手が犬の首根っこをつかんでいた。

犬がおとなしくなると、足がしゃがみ込んだ。床下をのぞき込む顔が現れた。顔は現れたが、月の光は頭の後ろから差していて、表情は分からない。

真っ暗な顔は、息を凝らして床下をのぞき込んでいる。

友一と一平は、床下にうつぶせになっていた。へたに動けば見つかるだけだろう。

友一の心臓が早鐘を鳴らすように鳴っている。心臓の音で気づかれそうなくらい激しく脈打っていた。

「やっぱり、おまえらか」

友一は、あっと顔を上げた。

転がりさんの声だった。

「出てこい」

と、転がりさんがいった。

友一も一平も、ぴくりとも動かない。靖之が、転がりさんは警察に捕まっているから安心していい、といていたがぬか喜びだったらしい。

「何もせんから出てこい」

それでも二人は動かない。

「ずうっと、そうやっているつもりか」

友一の肩がわずかに動いた。

「何もせんといっておるじゃろう。出てこい」

友一が、ようやく身体を持ち上げた。一平の肩に手を回し、身体を起こさせた。二人とも身体を起こしたが、まだ動かない。じっと転がりさんを見つめている。

「まあな」

と転がりさんは、うち解けた口調でいった。

「昨日の今日じゃからな。用心するのも分かるというもんじゃ。何をやっているのか知らんが、

もう、その河童はあきらめた。駐在さんに、これ以上、睨まれたらかなわんからのお」

それでも友一は、安心するわけにはいかない。転がりさんがいうように、昨日の今日である。転がりさんを信じろ、というほうが無理であった。

「用心するのは分かるがのお」

転がりさんは苦笑している。

「そこに、そのままいても仕方あるまい。わしが犬を放せばもっと困るじゃろう。何もせん。たまには、わしを信用せい」

確かに、転がりさんの言うとおりではある。このまま床下に隠れていてもどうにもならない。——犬を連れてどこかに行って

といたかったが、転がりさんが怒って犬を放してしまえば、それも困る。

友一が動いた。一平を背後に隠している。

転がりさんに近づくと、友一の肩越しに、

「おう、河童。久しぶりじゃのう」

と、転がりさんはのんきに、

「おまえのおかげで、大変な目にあったいわい」

というと、含み笑った。転がりさんの含み笑いには毒がある。

一平は、友一の肩にすがりつくように両手をかけている。頭まで友一と重なり、片目だけがのぞいているような感じであった。

「河童の国から出てきたのか」

一平が、うなずいた。

「そうか」

というと転がりさんは、あぐらをかいた。

「大変だったか」

また、一平がうなずいた。

「で、また帰るのか」

一平は、うなずくばかりである。

「そうか」

というと転がりさんは、じっと一平の目を見つめた。

一平も、目を伏せもせずに見つめ返した。

「行け。何をやっておるのか知らんが、急いでおるんじゃろう。わしが犬を押しえておいてやる。行け」

そういうと、転がりさんは、ポケットからたばこを取り出した。ここで、一服するつもりらしい。

「転がりさん」

と、友一が震える声で言った。どう対処していいのか、分からなかった。

転がりさんは、

「昨日のことは気にするな」

と偉そうにいうとマッチをすった。マッチの明かりが三人の顔を照らした。

「早く行け」

友一は、一平を振り返ると腰をかがめて床下を歩き出した。

一平も続いた。二、三歩歩いて、転がりさんを振り返った。転がりさんが、夜空に向かって盛大にたばこの煙を噴き上げていた。

一平が友一のあとを追おうとしたとき、転がりさんの声がした。

「河童」

一平は、足を止めた。が、振り向かない。

「無事に帰れよ」

一平が、振り返った。

転がりさんは、犬を脚のあいだに抱えて一平に目を向けていた。

一平は、転がりさんに頭を下げると友一を追った。

転がりさんの目が床下の暗がりにも消えていく一平を追い続けている。

一平の姿が見えなくなると、犬の首筋を握ったまま寝転がった。

ふうー、とたばこの煙を吐き出した。

(達者で暮らせ、河童。そのうち、わしが河童の国に行って、一匹残らず引っ捕らえてくれる。

一匹、いくらで売れるかのお。経費の十倍はもらわんと引き合わん。しかし)

と、肝心なことに思い当たった。

(ひとりでは無理じゃ)

先日、胸くそ悪い思いをさせられた社長の顔が目に浮かんだ。

(あれに話してみるか)

転がりさんは、懲りない人でもあった。

じいちゃんの手

友一と一平は、神社の正面階段まで来た。

友一が床下から顔をのぞかせてあたりをうかがった。祭りの提灯の明かりがまぶしかった。が、明かりのおかげでまわりがよく見える。だれもいなかった。

寛太は――と、姿を探したが見つからなかった。参拝人を社務所裏に連れて行っているのかもしれない。社務所裏からは、人のどよめきが聞こえている。

(行こう)

と、友一は思った。床下に潜り込んでからずいぶん時間が経っているはずであった。いつ踊りが終わるか、気が気ではない。

「一平、中に入るぞ」

一平は、うなずいた。

友一は、床下から出るとあたりを見渡した。やはり、だれもいない。

「一平、来い」

友一は、床下から出てくる一平を見守りながら神社から少し離れた。一平が神社の中に駆け込むまで見張っているつもりだった。

友一は、階段を指さした。

「そこをのぼって中に隠れろ」

あたりは、しんとしている。声が、鎮守の森に吸い込まれるように遠くまで響いた。

一平が階段に向かって走った。

友一は、まわりを警戒しながら一平を守るように早足で動いていく。

一平が階段を上り出すと階段を背にして立った。顔が、右に左にと、すばやく動いている。

「友ちゃん」

と、頭のうえから一平の声がし、友一は、靴を脱いだ。神社に土足で上がるわけにはいかない。裸足になると階段を駆け上り拝殿に飛び込んだ。

拝殿は、がらんとしていた。電球が二個、天井からぶら下がり、拝殿の隅々まで照らしていた。

。

拝殿の真ん中が本殿へと続いている。そこに、河童の手のミイラがあるはずであった。

友一は、先に立って一平を本殿の入り口へと導いていく。

本殿の入り口に立った。

本殿の扉は閉まっていた。扉の向こうに、神様が座っていたという丸太があるのであろう。

「一平」

と友一は、呼びかけた。

「あれだ」

扉の前に、いかにも頑丈そうな脚長の机が置かれている。

その机の上に、白い布が盛りあがっていた。布の下に桐の箱がある。その箱の中に、河童の手は眠っているはずであった。

「行け、一平」

と、友一がいった。友一は、ここで見張りをしているつもりだった。

「早く、行け」

と、せき立てた。が、一平は動かない。

「どうした」

と友一は、箱を見つめている一平に言った。

一平は、返事もせずに箱を見つめている。

「早くしないと、ひとが来るぞ」

社務所の裏庭からは何も聞こえてこない。まだ、踊りが続いているのだろう。しかし、急がないと、いつ終わるか分からない。もう時間は残されていないはずだった。

「友ちゃん」

と、一平がいった。すがりつくような声だった。

「どうした」

友一は、いぶかしげに首を傾けている。一平のようすが変だった。情けなさそうな目をしていた。

一平が友一を見ながら首を振った。

友一には、その意味が分からない。

ん、と首をかしげた。

「だめだ」

と、一平はいった。顔も声も、情けなさそうだった。

「だめって？」

と、友一は聞いた。一平の言っている意味がよく分からない。

「取れない」

と、一平はいった。

ああ、と友一は思った。一平は、人間の村に、生まれて初めてやってきたのである。どうしたらいいのか、分からないでいるに違いない。

「布をとれば箱がある。箱を開ければ、中にじいちゃんの手が」

といいかけて、友一は眉を寄せた。

一平が、首を振っていた。

「そうじゃない」

と一平は、箱を見ながら言った。

友一は、一平の顔を見つめながら一平が口を開くのを待った。

「取ったらだめだと思う」

と、一平がぼつりと言った。

「おまえ、何をいってるんだ」

友一の声が大きい。

「ここまできて、なに考えてんだよ」

それでも、一平は黙っている

「そこに、じいちゃんの手があるんだよ。おまえ、取り戻しに来たんだろう」

一平が、うなずいた。

「だったら、取れよ」

友一は、喚いていた。社殿に、友一の声がこだましていた。

一平は、視線を友一に向けるといった。

「盗むのは、だめだと思う」

友一は、あきれた。盗むもなにも、河童の手は、人間が斬り落としたのである。泣いて助けを乞う河童に斬りつけ、無惨にも手首を落とし、あたかも、路傍に転がっていた石ころでも拾うように持ち帰ったのである。それを、かつてに、宝物にした。河童が、返せ、といったら返すのが筋というものであろう。

「一平のじいちゃんの手だろう」

と、友一は吼えた。友一が、一平の立場だったら、やはり取り返すに違いない。

しかし、一平は、うなずかなかった。首を振りながら、「だめ」という。一平の声も、顔も、態度も情けなさそうだった。

「だったら」

と友一は、一平に一步近づいた。

「おれが取ってやる」

一平はたぶん、神社に初めて入って気後れしているのに違いない。どう考えてみても、河童の手は、河童のものである。

友一は、河童の手の入った箱を覆っている布に手をかけた。

「友ちゃん」

といいながら一平が、二、三步前に進み出た。友一は、白布をはぎ取ると桐の箱の蓋に手をかけた。

蓋を持つ手に力を入れた。

が、蓋は、開かなかった。

箱を見ながら、友一が呆然として言った。

「鍵がかかっている」

一平が、ほっと息を吐きながら肩の力を抜いた。友一はまだあきらめきれず、鍵をがちゃがちゃいわせながら箱を開けようとしている。

—— その時だった。

「開きはせんよ」

という声がした。

いっきさんの声だった。

振り向くと、いっきさんとお梅さん、それに寛太が本殿の入り口に立っていた。

いっきさんが不審を持ったのは、三人娘の舞を見ようと社務所の裏庭にいたときだった。

いっきさんは、河童さんへの奉納踊りが終わると、着替えをし、裏庭に回った。三人娘の舞を見るためもあったが、お梅さんを探すためでもある。

いっきさんがお梅さんを探すのには訳があった。

駐在さんが、昼過ぎ、神社にやってきて昨夜のことを話したのである。

「子河童が乗っておりましたのじゃ」

と、駐在さんが言ったが、いっきさんは驚かない。すでに、お梅さんが河童を見ている。子供のころ、河童を見ていたいっきさんにとっては、河童がいるのは不思議なことではない。

ただ、子供たちだけでなく、靖之や智絵まで車に乗っていたというのが気にはなった。が、子供たちが無用に騒ぎたてるのを抑えるために靖之と智絵と一緒にいたのだとすれば説明はつく。

いっきさんやお梅さんの子供のころは、河童たちがいるのは当然のことだった。しかし、それから、時は流れた。河童が住んでいたことを知っていたひとは少なくなり、まだ生きているひとも、かつてこの村に河童が住んでいたことを忘れてしまったのか、河童のことは口にもしなくなっていた。昔のように、河童が出た、と騒いでも「何をいまさら」と笑われてしまう村ではなくなっていた。

(先生も智絵ちゃんも、それを考えて子供たちと一緒にいるのじゃろう)

そう、いっきさんは考えて、気にもかけなかった。

ただ、お梅さんには話しておかなければならない。お梅さんは、この村に河童が戻ってきたことをすでに知っている。お梅さんには駐在さんの話を耳に入れておいたほうがいだろう。

祭りの日、いっきさんは忙しい。

河童さんへの奉納踊りが終わるまではお梅さんには会えずじまいだった。

いっきさんは、社務所の裏庭で、人垣に紛れて立っているお梅さんを見つけた。

お梅さんは、横に広がる人垣の真ん中あたりにいた。三列目に立って、三人娘の舞が始まるのを待っていた。

いっきさんは、お梅さんを手招きすると縁側に近づいた。縁に座っていた人たちが、いっきさんのために縁を捨てて半分は座敷に、もう半分は人垣の中に移動し、だれもいなくなった。神主特権である。

いっきさんは、縁側の端っこに腰かけると舞が始まるのを待ちながら、お梅さんに駐在さんの話を繰り返した。

「ほお」とお梅さんは、さすがに驚いたが、それ以上は、何も言わなかった。

三人娘が登場すると、いっきさんもお梅さんも智絵に見とれた。

「さすがに、娘盛りじゃのう」

といっきさんは、感嘆した。

「もはや、嫁にいてもよからうて」

といっきさんがいうと、お梅さんは、

「十八は早すぎるわい。二十二、三がよい」

という。

「それも、そうじゃな」

などと、たわいもない話をしているうちに智絵の口上が始まった。

「ほうほう」

といっきさんは、智絵の色気に当てられっぱなしになった。

そのうち智絵は、舞うように草履を履いて歩きだした。

いっきさんは、智絵が歩いていく方に目をやった。そこに、友一と寛太が最前列にしゃがみ込んでいた。

智絵は、舞い続けていた。

(智絵ちゃんは、どこで、あんな舞を習ったんじゃろう)

智絵はまだ舞っているわけではなかったが、智絵の仕草は、齡、七十を超えた老人を感心させるほどあかぬけていた。

智絵は、友一と寛太の前で、はらりと一舞すると座敷に戻った。

見物客の目も座敷に戻ったが、ひとり、いっきさんだけは目を戻さなかった。

友一と寛太の姿が消えていた。

(ははあ)

といっきさんは、ぴんときた。

(神社に行ったな)

友一と寛太が三人娘の舞を見物しないことなどありえない。おまけに、二人が消えたのは、智絵が二人の前に行ったあとである。何かある、と勘ぐるのが当然ではある。

(考えてみれば先生もおかしい)

靖之は、今朝、電話で、奉納のあと余興をやりたいので社務所を利用させてくれ、といってきた。今まで、そんなことは一度もなかった。それに、駐在さんの話もある。何か、企みが進行していると考えるのが妥当であろう。

いっきさんは、縁を立ち上がった。

驚くお梅さんに、

「河童大明神のほうも、おもしろそうじゃぞ」

というとお梅さんも立ち上がった。

いっきさんは、月の光が作る影の中を足音をたてずに移動し、お守り売り場の横から境内を見回した。

寛太がいた。

(なんじゃ、あれは)

と、いっきさんは思った。寛太は、神社と社務所のあいだを首をやたら左右に動かして歩いていた。

(見張りのつもりじゃな)

いっきさんは、苦笑している。寛太は、不審者を見張っているつもりなのだろうが、だれもない境内を、子供がひとりで、しかも、きよろきよろしながら歩いているのである。不審なのは寛太のほうであった。

(あれでは成功するのも失敗するじゃろう)

いっきさんは、あきれながら寛太の後ろに近づいた。寛太は、いっきさんに背を向けて不審者を見張っている。一度も振り返らない。見張りの用をなしていなかった。

いっきさんは、後ろから、

「これ」

と、寛太の肩をつかんだ。

振り向いた寛太は、声も出ない。ただ凍りついて、いっきさんを見つめている。

寛太はそのまま、お梅さんの待つ、お守り売り場の横に連れて行かれた。

「何をしておったんじゃ」

と、いっきさんが聞いても、寛太は何も答えない。寛太が、答えないのは織りこみ済みである。いっきさんは、かまをかけた。

「河童のことじゃろ」

というと寛太は、見るも無惨なほど狼狽した。

いっきさんは、二つ目のかまを振り下ろした。

「ぜんぶ、知っておるぞ」

寛太は、あっさり而降伏した。

「何をしようとしていたのかだけを簡単に話せ」

というと、寛太は実に要領よく、かいつまんで話しはじめた。

寛太の話が終わると、いっきさんとお梅さんは、寛太を連れて神社正面に向かった。

正面近くまで来たとき、友一の叫ぶ声が聞こえてきた。

いっきさんは、袖の中から鍵を取り出すと階段を上った。

本殿の中に友一と一平がいた。友一は、鍵をがちゃがちゃいわせながら河童さんの手の箱を開けようとしていた。二人の会話は、あらかた聞こえている。

いっきさんは、二人に向かって声をかけた。

——開きはせんよ

いっきさんのことばに振り返った友一と一平は、呆然と立ちすくんでいた。

その二人に、いっきさんはいった。

「鍵はここにある」

そういうと、鍵を一平に差しだした。

「これで鍵を開けて、権平さんの手を持ち帰るがええ」

いっきさんの目が一平を見つめている。

一平も、いっきさんを見つめ返していたが、しばらくすると目を伏せて首を振った。

「そうか」

といっきさんは、なおも一平を見つめている。

「それでは、わしが取ってやろう」

いっきさんのことばに、一平が驚いて顔をあげた。

いっきさんは、一平には目もくれずに箱に近寄った。

友一が、近づいてくるいっきさんに押しだされるように箱の前から身を引いた。

いっきさんは鍵を開けると、箱の中から河童の手のミイラを取り出した。紫の風呂敷に包まれていた。

いっきさんは、両手で捧げるように持った河童の手を、一度、恭しく掲げると一平のほうを向いた。

「さあ、取りにおいで」

優しい声だった。

一平の目は、いっきさんの両手に乗せられた紫の風呂敷に吸い寄せられている。

(あの中に、じいちゃんが)

駆け寄って風呂敷をはぎ取り、じいちゃんの手をつかみたかった。松の刀傷が思い出された。じいちゃんの悲鳴が聞こえるような気がした。一度も見たことがない、手首をなくしたじいちゃんの姿が見えるような気がした。

(持って帰ったら、ばあちゃんは喜ぶ)

ばあちゃんが、じいちゃんの手を持ちながら嬉しそうにしている姿が目には浮かんだ。

(でも、お母さんは)

と、不安になった。一平のお母さんは、小言を言わない。一平が失敗して落ち込んでいても、いたずらをしてお母さんに迷惑をかけても、うまく物事をやって得意になったりしていても、笑っているばかりである。

お母さんの小言は決まっていた。

——ひとのものを盗んではいけません

——ひとを妬んだり、羨んだりしてはいけません

——ひとにむごいことをしてはいけません

——嘘を言ってはいけません

の四つだけである。

一平は、小言を言われそうになると、この四つの中のどれがくるかを予測する。たいがい、当たった。たいがい当たるくらいだから、どんなことをすれば小言を言われるかも分かる。ここで、じいちゃんの手を持って帰れば、お母さんから小言を言われるはずであった。

じいちゃんの手は、太郎さんが斬り落とした。じいちゃんが、自分から太郎さんにやったもの

ではない。しかし、今は、村の人たちが宝物として大事にしている。大事にしているだけでなく、毎年、お祭りをしてじいちゃんに感謝している。じいちゃんの手は、村の人たちにとってなくてはならない大切なものなのであろう。

(それを盗むのは泥棒だ)

と、一平は思った。いっきさんが差し出してくれているとしても、それは、一平が神社に忍び込み、手を取り戻そうとしたからである。

——ひとのものを盗んではいけません

という、お母さんの小言が聞こえてくるようであった。

(お母さんが喜ばなければ、ばあちゃんも喜ばない)

それは、一平の確信である。

(手を持っていかないと、ばあちゃんは悲しむだろうけど)

と思うと、寂しい。

(おみやげ話は、いっぱいあるけど)

この村に来るまでのこと、村を初めて見たときのこと、溺れそうになったこと、人助けをしたこと、捕まえられて逃げまわり助けられたこと、初めて見た町のこと、ドライブの帰りにいたずらしたこと、そして、今日のこと ——

(失敗ばかりだったけど)

どれもこれも、心に残る思い出であった。

(お父さんにも、じいちゃんにも会えた)

闇夜に浮かぶ幻のような面影だったが、一平の心には、父と祖父の姿がくっきりと刻印されている。

(それに)

と、いっきさんの横で心配そうに一平を見守っている友一を見ながら思った。

(みんなに会えた)

仲間たちの笑顔が心に染みいるように甦ってくる。

(友ちゃん、寛ちゃん、良子ちゃん、和美ちゃん)

四人は、一平と歳が似通っていた。

一平と一緒に笑い、一緒に逃げまわり、一緒に冒険をした。

(智絵ちゃんと先生)

二人は、一平より年上だが、いつも、一平を優しく見守ってくれた。

(それと、駐在さんも)

駐在さんは、一平を見つけながらも見逃してくれた。

(それと)

と、目の前で一平にじいちゃんの手を差し出す老人を見つめた。

(名前知らないけど、このおじいさんと、後ろにいるおばあさん)

二人は、一平を取り押さえるどころか一平の願いを叶えようとしていた。

(この村で、ぼくは)

みんなに助けられたんだ、と思った。

一平ひとりでは、何もできなかつただろう。

(みんな、優しかった)

そう思うと、涙がこみ上げてきた。

(もういい)

心は満たされていた。

(じいちゃんの手を持って帰らなくても、ばあちゃんもお母さんもきっと喜んでくれる)

顔を上げると、涙を拭いながらいっきさんに言った。

「じいちゃんの手を大切にしてください」

そう言うと、一平は頭を下げた。

いっきさんは、しばらく黙って一平を見ていたが、

「持ってみるか」

と声をかけた。一平は、首を振った。持たなくても、じいちゃんの手は、いっきさんが大事に手のうえに載せている。それで充分だった。

「そうか」

というといっきさんは、一平に向かって河童の手を恭しく掲げ一礼すると振り向いた。

「強い子じゃ」

と、お梅さんの声がした。

いっきさんは、手を収め、箱に布をかぶせると友一を見て言った。

「よう、頑張ったの」

微笑んでいた。何を頑張ったのか分からなかったが、友一は照れくさそうに笑った。

「寛太も、よう頑張ったぞ」

とお梅さんがいったが、寛太は笑わない。顔を伏せたままお梅さんの横に立っていた。

「一平は、お梅さんの家に泊まるとええ」

と、いっきさんが言った。

「お梅さん」

と、一平は驚いている。

「わしの家じゃよ」

と、お梅さんが言うと、一平が振り向いた。ぽかんと口を開けている。

「どうかしたかの」

お梅さんは、笑っている。

「ばあちゃんがよく話してました。お梅さんとか、いっきさんとか.....会ってみたいって」

「ほお」

と大声を上げたのは、いっきさんである。

「わしのこと覚えていてくれたか」

一平は、あわただしくいっきさんを見ると、

「じゃあ、おじいさんが」

と勢いこんだ。

「わしが、いっきじゃ」

ばあちゃんは、ふるさとの村のことをいつも夢を見るように話す。村を知らない一平には夢物語としか思えない。その、夢物語の登場人物が、今、一平を挟んで立っていた。ばあちゃんの夢の世界でたゆとうているような不思議な感じがする。

「その話は、ぜひ聞かねばなるまいて」

と、いっきさんは笑った。

「さて」といっきさんは、のんびりした口調である。

「行くかの」

というと、歩き出した。

「友一も寛太も、わしの家においで。あとからみんなも来るじゃろう」

といいながらお梅さんは、寛太の頭を撫でてている。寛太はまだ、しょんぼりしていた。

お梅さんが歩き出すと、友一は、一平の肩をひとつぼんと叩き寛太に歩み寄った。

寛太が、顔を伏せたまま上目遣いに友一をのぞいている。任務に失敗して見つかってしまい、顔を合わせるのがつらいのであろう。

友一は、笑いながら親指を突きだした。

一瞬、寛太は、びっくりしたような顔をしたが、すぐに笑い返すと親指を突きだした。

友一と寛太の親指の腹がくっついた。

それを、一平が、不思議そうに見つめていた。

「それにしても」

と、いっきさんの声が聞こえてきた。もう、階段を下りてしまったらしい。三人があわてて走りだした。

「智絵ちゃんの舞が見れなかったのは残念じゃた」

社務所の向こうから、上を向いて歩こう、の大合唱が聞こえていた。

「いっき、一生一代の不覚じゃ」

「なに、また、じきに見れるじゃろ」

「おお、文金高島田で祇園小唄を舞うか。それはええのお」

というと、大声で笑った。夜の帳にたたずむ鎮守の森を揺るがしそうな笑い声だった。

山の端に、入り日が落ちようとしている。

夕焼けが西の空を真っ赤に染めていた。

東の空には月が顔を出し一番星が光っている。

暮れなずむ村の一本松のもとに、いっきさんとお梅さんが神が原を眺めながら立っていた。

「もう、一平は旅立ったかのう」

と、いっきさんが目を細めた。

「無事に帰り着いてくれさえすればのお」

お梅さんは、そういいながら両手を合わせた。

「みな、別れがつらいじゃろう」

いっきさんがいつになくしんみりと言うと、お梅さんが目元を拭った。

昨夜、お梅さんの家に、みんなが集まり、夜遅くまで語り合った。

駐在さんまでやって来た。駐在さんは、

——三左右衛門めは、わしが始末する

と、見得を切った。遠山の金さんがもう一度出現することだろう。

翌日は、みんなが学校から帰ってくるまで一平は、お梅さんの家で過ごした。

子供たちは、学校から帰るときにお梅さんの店に寄り、一平がいるのを確かめると、飛ぶように家に帰って飛ぶように戻ってきた。

やがて、靖之がやってきて、智絵が帰ってきたのは四時を過ぎていた。

空はもう、夕陽に染まり始めていた。

しばらくの間、お梅さんの家で、また語り合った。いくら話しても、話は尽きなかった。

もう夜になるぞ、というお梅さんのひと言で外に出ると、まだ西日は、山の端にかかっていた。なかった。

——だまされたあ

と、子供たちははしゃいだが、すでに夕焼けが濃い。

お梅さんが作った弁当を車に積み込むと、一平を乗せた車は、神が原に向かってお梅さんの店をあとにした。

お梅さんは、店の前で一平と別れた。

一平は、涙を流していた。

「ばあちゃん、ありがとう」

それ以外は、涙につまり何も言わなかった。

お梅さんは、一平の手を握りしめ、

「無事にのお。ばあちゃんによろしゅう言ってくれ。便りをくれよ」

そういうお梅さんの声も、とぎれとぎれに涙に震えていた。

車が見えなくなるまで見送ると、お梅さんは一本松に向かった。

お梅さんは、ぼんやりと神が原を見やりながら一本松の袂に立ちつづけた。靖之の車が帰って

くるまで、ここで待つつもりだった。

やがて、いっきさんもやってきた。

いっきさんは祭りの後始末で遅くなり、一平と会えなかったことを悔やんでいた。

「もう、弁当も食べ終わったじゃろう」

いっきさんが言うと、お梅さんは、

「あまり遅うなると、じきに夜になるからのお」

と、心配そうにつぶやいた。

「しかし、なんじゃな。よい思いをさせてもろうた」

と、いっきさんが頬笑んだ。

「ああ、しかし、わしらは、河童につらい思いをさせてしもうた」

お梅さんも、いっきさんも、河童たちがこの村を出ていった理由を、昨日、一平から聞かされ、初めて知った。

お梅さんはいった。

「申し訳ないことをした。せめて、ひと言、一平のばあちゃんに会って謝りたい……」

最後のほうは涙に消えいって聞こえなかった。

いっきさんは、神が原に目をやりながらうなずくと、

「河童の呪いも解けたようじゃな」

と、松の幹をぽんと叩いた。

「呪いがの」

といいながら、お梅さんが幹の刀傷をのぞき込んだ。

「ほお」

と、お梅さんの驚く声が出た。

生々しい肌色をさらしていた傷跡が茶褐色に染まっていた。しばらくすれば樹脂が覆い、刀傷も消えるだろう。

「一平が」

と、いっきさんはいうと大きく息を吸い込んだ。

「呪いを解いていつてくれたんじゃろう」

夕焼けを背にした神が原に宵闇がかかろうとしていた。

「松も、もとの姿に戻るかのお」

とお梅さんがいうと、いっきさんは、

「戻らずともええわい」

と、笑った。

いっきさんは、幹をつかむと松の木を振り仰いだ。

「このままの姿で、百年でも二百年でも胸を張って生きていけ」

神が原より愛をこめて

残照が神が原に落ちていた。

一平は、神が原から山へと登る雑木林を背にして立っている。

「ここからは坂が険しいから、ここでいいよ」

一平は、そういうと、みんなの顔を見渡した。

「一平」

と、友一が笑いながらいった。

「気をつけて帰れよ」

良子は、泣きそうな顔をしていた。

「急いだらだめよ。休みながらね」

一平は良子に、ほほえみながらうなずいた。

一平も、そのつもりだった。今日は、これから坂を上り、少し歩き、川の流れが緩やかになっているところで寝る。お梅さんが作ってくれた弁当のおかげで、腹ははち切れそうなくらい満腹だった。

寝るだけ寝て、休み休み川を遡り、夕方になったら、そこで魚を捕まえて、ゆっくりと夕食を取り、眠りにつく。河童の里に帰り着くのに時間はかかるが、旅は、無事に帰ることが目的である。冒険は、旅の途中の経験であって目的ではない。

「一平、それ、注意してな」

と寛太が、一平の胸を指さした。

一平の首に大きなひもが掛かっていた。ひもは胸まで垂れて、そこに、大きなお守りのような袋がぶら下がっている。その中の小さなガラス瓶にきゅうりの種が入っていた。

お梅さんが用意したものだった。一平が父の庄平のことを話すと、お梅さんは、座談の場から少し離れたところに座り、きゅうりの種を和紙に包んだ。種を包んだ和紙をいくつも作り、ひとつひとつ油紙に包んだ。それを、お梅さんは空き瓶に入れ、しっかりと蓋をすると、さらに油紙で幾重にも巻き、手ぬぐいで作り上げた分厚い袋に入れた。さらに、袋の口に、針金とゴムひもを通して吊り手を作り、首にかけたひもに下げられるようにした。これで、少々の衝撃にも水にも耐えられるだろう。

「うん、大丈夫。きっと持って帰る」

一平は、寛太を見ながら口元で笑った。

きゅうりの作り方は、お梅さんから習っていた。一平のばあちゃんは、河童は田畑は耕さないといったが、一平は、きゅうりを作るつもりだった。きゅうりが実れば、一平の家族だけでなく、里の河童たちは、みんな喜ぶに違いない。何よりも父が喜ぶだろう。

「一平ちゃん」

と、和美が涙声で両手を差しだした。和美の小さな手の平のうえに、もっと小さなセルロイドの人形が乗っていた。小さいが、和美の一番好きな、女の子の人形だった。

「和美ちゃん、ありがとう」

一平は、和美の両手を下からすくうように両手で人形を受け取った。川に行く一平にとっては、少し困る贈り物ではある。

(おかを歩こう)

と一平は、決心した。一度、来た道をたどるのである。注意深く、川に沿って、休み休み行けばいい。休んでいるときにこの人形を見れば、みんなが力を与えてくれるに違いない。

和美の人形を両手に持ちながら一平は、子供たちの右側に立っている智絵と靖之を見た。

一平に投げかける二人の頬笑みに涙がこぼれそうになった。

「お世話になりました」

と、深々と頭を下げると、

「一平君」

と、靖之が言った。

「さよならは言わないからな」

一平の目から、涙が溢れ出した。

「一平君」

と、智絵が呼びかけてくる。

一平は、涙でかすむ智絵の顔を見つめた。

「また、みんなで遊ぼうね」

一平は、二人に応えようとしたが唇が震えるだけで何もことばが出てこない。出てくるのは、嗚咽を堪える息づかいだけだった。

涙を腕で拭うと、一平は、四人の友だちに振り向いた。一平の顔が笑っていた。

良子と寛太、和美が、泣きながら一平を見ていた。友一は、涙に濡れた目で一平を睨みつけていた。噛みしめた唇が震えていた。

一平の笑い顔が友一を見た。

友一が、まだ唇を震わせながら一平に笑い返した。

少しして友一は、あの、いつもの笑顔で一平に笑いかけると、大きくうなずいた。

一平も笑いながらうなずき返すと、寛太と良子に笑いかけた。

寛太と良子は、泣きながら笑い、そして、小さくうなずいてくれた。

一平は、引き締めた口元で笑いながら寛太と良子に力強くあごを引いてうなずき返した。

和美はまだ、泣いていた。

一平は、和美の前にしゃがみ込んだ。

「和美ちゃん、また会おうね」

和美は、泣きながら一平に小指を差し出した。和美は、しゃくり上げるだけで何も言わない。頬に大粒の涙を幾筋も流しながら一平を見つめている。

一平は、小指を和美の小指に絡ませた。

「会えなかったら」

と一平は、和美に笑いかけながら、あとのことばを催促するように言った。

和美は、首を横に振った。

また、一平は繰り返した。

「会えなかったら」

和美が、小さな震える声で応えた。

「針千本、の一ます」

そう言いながら、和美はしゃくり上げた。

一平がおどけて言った。

「ぼくは、飲みたくない」

「わたしも」

という、和美の泣き顔に笑いが混じっている。

「飲みたくないもん」

「また、会おうね」

「うん」

和美は、泣き笑いの顔で元気よく答えた。

一平が立ち上がった。

ゆっくりとみんなの顔を見渡すと右手を挙げた。手には、和美の人形が握られていた。

「じゃあ、また」

そういうと一平は、背を向けて歩きだした。

友一が一步前に出た。

追いかけてはならない。

友一は、一平の背中に向かって叫んだ。

「一平、またな」

友一に引きずられたように、寛太も一步前に出ると叫んだ。

「一平、会いに来るからな」

一平は、林の中をぐんぐんと登っていく。

木々に、一平の身体が見え隠れしていた。

良子が叫んだ。

「一平君、頑張っってね」

良子の隣で、和美が絞り出すような声で叫んだ。

「一平ちゃん」

一平はもう、坂を登り切ろうとしていた。

「一平君、みんなによろしくね」

と、智絵が叫んだ。声が泣いていた。

「いっぺーい」

靖之が、声の限りに叫んだ。

「みんな、待ってるぞー。ずうーと、待ってるからなあー」

一平が、坂を登り切った。

一度立ち止まり半身になって一平に呼びかけている仲間たちを見ると、和美の人形を握りしめ

た手を高々と上げた。

一平の胸で、ガラス瓶の入った袋がペンダントのように揺れていた。一平は、まだ知らない。ガラス瓶の中に、河童大明神のお守りが入っていることを――きっと、権平の霊が、一平の帰路を見守り、一平を護ってくれるだろう。

一平の姿が坂の向こうに消えた。

夏にお別れ

月の光が神が原に差していた。

淡くけぶるような光に誘われて智絵と靖之は、神が原から村を見おろしていた。

「不思議だったね」

と、靖之がつぶやいた。

遠くで川の音がしていた。

子供たちの騒ぐ声大きい。別れの悲しめで、子供たちは、心に傷を負った。しかしその傷は、太郎が松の木につけた刀傷とは違っていた。

一平の残した心の傷は、傷跡に、生きようとする力を秘めていた。

子供たちは、その力を、知らず知らずのうちに持ち寄っていた。持ち寄られた四つの力はひとつになり、悲しい気持ちを栄養にして瞬く間に大きく育ち、子供たちの心を豊かにしていた。

元気になった子供たちの声を聞きながら、智絵は、何も言わずに村を見ていた。

明かりに乏しい小さな村が、月の光に包まれて静かに息づいていた。

「この村で」

と、智絵がつぶやいた。

「ずうっと暮らしたら後悔するかな」

靖之に尋ねる口ぶりではない。

智絵は、自分に問うていた。

「たぶん」

と、靖之がいった。

「後悔しないと思う」

智絵がそばにいてくれたら、という想いを胸の奥にしまい込んだ。

気配を感じて、二人は振り向いた。

子供たちが、神が原の真ん中で智絵と靖之を見守っていた。

友一がなぜか、照れくさそうに頬を搔いていた。寛太は、顔を伏せながらも上目を剥いていた。和美は、良子の後ろに隠れて顔だけ出してのぞいていた。良子だけは、両手を膝に当て、腰をかがめて真剣な顔を突きだしていた。

「こら」

と靖之がいうと、友一と寛太が逃げだした。

良子が、靖之の顔を見て、うふっ、というように笑った。

あわてて目をそらす靖之に代わって智絵の目が良子を叱った。

良子は、舌を出しながら肩をすくめると二人に背を向けて走りだした。和美が、あとを追った

。

「おーい、こら」

と、靖之が子供たちに呼びかけた。

「そこは、神様が踊りを踊られたところだぞ。踏み荒らしたらだめだぞ」

「だったら」

と、振り向いた和美が言った。

「わたしも、踊るもん」

そう言うと和美は、村の鎮守を踊り出した。

友一と寛太が、村の鎮守を歌いながら駆け寄ってきた。良子も、歌っている。

子供たちの足下に、月光に淡く夏草が揺れていた。

夏草のところどころに赤や白や黄色の花が顔を出し、夏草の絨毯は、夜空に光る星々へとつづき、流れる雲のうえから上弦の月が子供たちを見守るように顔をのぞかせていた。

「智絵ちゃん」

靖之が振り向いた。

手を差し出している。

「ぼくたちも行こう」

智絵は、うん、と小さな声でうなずくと靖之の手を握った。

靖之と走りだした智絵の瞳に輝く天の川が流れていた。

(きっと、あの子は)

と智絵は、一平のことを思いながら靖之の手を強く握り返した。

(この村の神様の贈りもの)

さわやかな風が吹いていた。

鹿児島島の山奥の小さな村に、夏の終わりを告げる風だった。

(おわり)